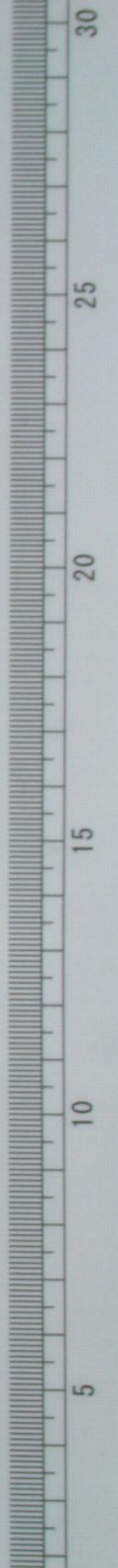


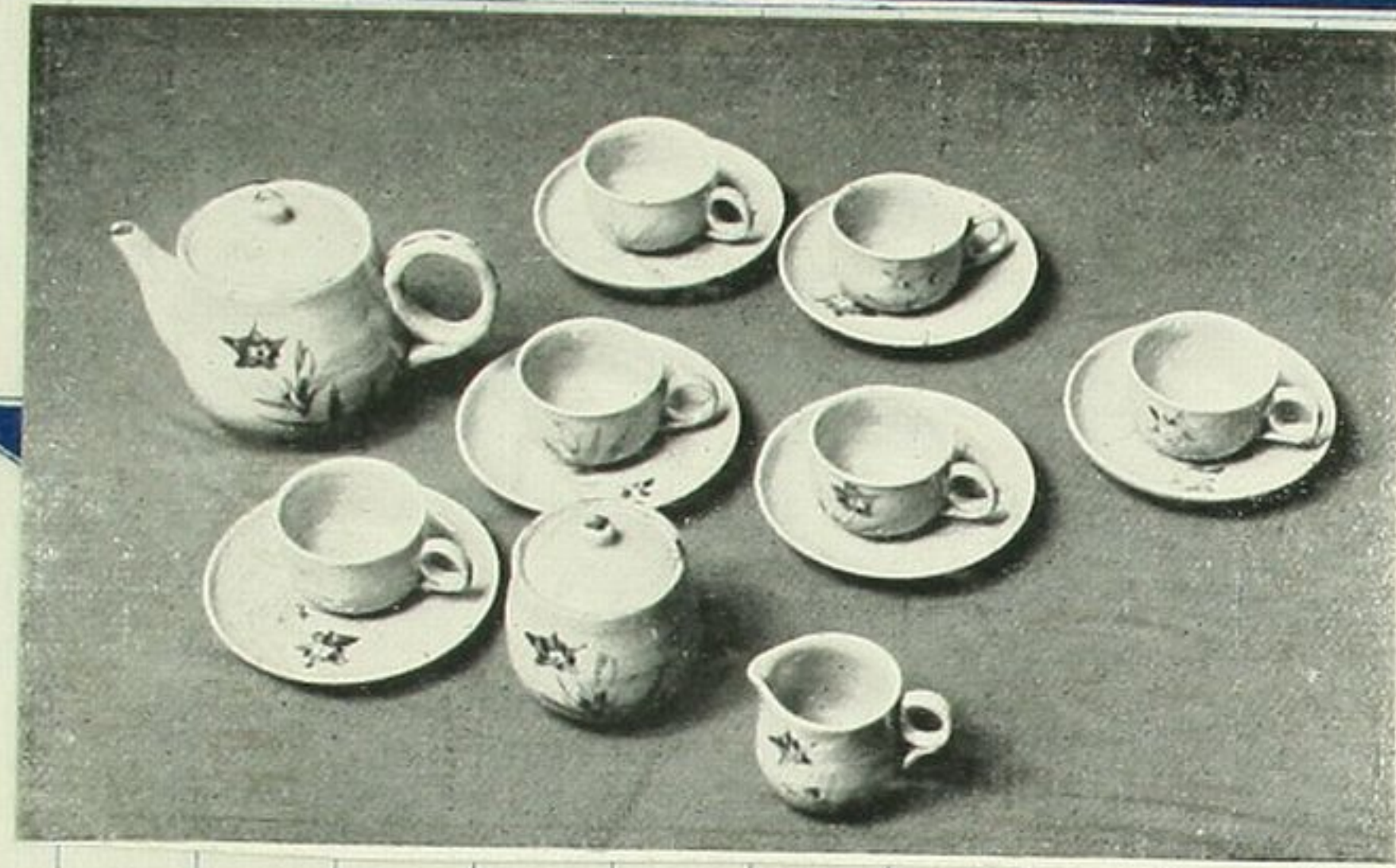
我樂多志

六

昭和十年九月中浣起筆

特別
14
1919
469





我樂多誌

昭和十年九月下浣起筆

○杉山瑞岩寺の初為古梁南
 山腹の里に二巻を齎す
 一巻は全巻
 紀行その他一巻は全巻
 神歌を綴す。紀行の末に、寛
 政十一年初冬三日書於
 公亭とあり、紀行を就し
 見ると秋の菊の節と全巻の
 温灸に淑人院の紀とよく
 乃古梁の紀行三四の保存



黄鼎筆 華峰仙館

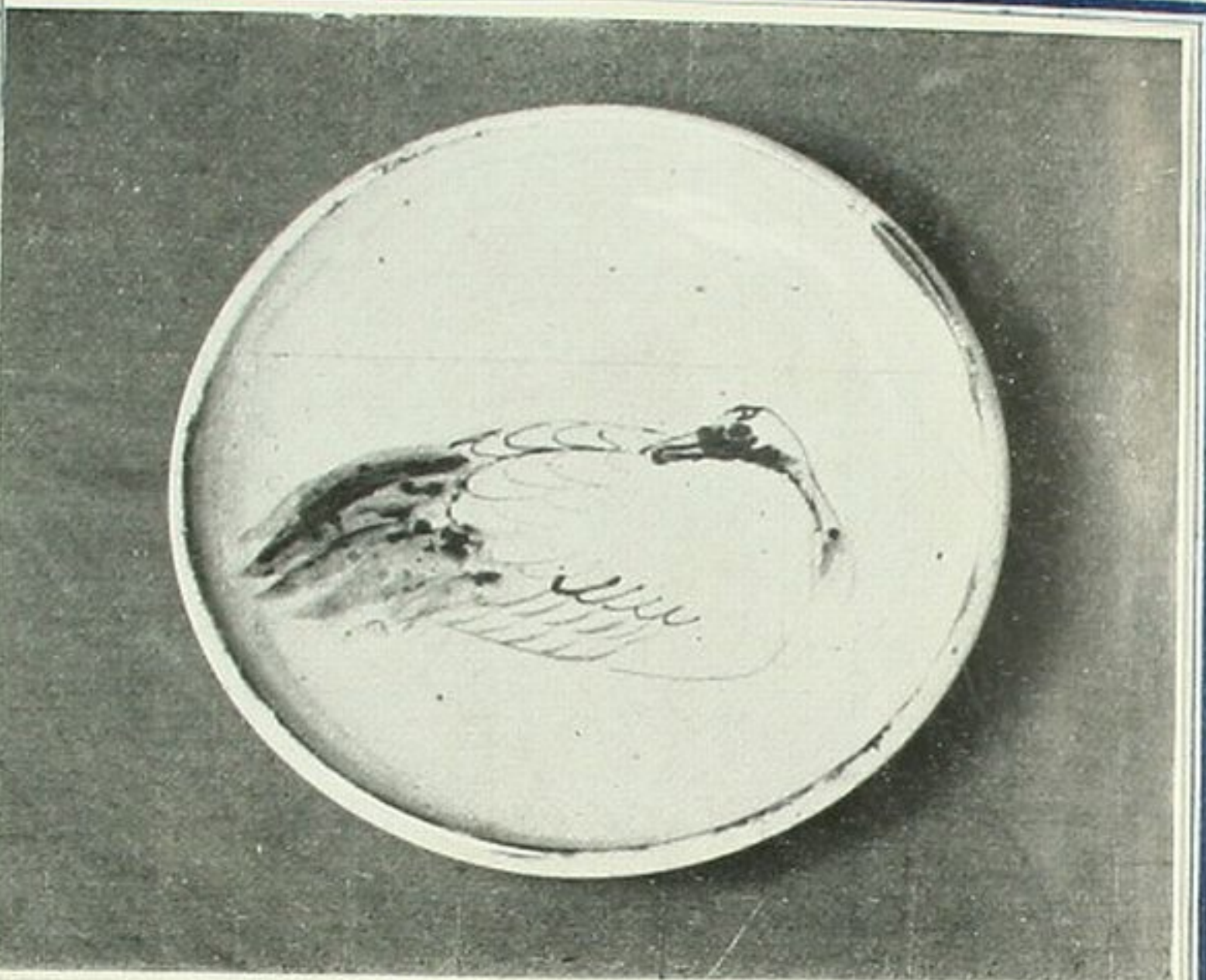
(山水屏幅中の第三幀)

高一尺五寸七分・闊一尺二寸二分 紙本

澄懷堂書畫目錄卷七所載(鎌倉芳太郎氏所藏寫真原板に據る)

ち〜お紀行より見ると、詩歌の部は、凡人の二
 の句あり、二共共に画を揮ふ古来の筆を以て
 以て紀行の和文より狂歌の交りあり、その
 能文也に行ひ、邦語有身有問忙無念無
 の偈を冒頭に掲ぐ、後歌半偈尾まゝと書す
 予此偈を愛す、而も如此、よもあらず、初めを
 〇天兵保す件、の全額がわかれ、此の強奪は二年
 四月に満ち、被殺人六十人、と高親撰の者、邦初
 度の内亂罪にあり、禱書の之を乞ふ、元から其
 あたふに、思ひの思ひ、**第一**、ち文、**第二**、憲
 あり、思ひ切つれ、企てあり、内閣會議の上、傍よ
 り爆弾を投する、以て陸軍の佐官の如く、つて

漢字



之首が、田んぼと、子鳥を、活刺、まゝ、の、か、捨、針
 此の金を、投し、花、坤、一、擲、の、大、山、を、冬、が、れ、の、た、が
 此の者の、言、勤、め、此、古、件、が、氣、づ、か、ん、れ、い、つ、も、個

〇全体を率い、主、動、者、を
 〇(と)と、ま、れ、後、士、の、其、任
 〇(を)を、**第一**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第二**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第三**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第四**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第五**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第六**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第七**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第八**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第九**、の、能、力、あ、る
 〇(を)を、**第十**、の、能、力、あ、る

柳の事件が騒動するに山家初と誤ることか此
 件も強弱のありきであることか去来うろうと馬
 りの敗んたツインレット中七のありか どうせやる
 らないことをやんね。死に一も、吾人の其氣概を
 愛す情もその其の方途の字キを得ること。
 ○此今いやる河魁は陸軍の美儀新いじりか
 有る。今いふ者も言論の自由が無い、あきり
 いじめんと遂に身破れん士鏡もあをを証す
 るもの、而も溜り多世間美法部の為の田渡
 ますもの一人れもある。言論の自由の地を拂
 つた、械闘説も言論の根柢をも固家の
 大根柢す。

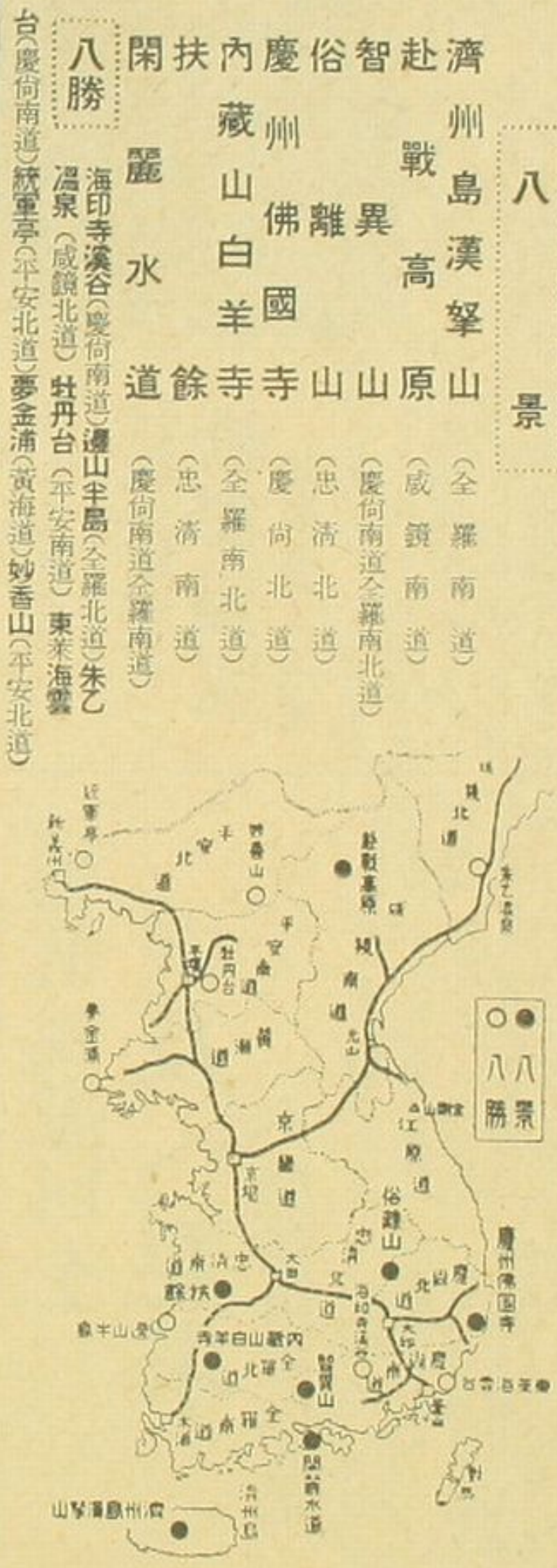


○最近東京の諸宗家の調査による
 昭和九年末の市内寺院統計一八
 七四、所属の僧侶四三〇一名檀家
 数二六〇七七九戸、其各込合布の
 数を見ん、次者(二〇〇院)廿三(一七二
 院)下谷(一六二院)他区も枚りお
 多、宗派別の見ると浄土宗の四二二院
 最も多く、真言宗の三九二院及び
 日蓮宗の三四二院之んす非き、檀家
 数で日蓮宗の二一〇二三戸、真
 言の五三九八二戸、浄土宗の四八六五
 戸及び真言宗の四八五二〇戸、分断

然他を抜き日蓮宗が都下に大なる勢力を有してゐる

朝鮮八景並に八勝決定

【京城發】朝鮮施政廿五年の秋、大君主催朝鮮八景選定の投票はすばらしい人気と各地方熱狂のうちに去る十日締切つた。投票總數三四、三三四、九三一票（無効二、六二九票）といふ觀衆の數を示したか、いよく最後の決定をすべく廿日午前十時から京城中央郵便局で今井委員長以下各委員出席八景決定委員會を開催。厳正な投票の整理を承認し左の如く投票數の順位により八ヶ所を朝鮮八景とするに第九位から第十六位までを八勝とし永久に記念することとなり今井委員長からこの旨宣言した。



○淺谷の祝方を宴へしるゝ一ヶ月武汗あるかむら



まのの浅谷(通)からせりてはる毎朝
四時から五時まではまのの浅谷の
湯もよみか約二千人あると云ふれ
のひびきするに。

祝言を誦めし給ふのよの漢民
談の帰化人が推古天皇の時宮戸
川辺に住まはたし師匠真中知と云ふのが徳信の得
れと云ふるをのり、待乳山といふ後世字を道人
がよむ或い真中知と云ふるが縁故かあるのか
らひかと或る人いふも。

○スルストイの二夏の曆を渡すといふる勸告の
法が出てあるが中入ソロモンといふ言ひと云ふ法が



出せぬ。二人の婦人あり一人は
 自ら罪を犯したことを知りて
 ある。他は一人の何れ罪を犯し
 たことあると云ふ事ある。此
 婦人等が長きと遇つた時
 夫を別々の罪故を尋ねた
 一人の口より云ふ。罪の深から
 ぬことを白状しぬ。他は
 一人全く無罪であるかの
 やと云ふに云やくしておれ。
 長きの罪科を定めしめる。
 婦人、命して大きき罪を

持て来し。他の一人の夫を深山持て来し。此
 後長きの妻も命してと取りて来し。坊や
 夫と来しと云ふ。大石を持つて来し。女の容も
 元の如く石を度し。小石を拾ひて女の女の
 細か石の女の所を一つに隠しての女の女の
 夫を女と云ふ。そのと長きの云ふ。ソコ大
 きな罪を犯し。人の夫を記隠してある。夫
 罪を悔悔しする。小石の罪を犯し。罪を
 とも思はず。深の罪を重む。自か。知ら
 ない。小石を拾つて。どこか拾つた。知ら
 ぬ。と云ふ。微罪を戒め。罪を出て
 みる。微罪。夫。忽ち。罪。積り。

中より身之好記の二門ありに折法書抄國權
書法法書と合せて七元なり身之雜記と
て包括するに敢て差支無の故に思ふ或り
身之好記と法書とを中より法書と分つて七元
と七思ふ。

の熱海所有志が坂の傍りの為景慕の碑と建人
と撰文を金子筑おふ法ありてまゝか出来れば
道邊の下に往々の批評家ありても文章が定
稿を包むる終に自分の意を五十字力力の稿と
共に持来り余の判定と雖貴も待つことと
つに自分の筆名の行を可なりあるの終心も
かくれぬ人のまゝい法書をまじらる。自分の金

名文を長く書くことを欲しむるのびあらずと
とせぬ本もあつた。前つて出来れば法書
とせぬ。

口内道邊の書の上の性徳にありて自己七番
く知らるるが、山田の法書を新刊すること
を得た。あの人の本姓は奥田で、道邊に嫁
就して著家とすられたる。鶴飼 記と云ふ人
らありて永信通八の世流に此人が著家とす
たのむらう、道邊に他人のえせまの記に、自己の
書に道邊と云ふの英文を書いた記録があること
て美し書のことと考へてある抄子が、臨終時
道邊に山田に此考の内容を著すこととせしむ

八木前二任がすしと云ふはと云ふは山由の事と讀んぬは長
 久保の如きもの未亡人の事と保あさんとするは
 此の今も未亡人が垣内家へ来た際より市時迄迄の
 此世帯の下をわけて今も其父の如き閑支の山本
 松月を以て膝下を託したといふ事とあるは而も深
 川の松本を以て子孫とある事と云ふは誰れが垣内か
 未亡人の事か否か生々氣候を以て出散し知れず
 是者店ひあつたらうと山田の云ふ事と垣内が大
 久保の丁町の邸宅を居言する事永富が資金を出
 した事と云ふが其のいづれか而も此の事は一割二割の
 利益はと云ふが此の事分は山田の云ふ事と毎月
 四十圓の利益を持つて其の事未亡人をたぬれと云ふ

保あさん

ありあは



山 口 蓬 存 柿

〇原数の日誌が由史公論
 と表裏をなして其の
 と持て差支の事い部分の
 文摘録も其の政治其他の
 秘重なる人びとの事とい
 は標本なる(と云ふ事)といふ
 事には但し自今の感一は
 こといふ流八年(と云ふ)日誌
 を開きし事い事い事い
 の前(と云ふ)人びとの事い
 文書と相違を有し得

此の夏方の家も加りり五七のぬす家が試験の合を
 借しんヌのほやりの切り板の荷物の末尾にぬめを
 ちるが、試験の後日果の熟るをばしんヌの合を
 リ、熟るのすこしにのぬす家の魚の鳴の
 熟るの合をばしんヌの合をばしんヌの合を
 一程の走斯ともなる熟るの合をばしんヌの合を
 もあつたともあつた、甚れんぬす家の合をばしんヌの合を
 をばしんヌの合をばしんヌの合をばしんヌの合を
 しおント熟るをばしんヌの合をばしんヌの合を
 係から錯覚を生じしんヌの合をばしんヌの合を
 ポント熟るをばしんヌの合をばしんヌの合を
 と少くも。

廣川操



いで湯の雨

廣川操

のぬす家の合をばしんヌの合をばしんヌの合を
 注ぐ池初めのお漲り石を載せし柳子漸や
 に没す、夏時一ふく池底露る、茶花の
 生、七分のぬす家の合をばしんヌの合をばしんヌの合を

九月廿三日記

とあるから思ひはた。

の左にぬの比にこそきけはが旋法にありけ。自分いこ
んを春却さるることかき来前アア、こんだ、エこと侍
を推しの書かせたのと思つたことかあつた。熱海
び武の農家の出湯は馬か、身身をききまをあらうし
てぬのをも、そ友道も道とせ、管へて油傳の秋
判をきき、今つたるおんをこんをこのかあつた。
此は、とらんうつたも道も道を思ひ出た、さういふ
くればまゐ

○秋の句と矢野に記す

秋来ぬと目もさや豆のめとろ丸大江丸
馬鹿つらん白き髪をぬけたの秋丸

秋来ぬと目もさや豆のめとろ丸大江丸



月新家田

筆雪關本橋



筆原栖内竹

葉紅柿

春の紅
秋の紅葉

初鳥や秋の朝かきあふさき
 秋の隙ころいそふこり又つらぬ
 つまらぬ日を虫もぎくうそましく
 枯んぬる時のとそらけり秋のそら
 宿刈りて天おにこわいものそら
 戸を叩く煙を秋を掃みけり
 積りまぬ柿のしほの面の七みちの秋のかたみ
 りけり大ねわら
 ひととぬおこさきはぬあま〜
 けりつとつ七みちけりの上
 勝の秋のしほけり既柿のそら
 おあんと時めく柿の柿のそら

源内

獲はりし竹の竹と云く

香は不員名身香勝又は、又和年魚珠可
爛、屋以一年為一生、寸之春上、枕花お、敢伍
汚地老、雞、雞、蘭、碎、玉、折、君、休、傷、人、生、百、算
如、字、の、耳

○石田三成の刑場より、のん道、すから、梓を借めん
とも病、さりのこと、あて、断、つ、比、こ、あ、の、言、義、の
深いこと、ん、どう、せ、殺、さ、う、命、比、こ、あ、て、病、と、重、ふ
ま、う、こ、と、き、不、善、生、を、や、る、の、の、自、愛、を、知、ら、ま、い、あ
の、あ、り、業、比、。動、あ、る、も、自、愛、の、念、あ、る、ま、い、死、の、刹
那、も、自、愛、を、つ、け、放、ら、ま、い、ぬ

○晋一准んやんが、教もん、に、女を、魚、を、喰、べ、る、句、い

うーは、に、の、類、の、愛、味、や、名、古、方、し、ま、る

かり、ま、う、ら、ま、う、く、ら、う、の、こ、い、る、味、ま、う、一、折、の

酒、吞、の、く、く、喰、べ、る、干、か、ん、い、
品、目

す、ん、ば、ん、の、佐、味、を、ま、て、思、ん、け、う、
若、方、

白、魚、の、子、持、ん、こ、う、と、い、や、る、ま、う、
團、者

あ、の、こ、り、を、信、託、さ、る、え、え、一、洗、經、
養、者

白、ひ、ろ、の、推、し、こ、か、う、一、懸、こ、う、
御、守、成

す、ま、し、に、は、ま、い、あ、く、こ、い、け、ま、り、お、
妻、女

喰、べ、い、く、ふ、果、て、の、氣、の、ま、ま、海、原、に、
氣、丹

雞、汁、を、く、く、へ、ん、出、が、氣、味、こ、う、し、
間、身

つ、ま、み、ぬ、踏、ま、ま、く、さ、ま、い、し、
ち、女

どころもろくろくしてゐるもの難事
 の方の喜ぶに夜よつて七も長くお市参り五万文
 午の浸みお盆をせいお盆一お盆行りの
 災厄を生じたるをいふお盆二石二斗九升と

云のんてぬさか、ん
 にお野あにぬ界
 の二倍とあるとま
 今朝一石のやんれか
 まぶら凡のつ、くも
 九月廿五日。

△△△△△ 兩貯水池の二倍

○……大東京に降った雨量
 東京の雨量二二五ミリ(坪當 六千六百七十八坪也に中央
 二石二斗九升)はまさしく 氣象官調査の雨量坪當り二石
 昭和七年秋以來の大レコード 二斗九升也を乘じて見た答は
 だが、一體大東京中に降った ナンと三億八千廿一萬九千
 雨量はどのくらゐか——東京 四十一石二斗といふ途方もな
 市調査による大東京地域一億 二億に開かせたらこ
 れが黄色色のパンとくくる奴だ
 つたら一と咽喉を鳴らすこ
 とだらうか……といふので大
 東京市民の咽喉をうるはす村
 山、山口貯水池の最大貯水
 量が一億八千二百九十五萬二
 千石だからさきのこの雨はザッ
 と二つの貯水池の二倍強も降
 つたわけだ

硯滴だより

南 山

○ 先日、三越の古書展で驚
 いたことは、古今名士の手
 紙が、定價をつけて山のや
 うに積んであつたことで
 す。二三月前の白木屋の古
 書展でもさうであつたが、
 さすが書道ばやりの時代だ
 など、つくづく思はせられ
 た。

○ 字が乘れば一人前とさへ云
 はれてゐる。明治時代の文
 人は、名筆家が多かつたや
 うです。二葉亭はもとより、
 紅葉でも、一葉でも、露伴
 でも、いづれも一家をなす
 人達です。

○ 現代人では、某々大臣の
 が一圓五十錢で、尾崎行雄
 氏が五圓です。尾崎氏は
 決して上手ではない、いや
 寧ろ悪筆でせう。しかしよ
 く悪筆家が、ことさらにそ
 の悪筆を糊塗するため、へ
 んに上手ぶつたなぐり書を
 したのとはちがつて、實に
 整々堂々、怯めず憶せず、心
 ゆくまゝに、大きくのびの
 びと書いてある。末技に囚
 はれず、眞に墨痕淋漓です

○ 市島春城氏のは、半きれ
 紙に三行書いたのが三圓で
 す。枯淡な味を秘めた仲々
 の達筆で、開けば本誌に寄
 せられる原稿なんか、畫仙
 紙の便箋に、毛筆で縦横に
 書いてあるさうです。

○ 書では手紙が一番よくそ
 の人の性情を寫す。改つて
 書いた軸物や幅物より、遙
 に眞情が流露するもので
 す。知名の人達は、間に合
 せに軸幅に都合の好い字は
 かり習つてゐるから、不用
 意な字ばかり出て来る手紙
 の下手さかげんは、まるで
 別人のやうなものもありま
 す。

○ 近刊の物
 於法經書に
 こんふ書の
 評判が載つ
 てゐる、自分
 のふも言
 してゐるから
 こゝにぬめ
 笑つておれ

危険を保証人が連累の如く生涯高利貸の苦のえ
比の幾人もある。和田恒海三郎といふ此類の商の
ある。三宅雪嶺も高利貸の著名な者といふ
いつれや自ら語つて難法を自ら書いたのを又此
がある。好ゆき道徳の家を建てる時三郎の高利を借
り、返向を洗うさうに比の比話利がよかつた。その
話がある。私等が保蔵してある。及人の手代に
く連累の高利の仕末を聞かせることがある。高時
を語つてゐる。

東京大文の如く自然に成るに一種の金融法があつた
當時は荒干の給費と受けておれば、加ふる総理の
給費額から一回減して、及洋二枚するが一回を給する

こと、し。其の及洋、西洋旅行の連債を長命を
月二枚つゝ及洋させると、美を下章り、ある人が
纏キ、その志を望んで比、誰か及洋を而倒
へ、比、殊に理科の学生は、格利を抛棄して、
又氣の付いた、私等が其の及洋権を貰うに自れ、
勝手なことをおき、格りして六枚、三回ハ枚者
け、四回とも、から牛肉代位する、洋山の、但し、
を及洋する、と、え、と、面倒、ある、野と、
主義で、よい加減、文字を並べ、及洋権、不有者の
請求、方、判と、取つて、是と、合、持つて、行け、
と、浦心、して、金と、流し、と、いふ、
今、と、熱、行と、熱、と、いふ、

策カヤのたふらんと誤り小智るる此の時機を消したるハ
 一以九月十三日のこととせらる。

のハリニリーの背後に悪めか囁いてゐる。彼らの悪毒を以て
 き運ん今と云ふを以て引こみかつらぬ。既に二十数万の大
 軍を動して元帝の軍と衝突を果してゐる。英國の地獄
 や聯軍の讎争を以て聴て退却せんとムツリニリーの
 四四の勢力を以て墜するに相違なき。伊太利の戦敗は早
 く戦端をいさき一蹶と勝を割てんとするもあきらむるに
 而刻をこえては戦端がひらけざるの心、ムツリニリーセ打
 つ事もかまらぬ。懊悩の状もある。エチラピア側も
 敵を成すべく内部を引入れ、此の国の戦端を去るかと思
 へり。

深淵



悪女(悪女の女神)の深情 悪女の女神「悪女の女神」
 わたしを捨てなすね、おれを来しつへたて。

の深淵にある。戦端が去る
 かの悪毒の為り、戦端が去る
 が爆発する。エチラ
 びやは善悪の心、伊太利の
 威一ハ利カぬ。伊太利
 全よ負けたから、エチラ
 紛持がある。利権一戦を往

さんハ伊太利の心かつらぬ、ムツリニリーは彼ら何人の
 戦後を齎す物んとするの心ある。此の伊太利が
 外交と誤るハ、英土に心をあきらむ。英國を敵とす
 ハ伊太利漸かき。

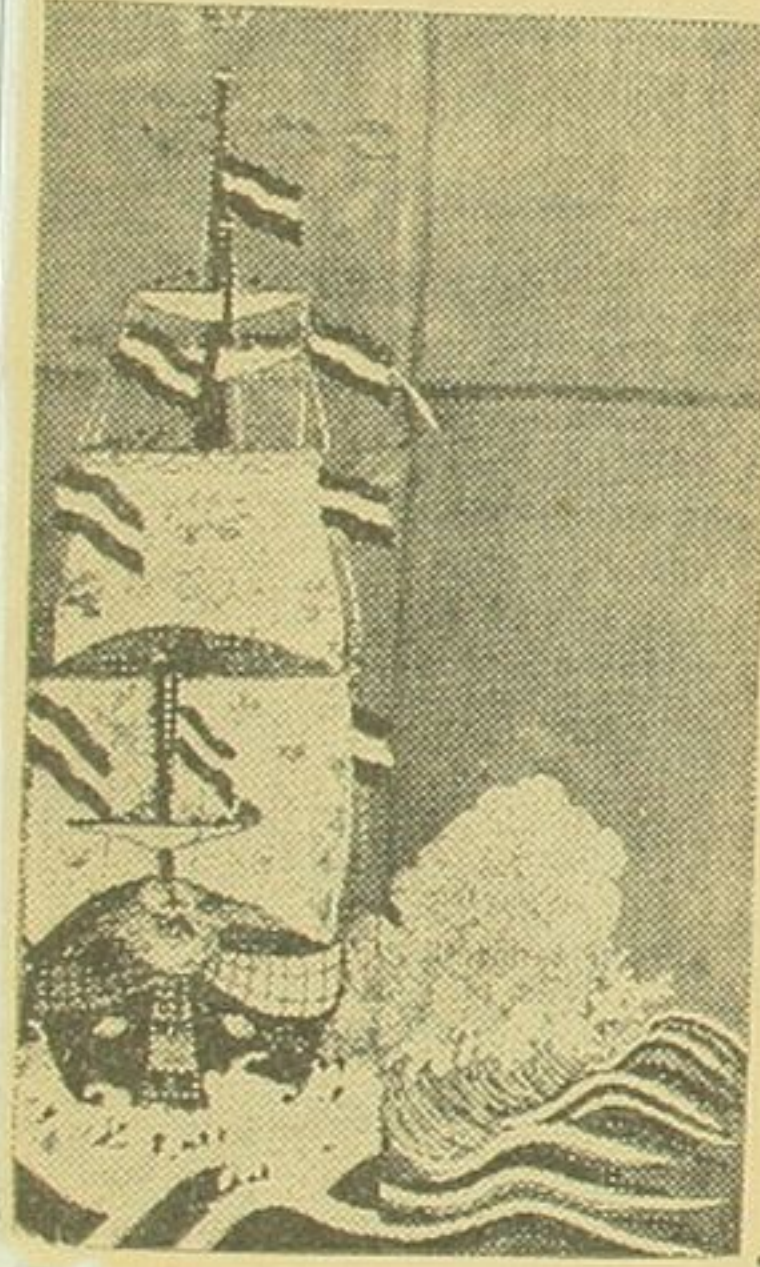
送す流りてゐる、或人へてある、減る新らしい
 念法的の法比と装束の、自分の数人も、見ん
 ことが何れか、このか、新装の法、早く男女の間
 へ行いしあつてゐるのか、男子が、薄く、精進、即
 ち新装の女が、月経く悪血を排出する、其補とな
 るのか、此の輪血が、七月経の後、深を思ふ、の
 新装を、欲するから、いふ、と、云ふ、と云ふ、
 の新装の、本日の配本ある、翠の金、金、
 我画、二冊、京装の、名優、圓の、ある、翠の金、金、
 華者、何人、う、か、の、う、う、う、と、此の、者の、刻
 ハ天、頃と、推して、流、後の、圓、三、六、を、お、り、各
 傳、上、身、と、拙、く、表、情、姿、態、其、二、画、の、あ



異國趣味の珍

長野畫伯所藏二點

「をかしたもので私がかう
 やつて集めてゐると、自然
 にあつて、それから持ち寄
 つてきてくれるので、いま
 では大分敷も多くなつてき
 ました」といふ日本美術院
 同人長野草風氏は、永見徳太
 郎氏、山村耕花氏など、同
 等をなせる南蠻物の蒐集家
 である、その蒐集したうち
 の珍しいものを、感嘆する
 と「阿蘭陀船刺繍」と「歐
 人喫煙圖柄鏡」とを出して
 くれた



「南蠻人喫煙圖柄鏡」の方は、寛永以前、の作で、直径三寸五分の鏡の裏に
 煙草を喫つてゐるおちんだ人と、煙の葉とが描かれてをり、右に「天
 下一若狭」と刺印されてゐる、これも當時の風俗をしのぶ、嗜好の資
 料で珍重たといはれる

おちんだ船が描かれ、その右
 には大砲の煙があらはれて
 る、これを入手したのは京
 都五條諏訪町の尊福寺から
 で、この製に添へて、並屋梅は
 か八人の女名前の奇進帳があ
 る、これから察するにこの製
 は、恐らく島原の太夫のうらか
 けの袖であつたらうと思はれ
 る、長さは三尺で船のマストの上方に
 は抱き拍の紋が縫はれてをり、構想と
 技巧からみて長崎工人の作と推量され
 るが、大正七年に、楠木清方氏が「試み
 る、日」と題して、長崎圓山の遊女が踏
 着せてゐたのは、偶然の一致であつた

と、人の多く之
 んと、今、此、比
 以、平、金、を、難、波
 の、古、楽、と、云、ふ、
 或、ハ、東、部、の、
 こ、こ、北、信、示、と
 受、け、ん、と、い、ふ、
 つ、ま、い、か、と、思、ふ、
 其、の、際、心、が、多、い、
 ま、ん、と、知、る、本、今、
 序、段、の、文、を、お、
 十、七、巻、の、概、つ

讀書の境地

市島 春城

昔し九州の某藩の儒者は長く心懸けた佳書を得た時、大いに喜んで、這般の佳書は俗地に讀むべきでない、藩に暇を請ふて、箱根の清閑の地に、十數日讀み耽つた事がある。一寸奇矯のやうであるが、讀書には確かに境地を選ぶ必要がある。騒音の喧しい市井にシンミリ書物に親しむことは不可能である。讀書の場所は氣の散らない所で無ければならない。學校は讀書の場所となつてゐるが、教場のやうなザワ／＼した處は讀書に好適の場所では無い。由て多くの場合學校に附屬して圖書館があり、校外にも獨立の圖書館があつてそこは騒音を絶対に禁じ、椅子テーブル案に至るまで清潔を旨とし、居心地のよいやうに出來てゐる、學徒が就て讀書すべき境地はここである。曲亭馬琴の小説の批評家として知られた、讃岐高松藩の家老木村默老と云ふは、騒音の讀書を妨げることを厭ふて、大きな鳥籠やうのものを作り、息ぬきだけ明けて、紙で貼りつめ、中に小机と火煙を置き、その中で讀書したと云はれてゐる。如何さまこれも一つの工風である、本居宣長の書齋は二階にあつて、讀書や著述中は、人の上り得ぬやう段梯を外したと傳へられてゐる。讀書家の最も厭ふのは俗用を帯びた客人が頻々と來て讀書を中斷せらるゝことである。種々の立志傳に物置や倉庫に隠れて本を讀んだと云ふ苦學談があるが、讀書家は斯くまでして妨害を避けてゐる。讀書には清閑が必要であるのみならず、多くの時間の連続が必要である。そ

★

こで或る人は温泉場を選び或る人は病院を選び、或る人は當直の時を選ぶ等、區々であるが、温泉場の長滞在、入院や宿直の無聊を消す爲め、讀書に耽るのもよい方便である。

獄中なども獨房に居れば讀書の好適處である。易斷で知られてゐる高嶋吞象は、獄中で易を修めた、彼れは自分の運命を占ふため、易の研鑽を初め、長い間の攻窮で得る所があつたと語つたが、死活の岐路に立つて懸命の研究であつたから會得が出來たのであらう。頼山陽は若い時座敷牢に入れられて、詮方なしに歴史を修めた、あの長い禁足が無つたら、或は日本外史は出來なかつたかも知れぬのだ。自分なども筆禍に罹つて入獄した時、許をいでてヒスタの哲學書を携帶した、此書は二書で二千頁もある浩瀚のもので、到底數月の暇が無れば讀過の出來な専ら之れに没頭したからである。

旅行の船車の中も讀書の好適所である。旅舎も亦同様である。長時間語るに人なき汽車や船中に、何が寂寞を破るかと云へば、書物こそ好伴侶である。平生讀んで何等感しないものも、斯る場合に讀むとシン／＼と感ずることがある。畢竟氣が散らず一心に讀み且つ味ふからであらう。旅舎に數日滞在する時、孤覺蕭然として黙讀靜思するとシミ／＼書味を感じるのも、一書に専らで他の妨げを受けないからであらう。旅中に携帶すべき書物は何にても人々の好む所でないが、要は多くの書を携へないことである。多くの書を携帶すれば氣が移つて専することを得ない。可成は一書に限ることだ。

姉崎正治博士は内外の旅行に必らず詩歌の本を携へるを常とし、歸旅匆々の場合は、簡単な讀み物に限ると云つて、漢詩を和歌に譯するのを旅情を慰める一法として居らるるが、詩歌は實に達者である。汽車旅行などで旅客の出入の頻繁である時などは詩歌の如き簡單のものが最も適した讀みものであらう。併し旅行それ自身が讀書の如きもので、到る處の風物に接すれば見學で得る所が多い。其の見學を助けるには多少の書物が必要、地理歴史が第一必要である。土地の形勢や其の歴史を知らねば何んの感興も起らない。吉田博士の大日本地名辭典など

賣書の竟地

は地理歴史と共に備へる好著であるが、彪大の本を携へるのが不便であるとして、或る人は、幾十冊に分冊製本して、必要の分を鞆に携へる工夫をしたが倣ふべきである。地誌ばかりでなく、アソシエイテッド、ブックを帯携することも必要である。例へば水戸行きは義公烈公の著信州行には象山の著、備前行には熊澤蕃山、と云ふやうに、其土地の名家の書を携へ、其土地で讀むと一段の感興を覺へる。

王摩詰白香山等

三田村 魚

夏は文選を讀むことにして二年つゞけ、白香山に轉じ、黄山谷となり、柳々州となり王摩詰となり、韋蘇州となり、今夏に及んだ明夏は何になるであらうか、しかし今んところでは王が一番よろしい。白も夏二つほど賞玩した。そのお馴染はいつまでも失せぬ。けれど飽きた。柳は、つも目新しくよめる、斯うした楽しみに十度の夏を過しました。

る場合でも聖書を携帯してはどこに行くにも論語を離地に訪ふた時も、温泉場にヤント論語が上げてあつた信頼する書物を離さないの合追憶するが、田舎に於て二三の座敷一杯に書物を曝れが寛心に此上ない愉快のどんな書物があるかを知る

自分は青年期の事を此場夏期に曝書をやるので数日らすことを例としたが、ことであつた。自分の家のが此時であつた、自分は漫りに好む本を捜がし出して、曝書の中に横臥して讀んだことだが、曝書期も實は讀書の好適期と云つてよい。自分は又圖書館の經營に當つて見たが、書庫にいろ／＼の圖書を漁るのも一興であつた、考證などをやる學者の特に必要とするのは書庫に入り自在に圖書を漁ることである。カードや書目などで名を検して借り出す煩を避け、自から書庫で検索すれば何んでも出て来る。半日も書庫内を右往左往に検索をつとめれば、**美極**の通り得る。・・・亦讀書の一段地とし、海寺さるものだ。

日昨の、教養の浅きと春の後返と自動車を駆り
下任を仍れ老翁大橋と行き橋ふらぬの池邊と又此
中河のくち中流に後返りし小屋をのりて水に没し
てゐる。附此の氏家もある浸みし、屋敷の依地も
湯みと湛く、こゝもみ果のありたこととわつた。吸
きかゝり大橋をさるる、星程がある。感心し、此の
川更その北の市街に相高活氣のあることとわつた
此、書架の時六十と越のいれ年輩、春の生を
とある河に復興か出果る、こゝもわつた。自
らも、又組むあつた、此、大後十教員も任じ此の
其況もえらうつけ、感概が深かつた。 九月廿七日記

この大金と異つて島銘の他の料理は一切その
自らの蒸し膳からして其家と飲食したるのみ
も時々の出さしめ、酒田と其家の入るも其家が
後のいさゝか、新屋の作り方がおもしろく、
来りて、其自と大金、如き、其家が、
得意とする、其の朝の作り焼と卯焼は、
あつた、近所のトト入の、
いさゝか、後、不、前、の中、法、今、も、や、り、を、
あつた、料理、の、や、り、を、天、越、
の左側、今、大、増、の、あ、り、を、
一、二、以、酒、徳、の、あ、り、を、
二、三、以、酒、徳、の、あ、り、を、

酒田

あつた、や、り、が、久、しい、こ、と、違、入、つ、た、こ、と、
の、あ、つ、た、家、が、ち、ん、や、と、ま、あ、家、の、田、名、を、
和、洋、ま、り、ま、せ、と、料、理、を、す、入、ん、こ、ま、じ、
家、の、近、年、始、め、入、つ、て、閉、口、
店、を、ま、り、と、ま、あ、其、家、
し、つ、つ、あ、つ、て、
趣、が、あ、る、今、の、中、元、世、の、右、側、の、マ、ッ、チ、
の、飲、食、店、が、あ、つ、て、自、分、が、
洋、食、に、ま、つ、た、
此、亦、此、膳、を、
と、島、屋、が、あ、つ、た、
と、山、人、が、テ、バ、の、注、文、を、

水禍日本

地震で名を賣つた日本は、去年と今年の水害でもう一つ有名でない名物かふえた。特に去年と今年だけでない、どんな年たつて日本に水害のない年はない。日本の地勢上河川が狭く、短く、急激であるといふ溢れるに都合のいい條件をそなへてゐる。このへもつて来ても、颶風といふ悪戯者がデヤン／＼雨を運んで来るのだからたまらぬ。

大體から見ると、水害は時とともに増加してゐる。内務省で水害にやられた河川、港灣及び海岸、道路、橋梁、用水の被害復舊費と田畑、米、穀その他農作物、宅地その他土地建物、船舶などの損害額を合計して、水害を金額で表はした統計を作つてゐるが、それによると次のやうになる。(單位千圓)

明治廿五年より卅四年に至る十年間平均	復舊費	九、六八一
諸損耗	二九、五三三	
合計	三九、二一四	
明治卅五年より大正三年に至る十年間平均	復舊費	一三、一三二
諸損耗	二六、七二四	
合計	三九、八五三	
大正四年より十三年に至る十年間平均	復舊費	二一、五四八
諸損耗	三二、九九四	
合計	五四、五四二	
大正十四年より昭和九年に至る十年間平均	復舊費	四一、五二二
諸損耗	五八、八二八	
合計	一〇〇、三五五	

明治中期に毎年四千萬圓ばかりの被害がつたものが、この五年の間毎年一億圓を水で流してゐるわけだ。勿體ない話である。然り而して昨年は、復舊費一億三千五百八十萬四千圓、諸損耗三億九千三百四十九萬五千圓、合計で五億二千

年平均一億圓づつ 水に流す勘定

九百廿九萬九千圓といふ猛烈な數字。これは近畿、北陸、四國方面が颶風に襲はれて大水害となつたためだが、今年も五回の颶風に見舞はれて昨年より小規模ながら、近畿、九州、四國、青森、秋田方面、これに今度の關東地方とあ

恐るべき 明治以來の記録

を襲ふものが増加したためといへやう。このほかに積極的な原因として、山林関係の人は民有林がだん／＼濫伐されて山が裸になる、そこへ雨が降ると持ち切れずに土砂が崩壊する、それが流れて川底を浅くする。これが洪水の増加する原因だから、植林を行つて山を治めねばならぬと主張する。しかし最大の原因として、天の仕業と手を拱いてばかりの大雨は洪水は二年續くといふ古老の言葉通りになつたが、氣象台には手が出ない。いはんや雨を食止めるとなると、これこそどうにも仕方がないわけだ。

つて、昭和五年に改修を完了してゐたからこそ架橋堤防決壊をまぬがれたので、改修以前にこの大雨が降つたら、東京まで水が来て、荒川、足立区、葛飾區の工業地帯は東京灣に流されることになつた。それから、所謂河川統制下川のの上流に大貯水池を作つて大水のときに水をためるといふことも必要だ。日本の川は性質が悪くて、八、九月に出水する際に出水期前には濁水となつて、灌漑や水電に不便を起すから、かうした貯水池の水を濁水期に利用するのでも出来る。これは米國あたりではやつてゐるが、日本ではあんまり考へられてゐない。

二年続きの大水害に驚いて、内務省、農林、商工、鐵道、逓信の關係五省が十月一日から協議會を開いて、対策をねるといふ。早く何とかしなければ、今後被害物はよく増えるばかりだから、水害の撲滅はさう／＼急務になるから

〇早や起きよとすめれ朝息も漸やくすかして赤
 花を見せぬふ賀のあ代の句に朝息やまよと燈火
 の影もあつしとあやうし夜はゆめゆめゆめゆめ
 花といふと、折風の句もあつしやうに、朝息や蚊屋
 のゆめゆめ子あけし朝寐するよも流石に様
 ろうと花を又る。朝咲へは夕べまで保れよ短かい
 運命のあつし何故に毎朝欣然と開く
 のあつしうか、榊花一朝の采もとまふこととめ
 何れも果るのあつし、其の家草の花を又るまよと
 まよ一茶の所唱の慾面の朝息れんと咲きけり
 と形容さん、其之勢に急措くも咲き乱るまよ
 朝息やおのあつし、其之勢に急措くも咲き乱るまよ

まろりれを、興つ春の二字を好くも名としれと云ふ此
を、此れを、自今も同じく七と確し助と云ふれのを
引し理由が今の名と有りれ。實の今の名は生んれ時の
名を、是に後、此の、ある。何故、と思んれが、多分徳川
氏、是れに、此と云ふか、あるれ、の、思んれ、對し、遠慮しれ
の、か、あ、う、と、存り、合つれ、酒次長尾が、洋り、中、ア
ル、が、入、と、禁、下、ち、高、山、春、に、罹、つ、れ、活、か、出、れ、ア、ん、が、不
二、い、中、士、山、の、信、お、歎、と、高、と、を、因、ふ、と、云、ふ、ま、ん、一、派
自動車、の、登、り、の、心、僅、う、の、河、に、風、十、が、激、変、す
この、心、の、病、の、罹、つ、の、漸、次、を、登、つ、て、わけ、が、以、氣
に、候、ん、ら、ら、病、の、罹、つ、こ、の、い、ま、の、う、れ、と、云、ふ、れ、併
後、例、の、こ、と、と、為、成、話、の、時、を、移、し、て、退、散、し、れ、九月

後例のこ

廿七也

○秋山陽の題画の待幅を齋く、未、こ、の、あ、る、廣、草
こ、の、え、り、き、こ、の、あ、る、も、書、に、無、理、多、く、題、連、を、能、す、
待、の、集、中、の、二、連、一、あ、る、の、き、左、の、録、す、

書、又、為、流、軟、若、中、又、又、又、山、手、未、工、却
相、示、生、形、破、著、古、成、層、嶽、勢、携、堂

○木崎ぬゐの論、是、を、傳、つ、旅、徒、山、陽、と、此、の、山、陽
切、時、の、ま、と、記、す、杖、料、は、す、と、母、の、梅、颯、の、日、誌、中
の、ま、の、ま、と、左、の、ぬ、め、を、お、く、

の「だ膏藥」が世に弘まつてゐた。

春水は新婚の翌年—安永九年五月、老父を迎へ、附添に來た杏坪に留守を託し、妻を携へて京都へ案内し、椽颯は古體の名文で、その紀行を書いてゐる。九月にまた歸省した時、妻懐胎のまようを聞いた又十郎は、よろこびのあまり、初孫を男子と見込んで、「久太郎」の名をえらび、その誕生を待ちわびつゝ、特に黒染の産衣を早手廻しに大阪へ送つて來た。「久かたのあめのめぐみにならへよ」といふにいはひて、おくる産衣は「一首に久太郎の名にちなみ、天の玄徳を意味して、その祝意をこめてゐた。玉のやうな久太郎は、やがて出生して、その翌年—天明元年の夏春水夫妻が初孫をかゝえ、歸省した時のうれしさに、又十郎は鶴の地紙に二首

「名づけゝる、ひさ太郎とも、よびはやす、千世をこめたる、つるのもろごへ。」

「いはふぞよ、幾久太郎、ひなづると、ともに千歳を、ふるもうれしき」

また「忠孝」の二字を筆ぶとに書いて、守袋にをさめ、夫妻の睦じさをめで、

「子もさかえ、うまごも榮え、老が身も、若がえるべき、心地こそすれ」

「老が身の、こゝろのまゝに、したがひて、しづけくつかふ、ことのうれしさ」

と椽颯がまめ／＼しくかきつづいてくれるのをよろこび、その名の靜を詠み込んでゐる。

そのよろこびが重つて、春水は、その年に寫本した「大日本史」全部の大冊を、藩主松平〔淺野〕安藝守重晟へ献上の手續きをしたのが、やがて採納せられた後、さらに藩の内命が傳へられ、大阪から單身、廣島へ出向したのが、十二月十六日であつた。その翌日、藩の儒者として「三十人扶持」の祿を給せられ、一躍士分に列して、直に城内の學問所開設とともに出仕することとなつたのは、門閥のやかましかつた時代として異數の拔擢であつた。

【下】

三、大阪・廣島の往復

〔承前〕天明二年〔山陽三歳〕の夏、春水は改めて上阪の途中、吉報をもたらして竹原に立寄り、大阪へ引返して、江戸堀の舊宅から立賣堀の里方へ移つてゐる妻子をはじめ、岳父義齋に披露した上、混沌社の送別會が生玉の西照樓に催され、五月廿八日、先發の後、棧廳は山陽を連れて海路を下り、母來島氏、妹直子〔梅月、後に尾藤二洲の後配〕等は、見送りがたがた同船、春水の歸藩より後れて、六月廿一日、廣島に到着した。

春水は、翌天明三年〔山陽四歳〕の二月二日、父又十郎の喪に會ひ、竹原へ還つた。その夏、廣島から義齋への手紙に「久太郎事、大達者、大の男に成申い」と消息してゐる。秋には江戸藩邸の勤番を命ぜられ、遊學の弟杏坪同伴、廣島出立とともに、山陽は母に従うて同船、再び立賣堀へ戻つたのは八月十六日であつた。

天明四年〔五歳〕の七月廿一日、山陽は可愛がられた外祖母來島氏を喪うたが、九月十六日には、江戸から歸藩の途中、叔父杏坪〔廿九歳〕は立賣堀へ立寄り、廿八日まで滞在してゐた間、いろ／＼おもしろいおはなしに傍を離れなかつた。杏坪も、それをいとしがりつゝ、「こゝしは知恵づきぬれば、いとわかれを惜むさまに見えたり」と、彼れはその紀行に、山陽に對する眷々の情を述べてゐる。

五年〔六歳〕の夏、春水は廣島へ歸る途中、四月廿八日、久方振りに山陽の顔を見て、その凛々しく成長したのに満足した。

四、故郷の執着

春水が江戸霞關上屋敷の勤番中棧廳は、その待ち久しさに、絶えず大阪から手紙を送つてゐた。

「久太郎も、ずいぶん息災にて、成長いたしまゐらせい。此ほどは、ことの外あまり、しか（叱）り申さぬ故、かりそめにも、おこ（怒）り、むづかりまゐらせいゆへ、たゞしは蟲のわざ

かとも存じゆへ共、見かけは申ぶんなく、たくましく、よく遊び申ゆ。」
 成育状態には何の心配もなかつたが、たゞ一つの心が、おこり、蟲が飛び出すのを氣づかうてゐるが、若しやそれが神經の昂ぶる「痲痺」を發する兆候ではなかつたか。

「脇差〔江戸より〕つかはされたきとの御事、もはや御調ひ遊ばしゆはゞ御越し、さなくば、さし料も御座ゆへば、御無用に遊ばさるべくゆ。」

「御越しの紫ちりめんも、袖なし羽織にいたしゆへば、出来ゆへども、最早、久くらひになつて、袖なしもよろしかるまじと存じゆ。」

江戸から送られた紫縮緬を、袖なしのチャン／＼に拵へては、六つになつた山陽には、チト不似合であらう。

春水は五月九日、妻子を携へて川口から發船、十二日に歸藩した。山陽がこの期間、故郷の大阪に留まつてゐたのは、足掛け三年に及んでゐたが、こゝに初めて廣島へ落着くこととなつた。

その秋、春水はまた／＼江戸邸へ向ひ、山陽は母の手一つに養育されてゐた。袖無が似合はないようになつた山陽は、叔父杏坪に伴はれて、よく外出したが、お盆〔七月〕の十五日に、本川のせがきを見物した歸り道に、どこでやら一びきの白犬を引つばつて戻り、これまで飼うてゐた、しるの代りに、それを新しくと呼んできげんよく遊び、九月七日に江戸へ着いた父から送られた、箱根細工の獨樂がまた氣に入りのおもちやであつた。終日、机にもたれて一心に字をかき繪を寫してゐる日もあつた。灸は家法の一つで、よくするられたが、それがあつて寝込んだこともあつた。月見には、いつまでも起きて、歌よむ母と風流を味はうたりもした。母の手ぬひの郡内縞を着て、髪も結うてもらひ、七つになつたお正月〔天明六年〕の元日には、脇差姿の年賀に、父の名代として外出、二日の試筆には、唐紙半截に「梅柳度江長」と唐詩の一句を大文字に揮うたのが今に傳へられてゐる、

正月十一日の讀書始には「大學」朱熹章句の素讀を叔父杏坪に學び、自後引つゞき、その薫陶を受け、大阪のお祖父さまからは「四書」の和訓本を記念として贈られた、それは後〔文化六年〕備後の菅茶山へ引取られて行く時まで行季に收めてゐた。その冬、江戸の春水から大阪義齋への手紙に、

「久太郎事、随分無事、怪しからずあはれ、叔父もこまりゆ様申越しゆ、如何仕ゆ哉、繪を格別相好ゆゆゑ、何事も繪本の外入用無之と申事にてゆ。」

それは武者揃ひの江戸繪本で、「外史」の著述に、遠くヒントが與へられてゐたことを思はねばならぬ。

九歳〔天明八年〕の春から夏へかけて天然痘をすませたところへ、春水は江戸から歸藩した。「お

と、様おかへりなされははど、はやく大阪へ」といはれたお祖父様〔七十二歳〕がなつかしく、
 榎も、久方振りの御見舞に、秋に入るのを待兼ね、二十十日の嵐を、瀬戸内に船がかりして、
 大阪に着いたのは八月八日であつた。十日ほどの間、義齋の膝下にいとしがられた合間には、
 波〔今、浪速區〕の曲馬や、義齋の弟、二世徳安滄浪に伴はれて角力見物がおもしろく、いざ出立と
 いふ八月廿日の風待に、一日發船の後れたのが、却つて里ごゝろを募らせ、廣島へ戻る氣にもな
 らず、

「久太郎は、なほ難波はなれがたくや、終日、よくと泣く」

と母の「日記」のまゝ泣いてくゞだゞをこねた。その涙で眺めた大阪のローカル・カラー、それは幼
 年山陽が、生れ故郷に對する愛慕と執着の深い現れでなくて何であらう。〔七・二、大阪毎日新聞〕



田の七井 何十回と入つて酒合へん交はれ此の風月
ハ此の爲に成るが東風の赤塵の賦から取て命しれ
名が確か主人は清白の節がある元は此の風月
月白一から風月の名を取つたと云ふは清白の号と
してもあさしいし菓子形の容もあさしいといふは
酒を飲むるもさうも思ひ出た。飯後松
坂屋前から地下へ入つて此の松屋へ乗り馬時を
引えんとする途に一人の朝鮮の如人が車中へ入
来此の例の麻の大きな袴をき着けとぬが好む體格
のよいせむ肥幹もよく腕力も優れとぬくくしいが
大きな籠を五六本も肩と背に包み別々にお物やう
のものを抱くてぬれぬくても所を重畳あるよめを担

漢文

帯したと思ふ位は所を流し給程度分の体はせ席を占
めし眼をつぶつて坐睡しが相筋をえうと相商よめ
めいある。ペテニートに送しい乳店方も色んぬの
のをえし。モトハサンの方勤婦人の乳のことと連想
しル(此うの前におく)朝鮮の婦人へも働く
と云ふが、えんをいさう一端を示すよめひあさうと感
しぬやんも有るんぬ着ぬれぬ。例の片所を踏
んぬ行くと木の入口に五六の金瓶が並べてある。女
の身も椋柏の類に女も姿態も雅ながあるを
足を留めると浮きうれ中へ在を中心と楕かか
すうとあこのが尤も目を惹いた。價百圓を下は
一個もあつては購ふ氣もたさうぬ。凡そ多量裁

此氣の多いもの、橋柄、
 の途、大木のミナチヤア、
 形、小兒の如く、
 採取、
 山、
 書籍、
 河、
 平、
 花、
 支、
 不、
 意、

舟の大幅、
 全、
 伊、
 日、
 地、
 自、



趣のバナワ

佐久間象山が讀んだ
百年前の和蘭雜誌

一八三一年といへば、
 今からおよそ百年前、
 歐小僧がハリツケになつ
 た前年だ。その時和蘭ア
 ムステルダムで出た雜誌
 四種、しかも佐久間象山
 が讀んで、中には赤い不
 審紙が貼つてあつたり、書き入れがあつた
 りする。



一體、日本人は、西洋に雜誌といふ
 面白い重寶なものがあつた事はオラ
 ンダ人から知つたので、これ等は、
 つまり、日本雜誌發達の種子を蒔
 いたものである。

所有者は長野市の屋北館といふ宿
 屋の主人、大の象山崇拜家で、その
 遺品を蒐集してゐる。
 一象山先生の遺品は、陛下の天覽に

供し奉り、宮様方もお覽遊ば
 され、展覽會にも出しまし
 たが、この雜誌を見せられ
 といつた人は未だにありま
 せん。だから日本雜誌史の上
 からそんな貴重な資料とは全く知らず
 ました」と最近その眞價を認められたのを
 喜んでゐる。

中を開いてみると象山は「モルトケ論」とか
 「手由論」とか「ナポレオン」の語句などを讀ん
 だと思はせるしがついてゐる。
 聖府の洋書移入の條りを勝海舟がしてゐて
 海舟の妹が象山夫人だから、その關係で
 これを手に入れたもの、由で、今日
 残るのは丁度十五冊ある。

伊東、
 日、
 地、
 自、

うつと着せぬ。さあこゝか出来ぬとて大評判の
向か来て宗匠が来て、こゝのおの、面白い神天
と褒めた、宜いお下りを頂戴。ようといふ下心、
めとや、奴もあつた。そこへ黙阿弥が何うの用も
行き合ひ、一生涯利徳のあり、心を動かさる
た、何れも、千口りと見え、用儀に移れば、
おのれ、多ん、其態、方を愛つた、他の奴、皆何の
こと、褒め、た、ま、あ、た、た、た、た、た、た、た、
の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
か、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
小園、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
心、用、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

清和が此文とそとの豪華者を扱つた、
例へば、皆、文つと、静、せ、た、黙、阿、弥、も、其、一、人、也、
の、家、ま、り、香、次、の、書、簡、が、百、五、十、か、ら、あ、ら、ま、り、
際、を、つ、け、れ、ば、い、ま、の、世、に、一、般、の、人、も、
又、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、
市、の、尊、厳、を、拂、つ、て、お、お、お、お、お、お、
と、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、
酒、も、何、れ、も、飲、ま、り、お、お、お、お、お、お、
い、ま、の、世、に、い、ま、の、世、に、い、ま、の、世、に、
か、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、
の、都、が、黙、阿、弥、と、ま、り、あ、ら、ま、り、あ、ら、ま、り、
阿、弥、の、来、信、を、扱、つ、て、丁、家、の、書、簡、が、あ、ら、ま、り、

空を渡りて思きりしんかきも。然阿弥の無礙を言んす
或の訪問しり或の全融の世法をやれんことか性後の予
紙を名しそめ。香以七宝を氣かある。心の大いにく
うあるを。市村庵の校書村の心者の連名やへ「スケ梅
阿弥」とし津島の若か出れんことす。然阿弥の香
以て信りし利を益を得れんことあつた。相違るいかに香以の
高き香時やも此人に任頼しん梅子が又くる。決り七都
間と同一く扱ふべきことあつた。うらむんことか阿弥の著
て大分印して来れ。

○此の紙は目録の紙を心よりあつた。御木本真珠
店の用紙（冊子の包紙）に左の如く収めらる。あつた。
技巧の一端しる。いふ。あつた。

○豊茂子の花記のちる本ハ大板琢本ハ花吉家の見ぬ
うもさるゝ北人のいづく著述もある中ハ歌よお伎十八
番考^レ世之長存考^レ後歌^レもあ伎年代記^レもあ
ちのそ^レ後割史^レ相宗の材料^レと供^レてある又ハ二橋本
考^レちのそ^レあつて、まゝ七出^レせぬ^レ江戸の古物^レも
市井の人の珍者を集めて物数^レあつた^レ。豊茂子
七代^レ人の珍者^レ也。北人の珍物^レは豊茂子^レの河内考
後の書いたもの^レと、黙阿彌と北人の交^レりあつて
はんま^レ新^レ河内の記^レす^レ。此の左の如く^レである

豊茂子^レの記^レす^レ、まゝ^レ母^レから^レ少^レは^レあつた^レ。
あつた^レこと^レの^レ記^レす^レ。

晩年^レの^レ淡路^レの^レ海防^レの^レ任^レつて^レあつた^レの^レあつた^レの^レ記^レす^レ。

初^レ河内^レの^レ黙阿彌^レの^レあつた^レ。後^レ河内^レの^レあつた^レ。時
々^レや^レつて^レ来^レた^レといふ^レ。いつ^レか^レの^レあつた^レ。女子
と^レなる^レす^レの^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。家^レ花^レの^レあつた^レ。後^レつて^レ豊茂子^レの^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。本^レと^レ呼^レん^レといふ^レ。豊茂子^レの^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。の^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。ま^レお^レ伊^レえ^レに^レい^レて^レあ^レつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。廻^レり^レあ^レつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。もの^レと^レいふ^レ。ま^レま^レと^レ家^レの^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。の^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。か^レり^レ依^レに^レい^レふ^レの^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。の^レあつた^レ。か^レつて^レ来^レた^レ。と^レ云
ふ^レ。

ふ本を能く干として豊茂子の花を叶の押さつた本を片
竹けろくも折々せんふ流をりせんれい

豊茂子の石塚姓が黙河橋に先以て文久元年十月十日の
六十二歳で歿したのが文久二年一月頃のものと推定さる
る黙河橋の平氏も豊茂子花者其叶のころか見え
るふ七令あつたときも後とある其の葉切の金を取
る非や二克といふもあつた目録を方々へ見せる必要
あつたし早く返してくれりもあつた。花者も内芝長
すう者物ゆけの黙河橋が所地であることもあつた
こん日標つと標のの花者も死後方々に教へたことか
2

○芝長が狂言方と云ふ心あつた。こんの出果上つた柳木

を土台として後者も秋古をいふこともあつた。削落後の
柏子木と打つて幕の開閉を司り、こんがらうりて面
削のよむあつた。一寸考へると幕の開閉にキヨシと打
つのはなんぢもまのやむあつたが、字餘のしつと
葉のまゝの例ふつた物の開くキヨシと打つたあつた、
呼吸の心あり、幕切の時も、後者も毎時台か
吹を燃る心ポント叩く、其刹那に木頭を入らば
まゝの或は花者も今をいふこともあつた。開く其途端にキ
ヨシをやらねばならぬ。其のキヨシを
外して幕切の効果を失ふから、問答を入らば利
那の呼吸が大切である。勿論キヨシの静かなる
御者も静かなる心あり、その静かなる御者の境

Handwritten text in a rectangular box, likely a letter or document fragment. The text is written in cursive and includes names like 村野幸徳 and 根岸隆徳.

「未得貴意候得共致啓上
候。愈御揃御平安奉瑠賀
候。然は此度結城府より
被相頼矢口渡後日淨るリ
書替候度、小人數の芝居
不相應大評判大人に御座
候。且又九ツ日お船か道
善の寺どこかかしこか

こと鳴鶴もあつた。村人が
芝居物を軽蔑する。酒を破
りし極力善いと評つてあつた。合
びも言ひ過ぎ比高もあつた。や
りか、南崎の斬くまも鳴鶴する
わい入の注書と悪くことか出来
る。うら比のひある。脚本
と評す。連載す。
こともあつた。んが、あ
て、あつた。んが、あ
送る。推奨のす。任状
ヤウキリる。んが、あ

(原五寸三分市一尺二寸)

二千ヨシの秋古をやりと云いんてある。又柏子木の巻心や
材木料も凝つた注文がある。材料は天草産の赤檀に
限るとある。油の積木と材料とある。音かよひのこと。
同一木から若く木も受け下り。女夫は取らぬ。んが、あ
ま、面倒な注文がある。んが、あ
〇黙阿弥を大陸。廿四。娘。んが、あ
あつた。んが、あ
に黙阿弥の鼠小僧を焼き物として出すこと。んが、あ
んが、あ
作者は、黙阿弥の巻を後者流へ。伝人す。春の巻
主人とある。長文を載せ。んが、あ
り。んが、あ

村野幸徳

へつ、其に在る全文の河津あ後の黙河津雜記に載せし
ある。

○所引書類の類を讀み、得るもの

朝の夕とる千にわさる白雪をいとく身とい
いつろくにけん 甚月

は、かひー大かちー日秋あふきせみう
のこさみうーの山

甚(き)のまふは廿の夜の曲りけり一巻
さくらしと唄いん 老樹子

身のかたえん
身のかたえん

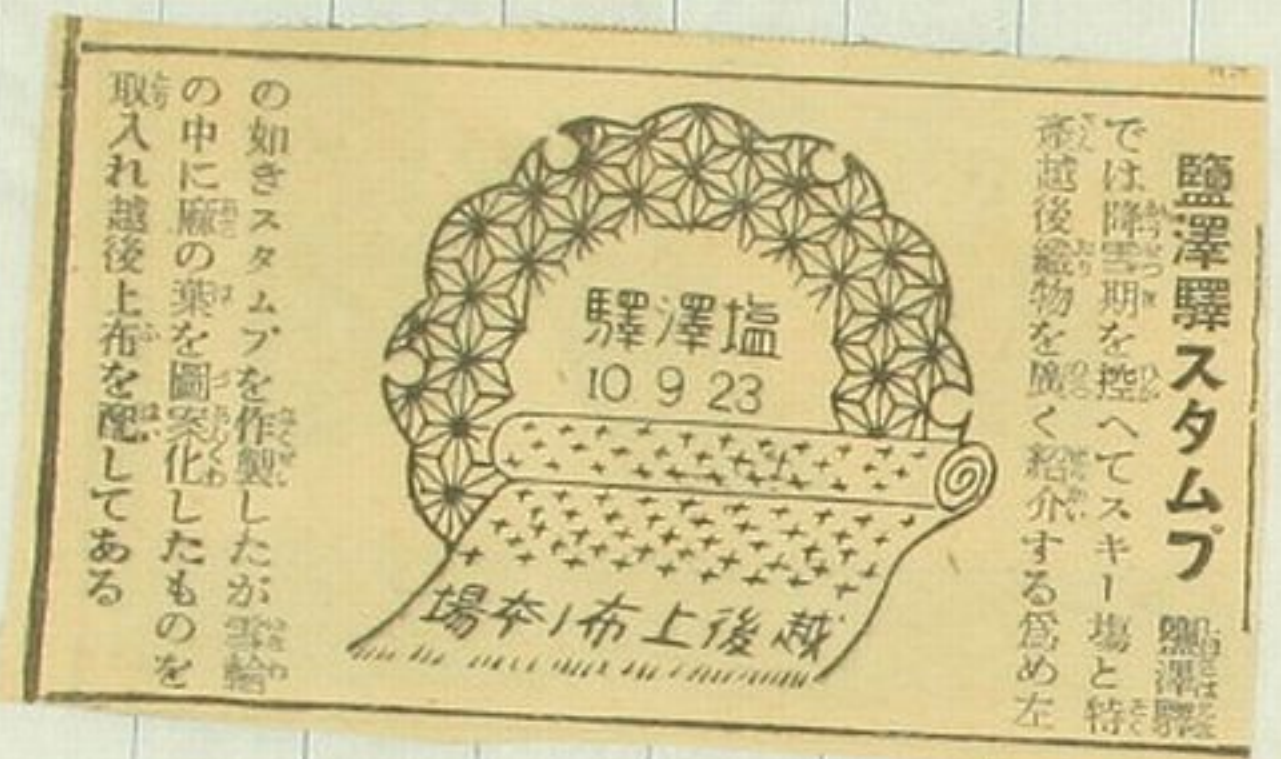
中書、いそ後の雪をえーこまがあらとこ左の

河津

歌のち

ハカセと〜キ、ーいふまやる 振の雪ありてつやう
つもりてい好新

○平山をの 喘とをし山陽加筆の
稻木の匣に 題 思す、一 柴栗山
の子 碧海の 詩 宿 枕 上 集 一 卷 二
んま 各 詩 日 山 陽 の 雌 夢 あり 卷 末
： 朱 批 あり 他 江 馬 細 香 の 父 春
歌 の 詩 稿 三 卷 二 八 一 各 各 末
山 陽 の 朱 批 あり 他 一 帖 山 陽 の 文
下 各 首 載 せ 証 名 家 の 題 跋 あり
り 守 景 十 二 枚 の 画 冊 の 副 紙 也



三四年任人かよふ比と日あきんせると得るの。今が
三選いれのか、六無條件しむ守居を奇骨扱ふ勤
めこころを道といれか、一應修繕をせ給へ住ませ
りて、思ふ存と大工を入んせ約ニち用程かけしやつ
と人召の住めしやうなるりた。あかしく地りあひんを
不思議又一文を備士か生んた。自今ノ關係は前々
ハ古申事候が傳せらるる。見らう又一人出た。侍入申事
かあつれとそふ。見り苦笑さふ。いふ。

○平山巻く。山陽詩幅の巻匣を頼る。まゝ。文
のこゝろ

山頭中氣花 濤の深河許 思侍傳我 歎
愧死を病候 許



○近刊の書法を左の記言かある。川瀬一馬の
狩谷極名の送るより誤りと指搦しん。こゝろを予も
責任あり。極名所花の皇海任解しと。いふ。正名
借場しと。之んと書名と。まじりし。予も極名といふ
猶ひ危し。予もいふ。おんと。聴き。并ひ。傳田を申込み
たり。との。正名。無任着。を現り。予も。予も。文苑に
傳ふ所也。予も。清浄解の。出。何。こゝろ。を。油心
也。か。根。此。傳。候。を。信。し。此。を。川。瀬。と
傳り。た。左。の。名。証。の。如。く。予も。極。名。が。此。書。を。入
午し。予も。予も。出。死。傳。る。が。如。く。鬼。角。傳。候。の
邊。予も。極。の。可。く。一。海。と。い。ふ。切。り。扱。を。な。す
と。い。ふ。

十月五日

と致へり。

○十月五日中央公論社創立五十年祝賀会を招
きん祝劇を呈し、歌義の伎座と利き、とよ口純も
全部買切り、とあるを式場とし、後家の祝辞
は流石である、大方振る、夜汗曾我持坊の隈を
又、○踊り、改世事、**浅檜帯**、を又、曾我、
ハ幸四郎、頼朝、羽左、ワ、時致、**花井**、**祐成**、我を、**祐**
成、時致の、羽左、ワ、ハ、此、時、の、中心、に、相、向、ひ、あ、つ、た、
五、郎、と、い、て、い、ろ、く、美、男、子、と、い、き、に、感、が、あ、つ、た、
ワ、ト、色、が、あ、ま、く、あ、つ、て、歎、か、つ、た、**往年**、又、此、時、ハ、十
郎、が、宗、十、郎、ハ、五、郎、が、圓、十、郎、ハ、亀、菊、が、半、四、郎、
と、名、後、揃、ひ、あ、つ、た、圓、十、と、宗、十、と、ハ、服、装、の、問、答、

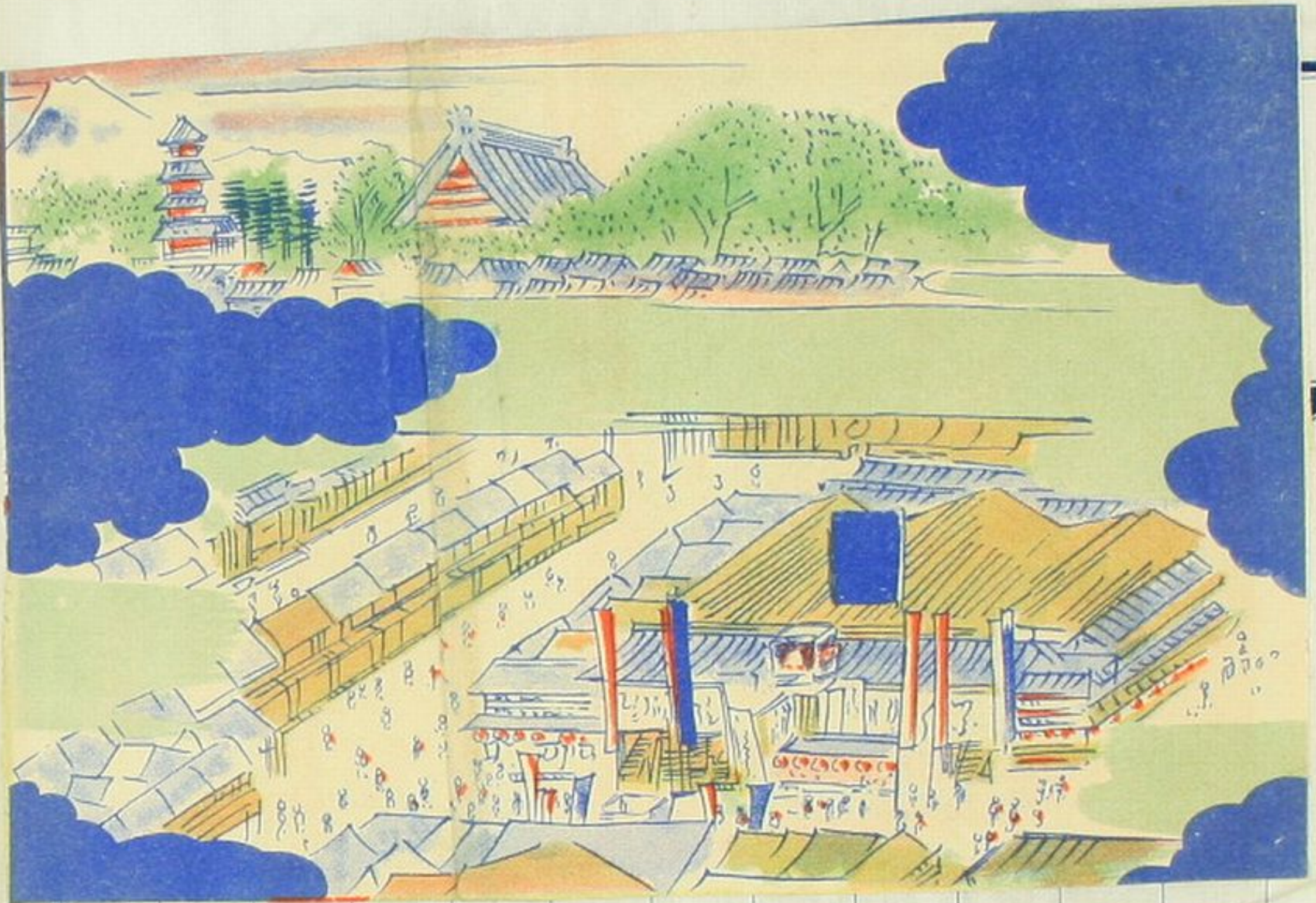
浅檜帯

ハ、宣、華、ハ、此、の、時、に、宗、十、郎、の、舞、臺、の、主、と、
稱、の、も、五、郎、を、取、り、五、郎、ハ、半、四、郎、の、脚、本、を、半、四、郎、
と、名、の、扮、装、を、半、四、郎、が、揃、ひ、あ、つ、た、圓、十、郎、ハ、半、四、郎、
と、名、の、も、宗、十、郎、ハ、**聴**、き、入、り、果、こ、の、**華**、衣、ハ、仲
裁、を、ま、さ、る、人、と、あ、り、此、が、宗、十、郎、ハ、一旦、圓、十、郎、の、役、を、
以、つ、か、免、角、石、快、の、感、情、が、も、休、止、し、あ、つ、た、**南**、時
自、分、ハ、其、の、内、輪、ハ、**給**、こ、も、い、ろ、う、ろ、い、ろ、**後**、**々**、**歌**、
伎、**年**、**代**、**記**、**と**、**世**、**評**、**が**、**左**、**の**、**者**、**と**、**い**、**て**、**あ**、**る**、

それは明治十四年新富座に上演の折
十郎役の中村宗十郎と五郎役の九代目
圓十郎との衝突で、「續々歌舞伎年代
記」には次の様に記して有ります。
—— 一番目曾我兄弟討入りの服装同
一ならず。五郎は小手懸當腹巻草鞋は
きといふこしらへなれど、**宗十郎**は舊慣

に從つて素足に袴のみ、立ちを取りて
あらはれたる爲め世間の攻撃を受けるこ
と甚しく、弟は火事見舞、兄は水見舞
又、弟は山へ柴刈りに兄は川へ洗濯に、
などと悪口あるゆえ、五郎は我が服装
の方へ引付けんとし十郎は是に應ぜず

却つて我方へ五郎を引付けんとし爰に
兄弟衝突の端を開きしが、**疋**、**辯**、**強**、**き**
宗十郎、後には病ひと稱し出勤を断り
しかば止む無く彼が持たれたる頼朝は菊
五郎、十郎は家橋代つて勤むに至れり。
云々。なほ、始め兩儀がまぢく
の衣装で出た爲に何彼と噂をされ、具



の考へ通りに改めさせました所から、宗十郎は一層不愉快になり一日だけは勤めたもの、十七日より芝居を休んで了つたので御座います。

自分の宗十郎と見比べると此時が
最初で上方役者より上り
上品で感懐しん、左の十
郎の我を七上方より此がそ
んとい比較するも、今も
波紋帯の南五郎の疑め
の前、おんも厳も上乗の
碎さてん比。
此の未冬中も勤め人ちう式

後合巻の友人と今飲し親書を撰姓う時後子
く群して物人。



「文墨餘談」

市島春城氏の近著

坂口風柯

春城市島先生は一昨秋、隨筆春城
代筆録を出されてから久しく沈
黙を守つてゐられたが、近時再び
出版界に活潑なる活動を示され、
今秋は拙いで四冊の隨筆物を世
に問はれる筈であるが、本書「文
墨餘談」は最近著その第一弾であ
る。

◇
文墨餘談のはしぎに
私昨今の境界は頗る閑暇に富ん
である、天我れを許して閑人と
なすとは、私の興へられた天福
で、これほど仕合せのことはない、
時には會心の書を讀み時に
とまづ身邊のありさまを語り、代

は思ひ浮べたことを書き散らし
雜談などの囀に應じては無遠慮
に寄稿もし、或は座談會などに
臨んで勝手なことを吐き或は紙
を展べて拙著を弄したり倦んで
は遠近にドライヴし、往々酒杯
に親しむこともある。私は昨年
來責任ある仕事は一切廢めて今
は文墨の間に遊んでゐるやうな
ものだ。風流など解し得る月柄
でないが、貨殖の方は絶対に持
合はさないから、金を儲けるこ
とは夢にも出来ない。寧ろ文墨
の間に遊ぶ方が無難でもあり、
且會生活に適してゐる。

例によつてその内容は多方面な
もので、時評隨談では書と手紙、
隨筆物語り、筆の趣味など何れも
面白く維新元勳の書が書評界の一
翫をなして愛重される理由を説い
て大隈老侯の鋭く幾千通の元
勳の書評を手にして一覽得され
た材料が手にとるやうに表現され
てゐる。

隨筆漫遊の章では、古紙鑑賞や
ら搖籃時代の新聞紙、さては二
三の隨筆界に托して自家の見を
述べ、山水遊記では、日本山水
の認識を理論的に説いた後、
伊賀赤目の隨遊記、月洞梅溪記
下田港を訪ふ記、秩父長とる記
親不知子不知の記、帯々種々の
追憶旅行記は人をして心遠く遊

はじめ、雅前録の章には先生の
幼時、越後田園の描寫などあつ
て印象的なものがあり、其他茶
人の心境が如何に日本人の生活
の各方面に日本趣味を普及した
かについての卓見がある。

更に亡友録の章には小野梓先生
の内通隨筆をしのび、殊に尾崎紅
葉を細説すること三たび、表裏
に紅葉山人をまがいてこれ以上
の内容ある紅葉傳なからんとさへ
思はしめる、最後に藤組の章に
つては、いよいよ善吉の眞面目を發
揮し、水鳥漫談あり、東京鰻魚の
味談あり、推察ペンネームのす
つばぬき、袖手録、座談録等々全
巻四百十餘ページ、筆頭あり、
隨筆あり、心算千感、奇想百出
して巻を捲かせないのは即ち當代
隨筆界第一人者たるの名をはづか
しめない。

(東京杉並區高圓寺六ノ六五九餘
墨同好會發行定価二・三〇)

○平凡社の嘱し版して四巻の全別傳多羅尼經の
複製本と曰れり。其の註法書最云に大方七七七の語を
載せり。又、解説と書いれり。前月部也。其の如く十
月部の書最を又る。此經の續きか載せり。可
る全別傳の終りと又く、小笠原信三左の記す
かあり。

全別傳陀羅尼

この經に就て、前月部に市島春城氏の
著しい記すかあり。……内屋湖南氏
の著る本誌(書道春秋時代)……字をえん
時を再考して大方の考に資す。

全別傳卷或曾緒 朱鳥遺經甲子存



銘刻更徳千佛塔 小政書体赫清原
川氏尚簡而、花す。全別傳陀羅尼經卷
尾に「歲次丙戌年五月、川内回志貴評内知藏
敬造」と記しある。書の内容を帯びて甚だ
唐の政陽通の書に似てある。まことに大和長谷寺
の法華院相國銅版に世に千佛塔と稱して、
銘文に「歲次降皇隆萬上旬」の語あり。其の
降皇は成年、清葉は七月乃至成年七月上
旬のことか書法に全く此經に同じ。恐らく同一
人の筆にありともある。思ふに何んぞ清
葉原相朱鳥元年の物なることかあり。
余の考証と相違はすいかに、参考に此文を附

觀をくくくくくくくく

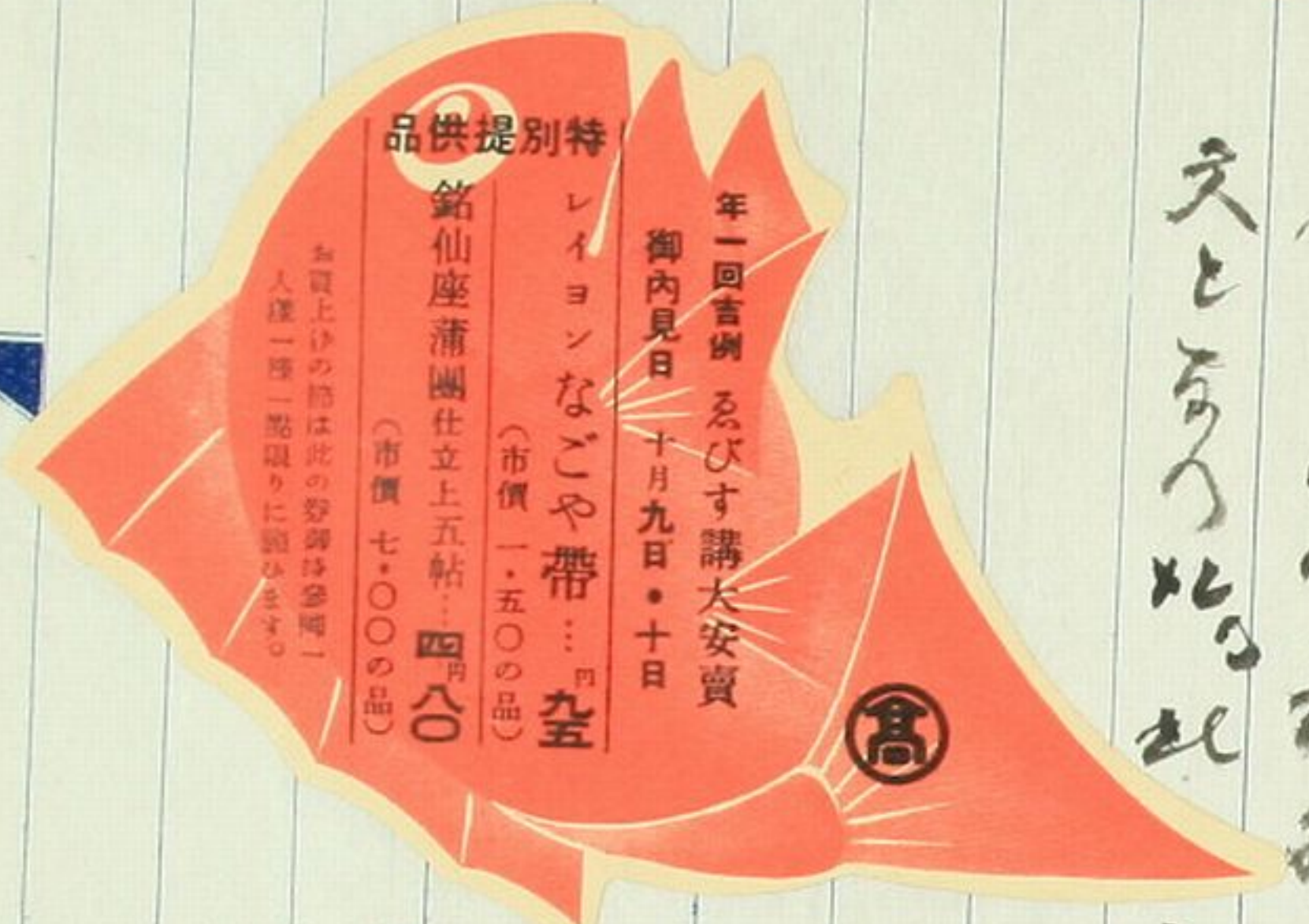
の屠休中猛の作は史書の説を藤後二三身
はくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
略のみを記す

の流の初年格亦春山侯の自から流を必り
た、まゝの東家形をくくくくくくくくくくくく
の三月十日の日の流五年の五月才百口回部と
あつて終るをみる、この流の印創して發行した
ひまゝ、春山侯の自から原稿をかき編輯さ
んれよのひまゝくくくくくくくくくくくくくく
まゝと感服す。善色の流をくくくくくくくくくく

天気が

温や市井の連の歌や政改のりや市井の流を
まゝの事、事實の山候と確かめ、まゝ、今日執
業さん、流の漢文と書かん、この四くくくくく
文とあらはれ、此

の編輯、この市連、まゝの字
の家の来まゝを類ひ、この
つれと云ふ、柳河春三と云ふ
まゝの若古、名を出身、早く
流を刊行した、まゝ、この
この人が春山の流を得た
侯が、まゝ、一語も、まゝ、
まゝを、柳河、まゝ、回、まゝ、
を、流、まゝ、其、の、性、後、の、者



年一回吉例 及びす講大安賣
御内見日 十月九日・十日
特別提品
レイオンなどや帯... 空
(市價一・五〇の品)
銘仙座蒲團仕立五帖 四八〇
(市價七・〇〇の品)
本頁上の部は此の特別提品
入庫一冊一巻の部は此の特別提品

尚が多く著説を引かれをみるが、是れよりある
の文柄が寂然と、柳河の當時中おれりし
その法をとりしとみれば、外四の書柄
をいへば中おれりしと著載されし
女くこと著録す。

一 昭宗皇太后が一條家におけりし時行書と清
近講と上清入内の御七心を著し、是れ江葉
子とよみいひしむり切んまの女流に、こんかま
くの女傑が、天保六年の生んぶの伏見宮御大友
美江是か、葉二の文子といひ、切ら後出と
み、若垣月沙、漢多を著し、歌も出来、様
概、激張の女むらゐりし、容貌の宮中ら、心

柳河

あつたが、氣節の男優と、一條家り、清見の姉妹の
内妹を皇太后に御推挙し、上けられし、此れも、
つれとよみいひ、昭宗皇太后、折りの、福ん葉の
教育の、花よりしことと思ひ出せん、吾問の、葉の
員、所が多し、時、注かへんこともあつと、仰せ
れとある。此れも、様、家、康、高、出、者、と、連、白、者
と出して、みる、連、白、者、と、連、白、者、と、連、白、者
るといふ、此れ、女、の、晩、年、の、躬、境、入、ま、ち、花、も、ま、い
男、と、通、い、あ、れ、ら、權、節、を、害、し、れ、が、致、後、心
主、位、の、贈、位、が、あ、り、并、才、の、隆、昭、宗、皇、太、后、
り、金、万、圓、の、精、を、納、つ、れ、
一 柳河、四、葉、の、初、の、知、り、の、傳、來、の、銅、印、を、用

ひとあつたが、の次四斗五月伊達宗成を全権大
使として清と派せしむるの事あり、印文が
不明なありは、この御番玉改刻の議が
起り、小宮根乾重に彫刻を命ぜられ、且
つ是を返さるるに御番玉を定めらるること
となり、四重の彫刻も花を以て命ぜられ、此
の時乾重の彫刻に、石林のありは、
るる其後宮内省に於て金杖を以て新鑄
の議を上り、七年七月出来れば、方三寸の
圓文に、今七之んを用ひてあり、よりの次六年
九月、安部守善人(權重)に御番玉の彫刻を
命ぜられ、素花六に御番玉の鑄造を

命ぜられた。乾重が、よりの次六年、
の鑄造を命ぜられたるを、詔として上言し、
か、父き居けり、よりの次六年、
乾重の、よりの次六年、
北畠親満に、御番玉を、
干し、よりの次六年、
一枚、御番玉、
人の考め、御番玉、
お話が、よりの次六年、
殺せし、よりの次六年、
し、よりの次六年、
内、よりの次六年、

評談社の江戸文芸書庫の「こゝろ」で読んだ人々を
 日社と自合の吟稿文と云々と頼んできた。初め
 彼人の百六十頁の「よを」と頼んできた。その
 氣根よく法やう各輯の板板やら、八丈士の性根
 やらと細説とある。和田の馬場の日記を添へて
 贈った。こゝろ七あり、馬場の日記と志定の人
 と云ふ所の「こゝろ」此の二巻より八丈中一の美文が
 或る枚枚おぼえと居る。板板注も附してある。西
 洋のテキストの綴りのをあり。こゝろの「後」と
 しての「道南」あり。自合の別く吟稿の方法と云ふ
 の、書生時代の想ひ出を添へ、夏と暮の比。十
 十の記

評談社

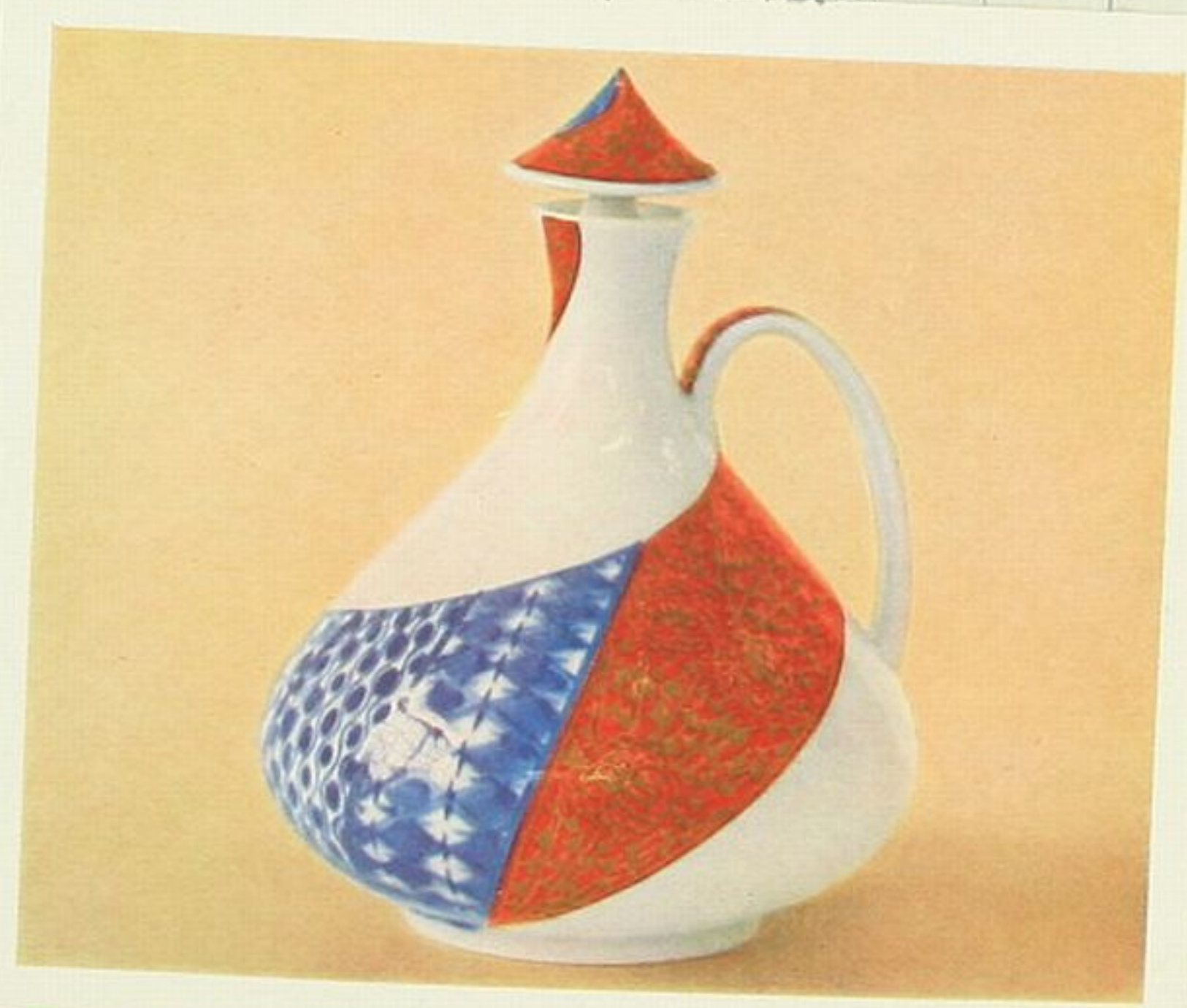
〇例ニ乗して白集と読み且の抄書(十月十日)

志々として柳をさうく舟歌にふんじ
 ち、海苔や石の窟の志ん沙の
 山寺や像の下ろす若侍あり
 やはらかな人をけりくや、鹿角力
 冬木と月骨籠くみる夜こゝろ
 八はまゝい、夜ついでおるおゆりか、大はん
 かのあやちうとほふ人の巻の
 この唄んよこゝろ、書生寝坊さうの
 白扇扇除の義之に書かえり

能因いくさめさせたる秋のこゝ大いん
 昔里清血風のやうにおはしけむ
 蒲公英七けん白頭は昔の春 百は
 更くる夜や岩もて岩を碎く音 其大
 灯火をえん心風あう施の音 日
 あつと一と戻ん心庭に柳のま 日
 世の中ハ三日えぬ方の掃くま 日
 山路来て向の城下や風の音 大祝
 掃きけふか返るハ掃かす音あうまの
 初志や焼の籠ふよする顔と顔の
 遠くや鼻おごめきて百とよむ日
 産屋保と朝鳥咲きの音の秋 日

秋の音

実日や我ひとりく掃く音の
 晝顔やどちらの霞と間に合つてせむ
 元日や成の在のものかたり
 一ぱり尾の長をくまきつる
 名月や烟這い行くふり
 沙魚釣こやあ村山那雨後の
 雨陸道道に乗る轍きけ
 北岸かたて橋の遠白く春の月
 菜の花や淡も柱も忘ん味
 木枯の果のあつた海の音
 にはばりと秋の空をるまの山
 行水の捨所なき虫の聲



切らざる夢の誠か蚤の品きん
美しき顔の〜きん 雄の品きん

今に時かさうよぬん燕あつち

目さしちる山ゆき初舞 去る

浮葉巻葉北葉風 竹馬きん ねんちる

舞舞 社社 命命 士士 ありけあの月月 七七 八八

抱え〜に温ありの古るや苔の花葛 葛葛

河内めや干菜干菜 吐き窓の櫛大舞

我れま〜も溜溜 や身身 子子 と蚊蚊 の合合 ぶぶ

父潮父潮 や柳柳 のくく んん の魚魚 かつかつ

我心我心 起起 せせ せせ 八八 の物物 かんかん

あぢくや家鴨家鴨 の眼眼 く萩萩 の下下 白雁白雁



すか〜見見 てるてる 星星 に淋淋 しき柳柳 ころころ 櫻櫻

夕夕 腐腐 や物物 を借借 りり 命命 山山 屋屋 の破破 んん 麦麦 の

大根大根 引引 大根大根 の道道 を教教 けりけり 一一 条条

お七お七 さんさん の曲曲 の考考 案案 しし 病病 みみ ちち ちち 二二

名月名月 や草草 木木 に劣劣 ちち 人の影影 柳柳

雲雲 うう 程程 ここ ぼぼ しし 七七 行行 きき 一一 荒荒 菜菜 五五 日日

元日元日 や鬼鬼 いい しし ぐぐ 千千 七七 勝勝 の上上 日日

冬冬 の節節 りり 虫虫 けけ らら まま 七七 穴穴 かいかい 一一 六六 貞貞 徳徳

凍凍 しし ささ のかか らら まま ちち ちち ちち やや 花花 の月月 八八 日日

いざいざ のの 山山 崎崎 のの 點點 合合 いい 此此 郡郡 島島 の

順順 行行 のの 棒棒 はは かりかり わわ くく 夏夏 中中 ここ うう 家家 鴨鴨

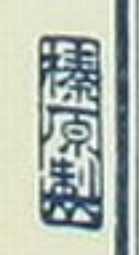
元朝元朝 のの ええ ちち よよ んん ちち んん 命命 士士 のの 山山 三三 鐘鐘

の原書と云ふ事近かと思ふ也

○我邦の書史に際して先神を拂ふ事あるは五十年前
大花行を縮刷成切と云ふ事。此事業の由は
十三年三月に著し十四年七月に其第一冊を
發行し、四ヶ年を要し、明治十八年十二月に完
了を告げられたり

大花行の全部八千五百三十四卷と云ふは、洪滿の
言、之んを四万十八冊の五号活字組和装と云ふ
十帙に細収められたり。縮刷本と云ふ。

既に、於て天海版や黄檗版と云ふ事あり、一切を
刻した例あり、或は支那の明版を複製し、其の
刻本も、本流は附丸の公大海版



○徳の家老が刊行せられたるものあり、黄檗版の
眼が拙劣せしやとの言あり、之んを前々弘安年中
發行因か一切を登刊せんと企てられたる事あり、
九の成印し、之れ、却つて佛教の衰亡期の由
あり、敢て朝廷の力を藉く事、完成したること、宗
る事ありと云ふてもよい

此の縮刷大花行の最も優ると云ふこと、善本と
云ふこと、此の事あり、世に最も一切の善本と
云ふもの、高麗版の最も、人の相好の或る時代
に、精根を凝して、契丹や日本の字體を、通じて校
訂刊行したるもの、其の板木の今も、朝鮮に存する
もの、其の刊本の全備したる、其の場、寺に存する

表誤正 帙玄

冊	行	字	位	正誤
全	七	揭	二十九	漢誤作要
全	左	十七	十八	早誤作早
全	右	十一	六及二十	一脱
全	右	十一	二	次同二字衍
全	右	十九	三四	本文六行上那下茶宋元俱作茶八字脱
全	右	二十九	九	次同二字衍
全	右	二十九	九	茶誤作茶同揭茶三本俱作茶六字脱

縮刷藏經正誤表

(全十一冊)

縮刷大藏經刊行後島田蕃根翁が十數年の心血をそゝいで、誤字脱字、脱文、衍符、揭示(頭註)に訂正を加へたものが本書十一冊である。

別明作彌

悉現於中成等正覺。以佛智慧。方便開悟。無有休息。佛子。一切諸佛。以神通力。現最妙身。住無邊處。大悲方便。心無障礙。於一切時。常為衆生。演說妙法。是為諸佛第十大那羅延幢勇健法。佛子。此一切諸佛。大那羅延幢勇健法。無量無邊。不可思議。去來現在。一切衆生。及以二乘。不能解了。唯除如來神力所加。佛子。諸佛世尊。有十種決定法。何等為十。所謂一切諸佛。定從兜率壽盡下生。一切諸佛。定受生處。胎十月。一切諸佛。定厭世俗樂。求出家。一切諸佛。決定坐於菩提樹下。成等正覺。悟諸佛法。一切諸佛。定於一念。悟一切法。一切世界。示現神力。一切諸佛。定能應時。轉妙法輪。一切諸佛。定能隨彼。所種善根。應時說法。而為授記。一切諸佛。定能應時。為作佛事。一切諸佛。定能為諸成就菩薩。而授記別。一切諸佛。定能一念。普答一切衆生所問。是為十。佛子。諸佛世尊。有十種速疾法。何等為十。所謂一切諸佛。若有見者。速得遠離一切惡趣。一切諸佛。若有見者。速得圓滿殊勝功德。一切諸佛。若有見者。速能成就廣大善根。一切諸佛。若有見者。速得往生淨妙天上。一切諸佛。若有見者。速能除斷一切疑惑。一切諸佛。若已發菩提心。而得見者。速得成就廣大信解。永不退轉。能隨所應。教化衆生。若未發心。即能速發。阿耨多羅三藐三菩提心。一切諸佛。若未入正位。而得見者。速入正位。一切諸佛。若有見者。速能清淨世出世間。一切諸根。一切諸佛。若有見者。速得除滅一切障礙。一切諸佛。若有見者。速能獲得無畏辯才。是為十。佛子。諸佛世尊。有十種應常憶念清淨法。何等為十。所謂一切諸佛。過去因緣。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。清淨勝行。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。滿足諸度。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。成就大願。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。積集善根。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。具足具行。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。現成正覺。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。色身無量。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。神通無量。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。十力無畏。一切菩薩。應常憶念。是為十。佛子。諸佛世尊。有十種一切智住。何等為十。所謂一切諸佛。於一念中。悉知三世一切衆生。心心所行。一切諸佛。於一念中。悉知三世一切衆生。所集諸業。及業果報。一切諸佛。於一念中。悉知一切衆生所宜。以三種輪。教化調伏。一切諸佛。於一念中。盡知法界一切衆生。所有心相。於一切處。普現佛身。令其得見。方便攝受。一切諸佛。於一念中。普隨法界一切衆生。心樂欲解。示現說法。令其調伏。一切諸佛。於一念中。悉知法界一切衆生。心之所樂。為現神力。一切諸佛。於一念中。徧一切處。隨所應化。一切衆生。示現出興。為說

増上寺より為宋元の為行とあるを、伴僧福田行、
 此の事業と冬外に為る、増上寺の為本を底
 本と本校合本とあることを許し、此の為本を正
 しい一切位と出収することを得た。
 全体此の業の創意の島田蕃根に依りて、
 彼の熱誠、終に此の事業を完成せしめられたる。

佛上寺の爲末元の爲行である。律僧福田行
の此の事業も冬加北の爲の佛上寺の爲本を
本と本校合本をすることを許す。此の爲に
一切位と出收することを得也。

全体此の業の創者の島田葛根に依りて始す。此の
彼の熱誠、終に此の事業を完成する。此の
ある。彼の出世の爲に、十年を費して、佛
の誤り、其誤りを改め、一々録して、其
教冊に追入する。今度再び就て、其
り誤謬を正す。その爲に、一層完固の
ふ。其の

島田葛根が此の事業を始する。就ての苦心の定む

別明作新

悉現於中。成等正覺。以佛智慧。方便開悟。無有休息。佛子。一切諸佛。以神通力。現最妙身。住無邊處。大悲方便。心無障
礙。於一切時。常爲衆生。演說妙法。是爲諸佛。第十大那羅延。幢勇健法。佛子。此一切諸佛。大那羅延。幢勇健法。無量無
邊。不可思議。去來現在。一切衆生。及以二乘。不能解了。唯除如來。神力所加。佛子。諸佛世尊。有十種決定法。何等爲十。
所謂一切諸佛。定從兜率。壽盡下生。一切諸佛。定示受生。處胎十月。一切諸佛。定厭世俗。樂求出家。一切諸佛。決定坐
於菩提樹下。成等正覺。悟諸佛法。一切諸佛。定於一念。悟一切法。一切世界。示現神力。一切諸佛。定能應時。轉妙法輪。
一切諸佛。定能隨彼。所種善根。應時說法。而爲授記。一切諸佛。定能應時。爲作佛事。一切諸佛。定能爲諸成就。菩薩而
授記別。一切諸佛。定能一念。普答一切衆生。所問。是爲十。佛子。諸佛世尊。有十種速疾法。何等爲十。所謂一切諸佛。若
有見者。速得遠離一切惡趣。一切諸佛。若有見者。速得圓滿殊勝功德。一切諸佛。若有見者。速能成就廣大善根。一切
諸佛。若有見者。速得往生淨妙天上。一切諸佛。若有見者。速能除斷一切疑惑。一切諸佛。若已發菩提心。而得見者。速
得成就廣大信解。永不退轉。能隨所應。教化衆生。若未發心。即能速發。阿耨多羅三藐三菩提心。一切諸佛。若未入正
位。而得見者。速入正位。一切諸佛。若有見者。速能清淨世出世間。一切諸根。一切諸佛。若有見者。速得除滅一切障礙。
一切諸佛。若有見者。速能獲得無畏辯才。是爲十。佛子。諸佛世尊。有十種應常憶念。清淨法。何等爲十。所謂一切諸佛。
過去因緣。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。清淨勝行。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。滿足諸度。一切菩薩。應常憶念。一
切諸佛。成就大願。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。積集善根。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。具足梵行。一切菩薩。應常
憶念。一切諸佛。現成正覺。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。色身無量。一切菩薩。應常憶念。一切諸佛。神通無量。一切菩
薩。應常憶念。一切諸佛。十力無畏。一切菩薩。應常憶念。是爲十。佛子。諸佛世尊。有十種一切智住。何等爲十。所謂一切
諸佛。於一念中。悉知三世一切衆生。心心所行。一切諸佛。於一念中。悉知三世一切衆生。所集諸業。及業果報。一切諸
佛。於一念中。悉知一切衆生。所宜。以三種輪。教化調伏。一切諸佛。於一念中。盡知法界一切衆生。所有心相。於一切處。
普現佛身。令其得見。方便攝受。一切諸佛。於一念中。普隨法界一切衆生。心樂欲解。示現說法。令其調伏。一切諸佛。於
一念中。悉知法界一切衆生。心之所樂。爲現神力。一切諸佛。於一念中。徧一切處。隨所應化。一切衆生。示現出興。爲說

佛身不可取著一切諸佛於一念中普至法界一切處一切衆生彼彼諸道一切諸佛於一念中隨諸衆生有憶念者在在處處無不往應一切諸佛於一念中悉知一切衆生解欲爲其示現無量色相是爲十佛子諸佛世尊有十種無量不可思議佛三昧何等爲十所謂一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處普爲衆生廣說妙法一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處普爲衆生說無我際一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處普現無量種種佛身一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處隨諸衆生種種心解現身語意一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處示現無量世出世間廣大莊嚴令諸衆生常得見佛一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處令諸衆生悉得通達一切佛法無量解脫究竟到於無上彼岸是爲十佛子諸佛世尊有十種無礙解脫何等爲十所謂一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛出興於世一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛國土一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛受化調伏一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛轉淨法輪一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛能於一塵現去來今一切衆生一切諸佛能於一塵現去來今一切佛事是爲十

佛身不可取著一切諸佛於一念中普至法界一切處一切衆生彼彼諸道一切諸佛於一念中隨諸衆生有憶念者在在處處無不往應一切諸佛於一念中悉知一切衆生解欲爲其示現無量色相是爲十佛子諸佛世尊有十種無量不可思議佛三昧何等爲十所謂一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處普爲衆生廣說妙法一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處普爲衆生說無我際一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處普現無量種種佛身一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處隨諸衆生種種心解現身語意一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處示現無量世出世間廣大莊嚴令諸衆生常得見佛一切諸佛恒在正定於一念中徧一切處令諸衆生悉得通達一切佛法無量解脫究竟到於無上彼岸是爲十佛子諸佛世尊有十種無礙解脫何等爲十所謂一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛出興於世一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛國土一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛受化調伏一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛轉淨法輪一切諸佛能於一塵現不可說不可說諸佛能於一塵現去來今一切衆生一切諸佛能於一塵現去來今一切佛事是爲十

大方廣佛華嚴經卷第四十八

于闐國三藏實叉難陀奉

制譯

如來十身相海品第三十四

爾時普賢菩薩摩訶薩告諸菩薩言佛子今當爲汝演說如來所有相海佛子如來頂上有三十二寶莊嚴大人相其

大略彼自身の流す所の
左の如くいふ事。

島田善根忠の勤機の誓ひ年
間忍激上人の一切行を
す誤謬の爲ることを
徑の行を傳ふこと
し板心に好力し以事
此の公芳の勤機ありと
あり忍激上人の本
切板とを承るす

「寶永年間、京都獅子谷忍激上人常ニ髮を明藏に發す、高麗藏を關するに及んで大に得る所あり、是に於て、更に大藏を對校する願を起し一日奮然として曰く、大藏の顯る一木何ぞ堪へん、今や、明藏の誤脱を發見す、而して校訂の任、一身何ぞ堪へん、如かず、衆と之を語らんにばと、乃ち書を椽山増上寺に寄せて同志者十餘人を獅子谷に招致し、始めて對校に従事す然るに建仁寺藏經あり、門外に出ずを許さず、會々近衛基熙公大に忍激上人の此舉あるに感じ、特に建仁寺に諭して上人の請ふ所を許さしむ、實に寶永三年丙戌也、是歲二月業を起し、七年四月に至りて其功を竣ふ、校すること凡そ三次毎次人を喚びて、異同あれば、即ち行間に註せしむ」

縮刷大藏經
關係の人々

故島田蕃根翁談

弘教書院の出来るまで

私が、最初縮刷出版の相談をしたのは、大阪の商人、堺屋仁兵衛と云ふ人です。私は明治五年に東京に出て教部省に出仕して居りましたが、此の堺屋仁兵衛は、高野山の孔雀堂を建てた人です。次に、私は眞言宗の律僧より歸俗した山内瑞圓と云ふ人に話をし、其の瑞圓から、當時の管長の獅・快・猛さんに話したところ、快・猛さんも大に賛成して呉れたので、聊か心強いことになってゐると、不圖した事から、明版の一切經が手に入りました。この分では成功せぬことあるまいと、決意しました。此時は明治十二年の頃です。それで、其のこゝを山城屋佐兵衛と云ふ書林の主人に話しました。山城屋と云へば當時は日本橋で須原屋と並んで盛んに商賣をして居た、本名は稻田佐吉と云ひます。其男も大に賛成し、それから、其の親戚の色川誠一と云ふ者に

相談をした。其の色川は既に西洋へ行って、印刷事業に就いて研究した人です。それから、之にも充分相談をしたのでそこで、話は一通り纏まつて、創業費は山城屋が出すこととなり、色川は創業費を携帶して、京都へ向つて往きました。勿論、其頃は、佛教各宗の宗務所などは、東京に出来ない頃でしたから各宗本山へ遊説に往つたのです。

其時は、私は社寺局に居ましたから斯う云ふ計劃には、幾分か便利もありましたが、何にしても随分の大事業です。さう迂闊には始められず、種々工夫もして見ました。其中に色川は歸つて来た。最初の計畫ほどに往かなかつたが、兎に角、本願寺で非常に賛成して居れたので餘程元氣が付きました。

處が、稻田佐吉は資本金のことで山東直砥と云ふ人に相談しました。山東は「山東玉篇」など云ふ字典を作られた人で、幸にこの山東も賛成して、まづ金主は山東が幹旋することとなり、山東より、紀州の人で岩橋萬藏と云ふ人

に相談をし岩橋より、又大阪の千種屋と云ふ紳商の平瀬安兵衛に相談して、其平瀬が金主となつて略ぼ事業の基礎だけは成立ちました。その組織は弘教書院社長、山東直砥、關係者 稻田佐吉、色川誠一、山内瑞圓、山東直砥、島田蕃根と云ふことになりました。

編輯に關係した人々

既に増上寺の行藏上人と相談をしてゐたので、資本金の目的が立つた事故上人も随喜せられましたが、差當り困つたのは、藏經の校合でした。併し行藏上人が思ひ切つて、弘教書院の爲に増上寺所藏の三大藏を貸して呉れたのでこの事業が完成したのです。高麗藏の完全なもの、増上寺にある丈けです。それから、これを借りなければ手が着かないので、其の事業の完成も謂はゞ上人のお蔭です。

校合には實に骨が折れました。人物の乏しいには困難しました。初めは「明教新語」あたりへも廣告で募集しましたが、自ら進んで来る人は少ない、段々相談の末、各宗からそれ程々任命して、出来さうな人物を出すこととな

り、從來弘經書院と相對で約束して來て居た人物は、明治十四年四月に解任して、更に、公選の校正者を入れることになりました。當時の校訂者は

- 飯島道實(居士) 東海玄虎(臨)
 - 桑宜勳(全) 松岡了殿(眞) 櫻木谷慈薰(天) 雲居玄導(眞) 天野宣格(臨) 佐藤道悟(曹) 櫻木谷隆隆(眞) 森享開(淨) 荳津實玄(天) 朝木英雙(臨) 岩本榮中(天) 牧政純(眞言) 伊佐岑滿(居) 月性豐民(淨) 守本惺亮(日) 宮下日一(日) 千葉賢永(眞言) 太田被慶(眞言) 金松空賢(眞言) 外山義文(臨) 千野寛鳳(淨) 平野素識(眞) 日野儼了(眞) 古田楚仙(曹) 山本法泉(曹) 大江凝玄(眞) 實相圓隆(曹)
- この校合者は實に大したもので、大藏經といふ貴い聖典を手掛けるので、地方では非常に名譽になりました。今一例として、臨濟宗管長から校經委員に出した注意書の一部に「若し不都合の事故は有る時は當に吾宗の慚愧のみならず、實に一大盛事の瑕瑾なり、宜しく戒愼省慮すべし」と云つてゐるのを見て解ります。下略

此の傍本が出来てから、訓點を施した美濃版の一切
 行七本外訓點が誤つてゐると云ふ話がある。形が太
 きく不便である。其の難いところは、比較上半紙
 版細字の方がよいと云ふ。此の半紙本も一時或
 所のり本に推積してある。此の今更人と得難い
 本と云ふは、今更再版を企てること。其の端と云
 ふ、其の齊しい康僧の例のと云ふは、一子部更人板の
 ところ。此の板と云ふは、其の板と云ふは、其の
 んの板と云ふは、其の板と云ふは、其の板と云ふは、
 カイクロロペ、其の板と云ふは、其の板と云ふは、
 から、寺院や僧の血をいれ、入向と云ふは、其の
 らかんの誤記である。

此の偽刷本が南無知此に似て目今早稲田の圖書館に一部
 備へたと思つたが、或る日前島男三村を訪ふ其書
 方の通つこと此の本が架上に満ちてゐる。男の一切に
 翻讀の熱心家であつた。男の其時云ふこと、自今
 の死後の此書と早大圖書館に寄贈するから、展の
 記帳して長く人と云ふんは、果して強請寄附を
 受けた、早大圖書館にありつゝ男の早稲田本がある
 ことをいふ所記して置く (十月十二日記)

○又田善次郎に譲り海へ寄る、古紙古本、書
 簡、古文書、四類の外、更々古画部類として左の
 通り譲り譲り海へ寄る

一 英一條短冊 寄る 古紙中へ遺印を捺す 一幅

- 二條遺像
- 一 志道軒自撰書畫像 一幅
 - 一 十牛圖 小和子やえ成寄 一卷
 - 一 口 永城寄 一卷
 - 一 雪中菴暮太自筆白畫卷 一卷
 - 一 曉南盲人嬉樂畫卷 一卷
 - 一 北方大畫 七位子記 一卷
 - 一 狂言謡曲繪曆 一卷
 - 一 尾版六花仙 假本 一卷
 - 一 清心寒月羅漢帖 一幅
 - 一 雪山文後大鳥記 一卷
 - 一 兔園小集寄合書画 一幅

- 一 墨江兩岸圖 二卷
- 一 集字寶笈廿南子文 二卷 紙海卷
- 一 真淵本居加養祿考 二卷
- 一 朝鮮人來朝版畫 一卷 天和版
- 一 賴山陽吉休田室焼燬江詔扇面 一帖
- 一 梁山分華領内布令書 一卷
- 一 千陰遺文 一卷
- 一 篆論語 一卷 南英文庫心花
- 一 特卷江戶名不同會 一卷
- 一 瓜俗志料 九冊 九ノ二ノ
- 一 北里在君手の心 一帖
- 一 中云... 大津給 一帖

藏書

一 甲子夜話 一冊

一 和名本物 一冊 板字古入

一 日本現在書目 室生寺映字本

以上二十八種の内三後の三種未記済...
鳥記... 真淵本... 加養... 祿考...

以上... 價二千五百円也 十月十二日記

高山彦九郎日記 一卷

伊能忠教書簡 測量回 一卷

住吉内記 西村 一卷

肉延役者傳 一冊

太前回海... 分漏... 日記...



擬清 代贈之元之語全之書辭並清
 大年收書成後 故本先生之書坊多神、海濱若見時注
 音多爾致清
 擬清
 中作再拜
 指元均此
 的木先生之次後後
 今同誌擬清丁元公為
 者 復丁前擬清
 王國年得社



程孟陽先生所繪山水韻毛筆之
 無不筆有今慕 問亭先生家藏
 時寄卷滿子始得登臨其妙校此
 百幅蓋多生平之未有也非不其
 效未爾景而能辨此與芝况又宜
 夢乎 濟池大藤子阿長石傳濟於
 研心此崇

石 清 和 尚 書

藤原

擬清 刑棟もあつた日本の刑法は、外國の皇太子と日本の皇室と同一く死すことが出来ず、犯人の刑は懲役ほゞ二、三年の間に止む。然るに日本の皇族は、おまると同一元柄をせしむるが故に、初めは、外國の公使の如きを云ふてあるが、このころは、困つたが、大審院の回法を柱にするのも、飽きか、預法つらむと、就て兒島惟通の護法行動と、代後にも、傍のころに、あつた。而も、志が、困つて、果したことが、この公の著記に、散見する。

(前取) 後赤陸奥南大庄未訪で、早く裁判のころ、困難を、心一第、金を投じて、刺客を使ひ、犯人を殺して、以て病死せりと、あつたこと、突易を

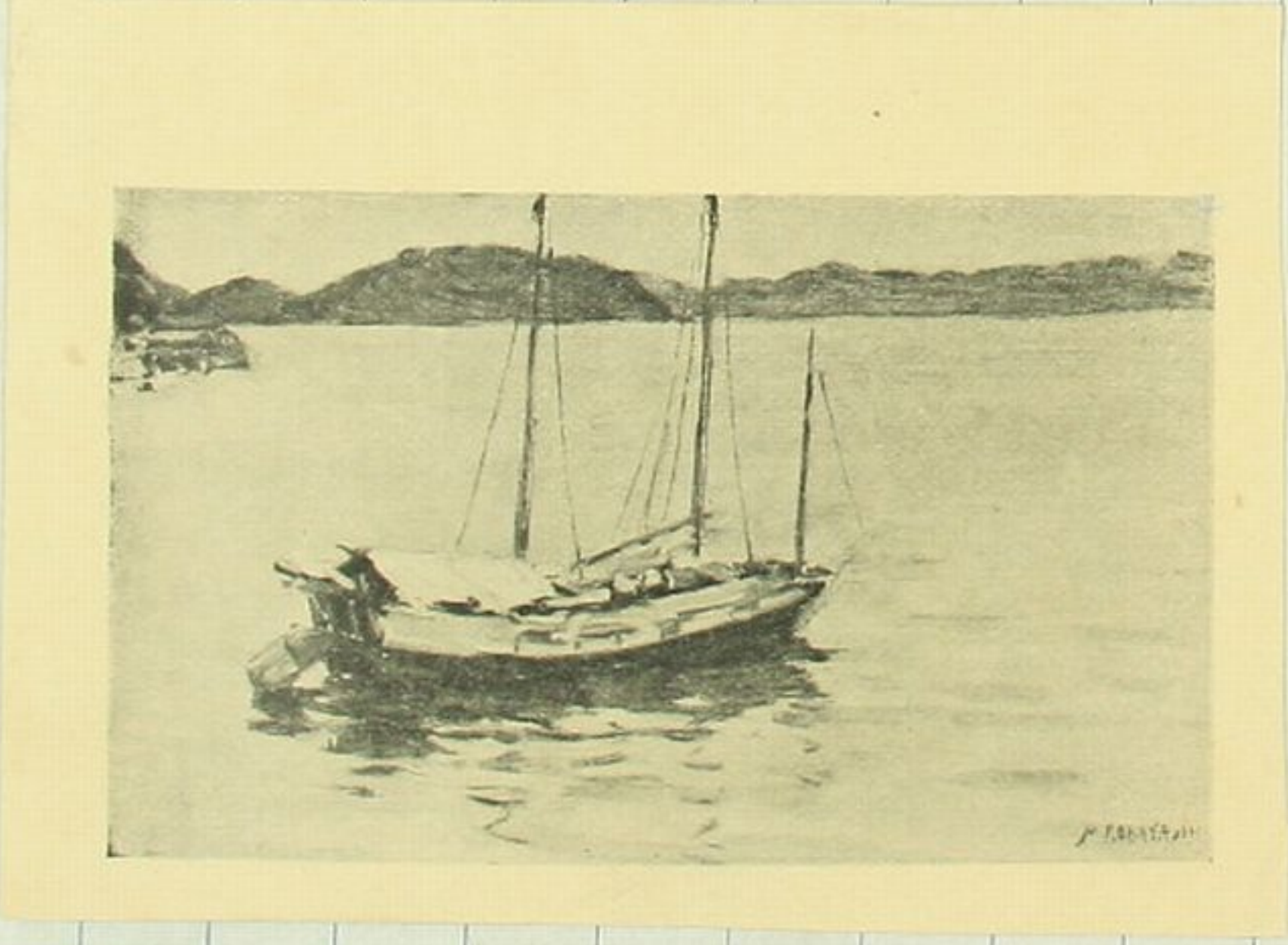
え、魯の如く、性こそ是等の空、互を争ふ事あり
 やし、余曰く、是れ亦も為す心せしむる非ざる
 七國家の主権の存する、山室かくの如き、無法の事
 互を評せんや、人に向つて、法も徳の心と云つ
 べし、と云ふ、

政府の窮策想あへし、後、お尋の策、行らん、
 此が更々、詔勅を勅と外、國の皇帝及び其継嗣
 へ對す、北條の法律上之を武皇宮に對し、
 此の如く、擬せんとす、木子、
 伊東、北條、淺書、江、友の大々、
 主し、
 行つ、
 伊東、公、子、記、
 伊東、公、子、記、
 伊東、公、子、記、



ぬれ、
 時相、
 又く、
 空、
 志、
 といふ、

前、
 三、
 昔、
 七、
 諒、



以て隠居料と可路の台、此方御承切置つて下候、
今日此方と申すは、一、早稲、二、俵澤、三、善一
を寛り、故と神河、四、有と先且過の母の向
前、五、由置、予、六、淡、七、解、八、無、九、考、及、再、述、
間、不、懸、神、諺、案、一、の、也、一、也、(下略)

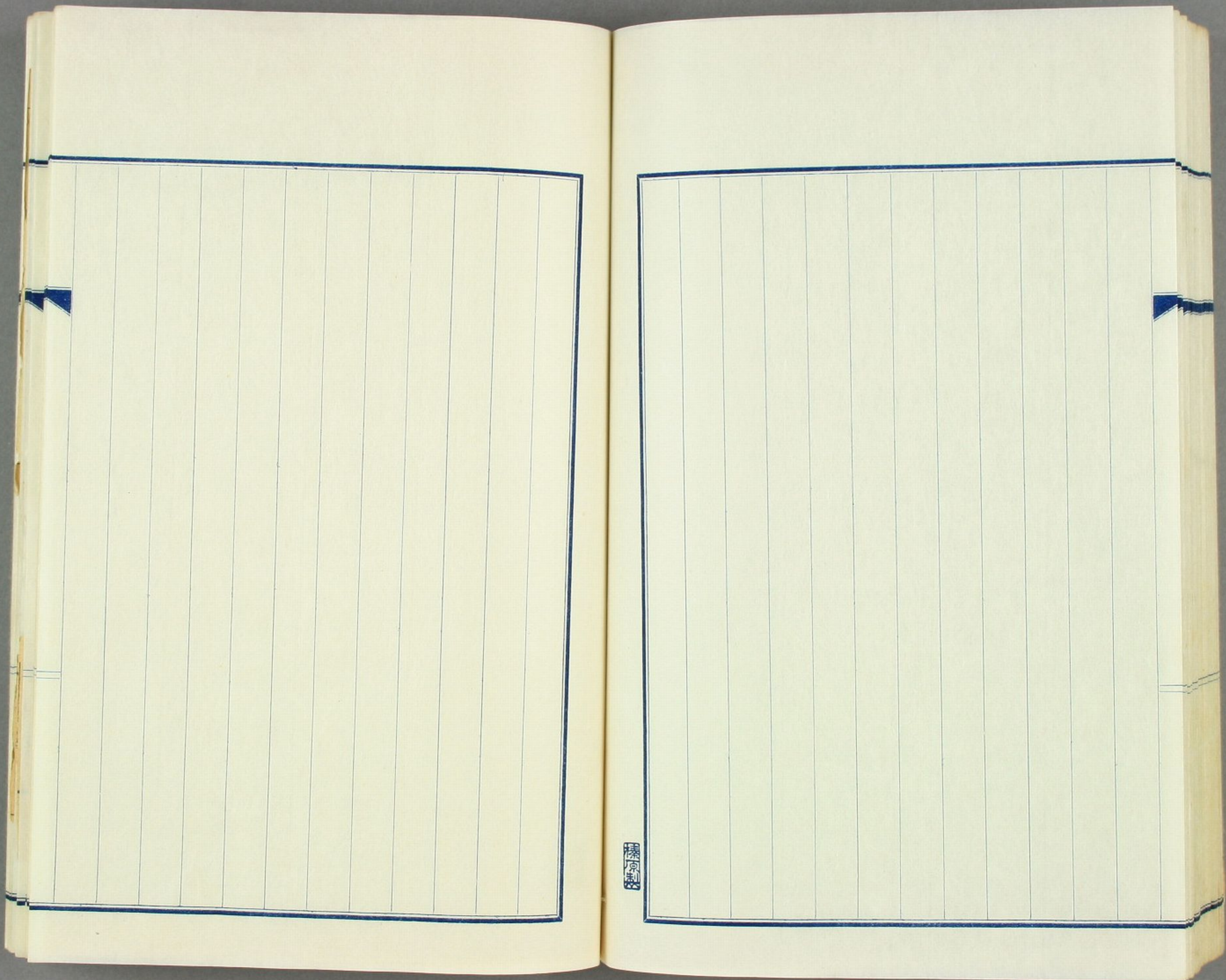
七月一日

侍

三島支屋

此方河川亮為、一、通、二、の、三、前、年、の、也、を、ん
た、よ、か、あ、る。

當の場、上、出、陳、を、ん、九、日、給、此、方、志、に、附、載、し、た、り。



湖
山
樓

以下
10丁
白紙

酒川にて 覆面記者

行七八名は昔な勝土の同志代議士(中略)市中を歩して...

かつた酒樽の水に洗ひたるもよく酒の酔と服の麗なるは更によく...

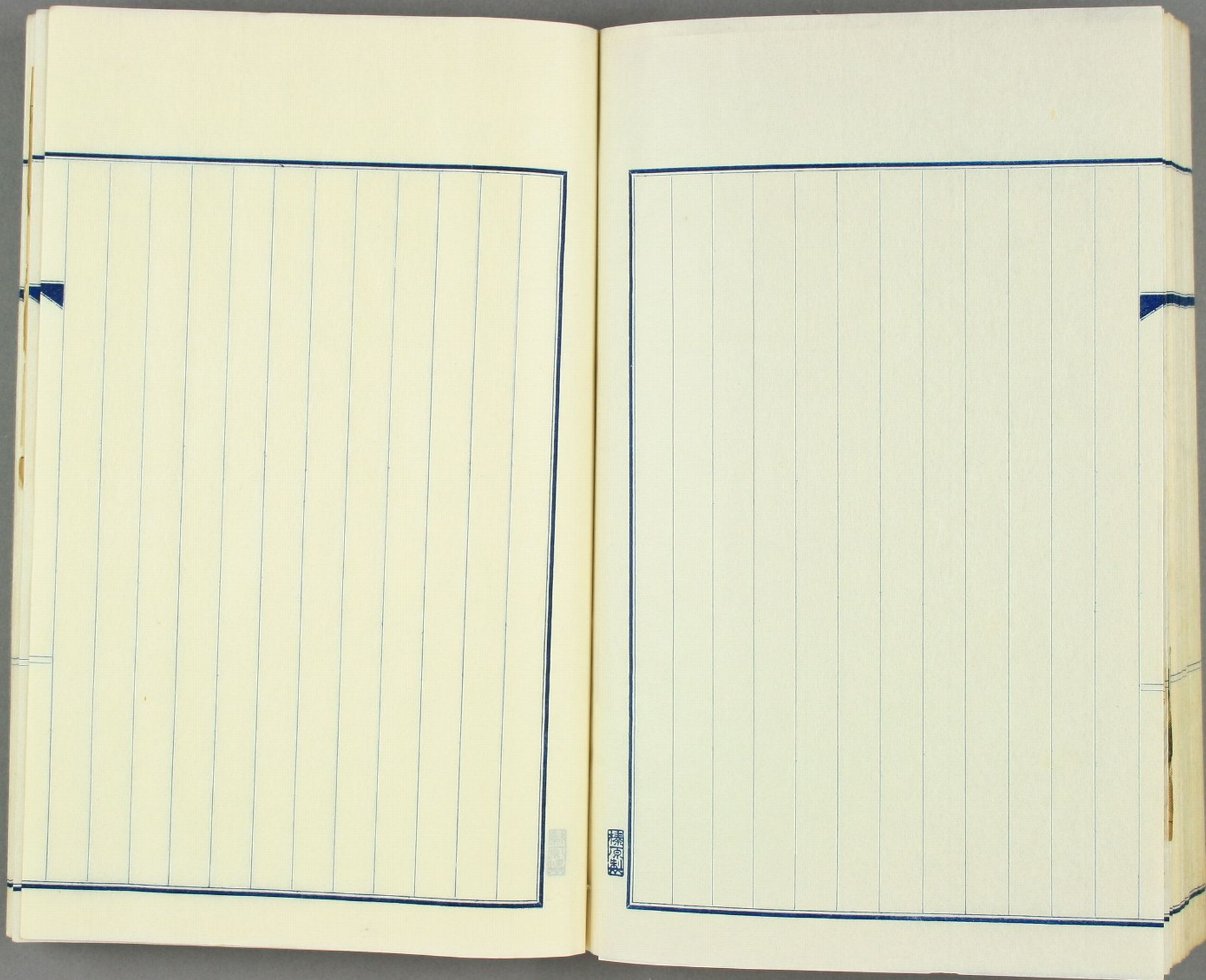
雅間録では茶人の心算、乞児の心算、鐘聲、餘韻のない深体習俗...

の響で山が動くかに響きるとよく實景を穿つてゐる僧寺茫々者...

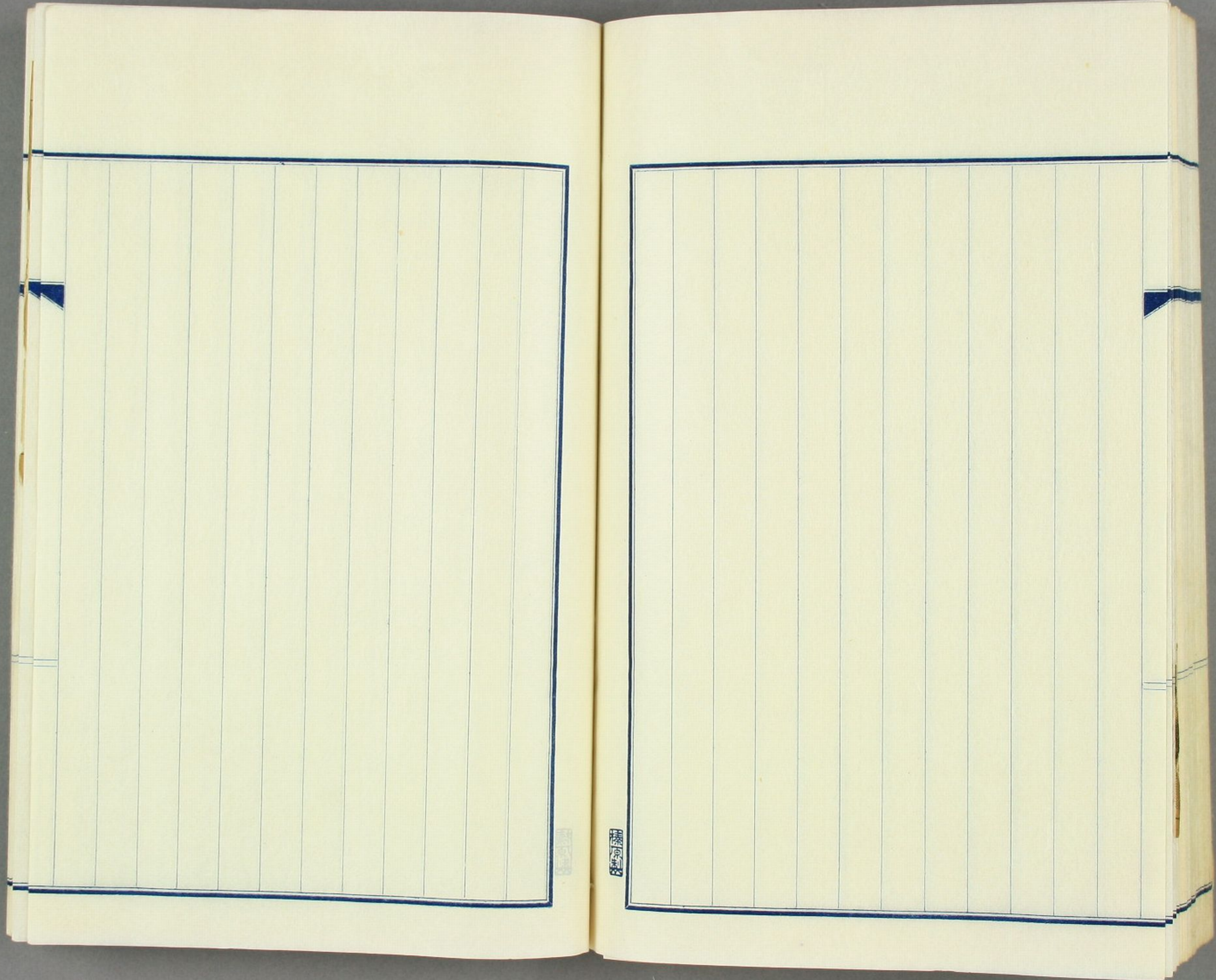
たのは昔組中の水鳥渡談だ。水鳥渡談は徹夜徹尾酒を讀つたもので...

物足らぬ他があるの感誰か文見の原画にならつて巧みに寫す人がないか...

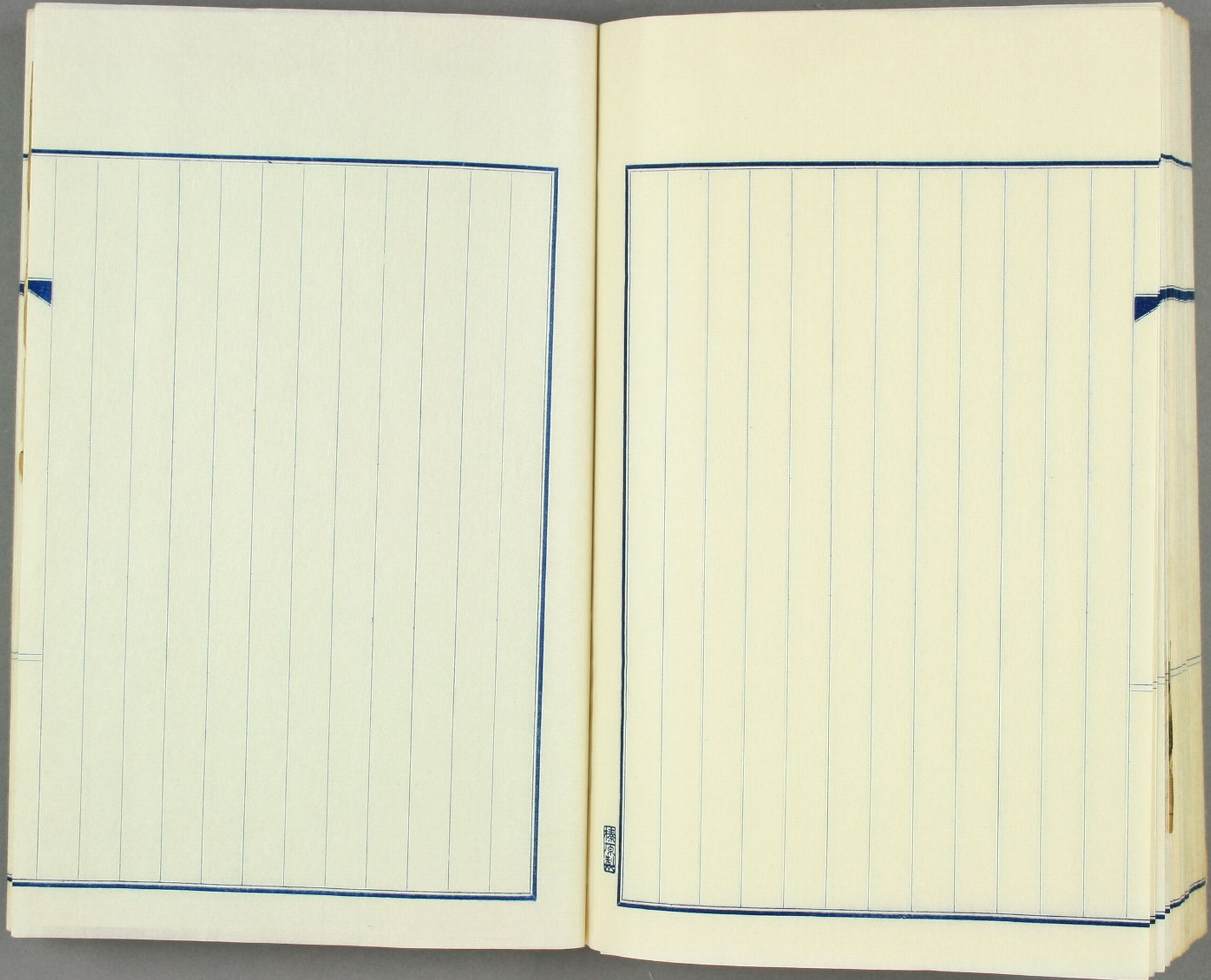
Table with multiple columns and rows, likely a list of names or entries.



東洋堂



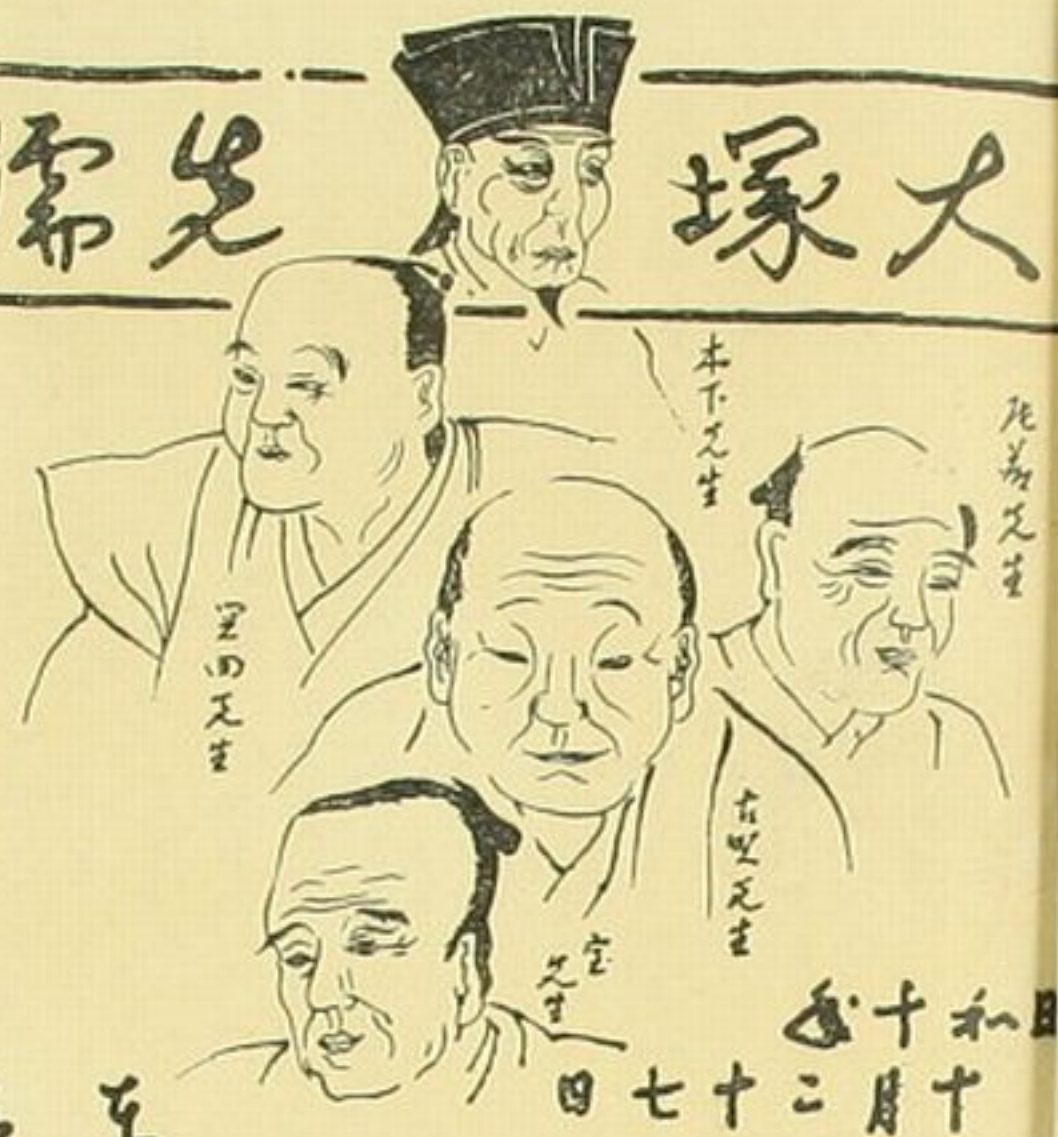
藤原



2013

此圖は、大塚先生、本下先生、尾崎先生、古里先生、石野先生、の五氏の肖像である。

大塚先生 先儒塾所長



東京市役所

和暦十月十七日

狩谷被齋先生
百年祭記念



狩谷被齋先生像

江戸時代の儒學と學者

應神天皇の昔、博士壬仁によつて我が國に將來せられた儒教は、今日に至るまで悠々二千數百年の間に於てよく我が「かむながらの道」と渾然融合して日本國民思想の根幹を爲したのでありますが、その盛衰變遷の歴史を省るに、前後を通じて江戸時代ほど隆盛を極めた時代は他に例を見ないのであります。

江戸時代の儒學は朱子學から始まつて居ります。朱子學の思想が當時の社會の中心であつた武家階級に歡迎せられ、且つ君臣父子の明分を社會の基本道德とする徳川幕府の施政方針と全く吻合致した結果、幕府は之を官學に指定し、元和元年には林羅山に命じ朱子學の根本精神に基いて武家諸法度を作らしめ、又直轄學問所たる昌平學に於ては林家を大學頭に任じ専ら朱學を講じて之を獎勵鼓吹致しましたので、その勢は全く世を風靡するに至つたのであります。一方、山崎闇齋、木下順庵、貝原益軒等の碩學も亦程朱の學を奉じて夫々門戸を張り、その系統は長く後世に續いたのであります。この頃近江聖人と讃へられた中江藤樹によつて樹立されその高弟熊澤蕃山によつて大成された陽明學は又大勢力を有し、朱學と共に江戸時代を通じて儒教思想の二大主流を爲したのであります。

これより少し後れて世に出た山鹿素行は始めて朱學に反抗して古學を唱導し、林家の形式的な學問を排して儒教精神の日本化を試み、その活動的な精神はよく武士道を鞭撻して江戸三百年の士心を支配するに至つたのであります。この學説は幕府の忌諱に觸れて遂に流調の憂目を見ないのであります。この時分より儒教は漸く多岐の流派に分れ、木下順庵の門に出た新井白石は實用功利の學を重んじ廣く知識を世界に求めようとした努力は後の蘭學の發達を促進し、又山鹿素行の古學の系統を引く伊藤仁齋は實踐倫理を主張して關西の重鎮となり、荻生徂徠は法術主義功利主義に則る政治論者として又古文辭學派の開祖として江戸の學界に君臨したのであります。こうした民間の二大勢力に併行して獨立學派や批評學派等が競ひ興り盛衰の軌漸しく甚しくなつて來た頃、その反動として新たに起つた折衷學派や考證學派は顯然たる學問界にあつて相當の勢力を

得て居りましたが、是らは何れも活動的でなく専ら、諸教の諧調を企て瑣細な考證にのみ走つて獨立思索の體系を持つてゐなかつたので意氣自ら銷沈し、必然的に學問界の衰微を來したのであります。

丁度この頃は、絢爛たる江戸文化はその絶頂に達し、永く續いた太平無事の世相は自ら政治の弛緩人心の廢弛を招き、恰も豫頭し始めた個人主義の風潮は延いて思想界の紊亂を招致し、剩へ外國關係の逼迫によつて啓發された西洋文明への關心は急速に進展し、その反動として攘夷尊皇思想が大きな壓力を以て天下を覆ひ始めて參りました。幕府は是らの情勢を洞察し國民思想の統一醇化を計る爲め遂に寛政異學の禁を發令致しました。これは一代の名宰相として聞えた松平定信の發議によるもので、寛政二年六月林大學頭よりその論達を下したのであります。當時の大學頭は名高い林述齋で、その下には寛政三博士と誦はれる柴野栗山、尾藤三州、古賀精里や岡田寒泉などが専ら事に従ひ、官學の更張に懸命の努力を盡しました。この結果は一時衰へかけた林家の朱學を中興し、衰勢に向ひつゝあつた日本の儒學界に新生命を打込む事には成功致しましたが、世は已に幕末多事多端の際に直而し、人心は全く眞熾な學問より離れて居りました。加之、朱子學の本領たる大義明分論は尊皇の精神を極度に助長し、立原登軒、藤田東湖等の主唱した水戸學の如き一大國民運動が各地に勃興して最早や捲ふべからざる形情となり遂に幕府瓦解の大きな動力を自ら造つてしまひました。

江戸時代はあらゆる角度からみて舊日本の大成期でありました。この舊文化の上に樹てられた明治大正の西洋文明が即ち現代の日本文化であります。儒教は今でこそその表面からは姿を隠してをりますが、日本人の胸裡には常に確固たる儒教精神が宿り、修身齊家治國平天下の國民道德は全く我々祖先の習めた儒教に鞏固な根底を置いてゐる事を忘れてはなりません。即ち儒教は我々の各自に生きてゐるのであります。

この大塚先儒墓所は、日本儒教史上殊に輝かしい事蹟を遺した寛政異學の禁に盡力せられた三博士、岡田寒泉及び木下順庵、室鳩巢の諸先生を始め世に名聲を馳せた多くの大學者の墳墓であります。湯島聖堂を首として東京市内に數多く遺る儒教史蹟の中最も意義深き史蹟として尊重せらるべきものであります。

學は和漢を兼ね、識は古今に涉り、考證學者として又說文學者として偉大なる功績を遺した狩谷棧齋先生歿して茲に一百年。その學徳いよ／＼光輝を放ち、後學を益する事最も多く、大正十三年二月辱くも從四位の御贈位さへあつたのである。

先生は安永四年十二月一日下谷池の端の書肆青裳堂高橋惣兵衛の一子に生れ、寛政十一年十二月二十一日二十五歳の時狩谷保古の養嗣子となつた。初の名は眞末、字は自直、通稱は與惣次、後名を望之、字を卿雲と改めた。棧齋はその號、別に蟬翁と號し、その室に署して實事求是書屋といつた。狩谷氏は津輕藩の御用達で代々津輕屋三右衛門と呼び、木郷湯島に住んでゐた。

先生は少時律令の學に志して六國史より律令格式等の古記録を耽讀されたが、思へらく、唐代の典籍に涉らざれば到底その根據を窮め難しと。是より六典・唐律・太平御覽・通典等の諸書を精研し、遂に漢代に遡り、又進んで六經を修め、宋明人の說を屑しとせずして、専ら漢唐の古注疏を研鑽せらるるに至つたのである。

實に先生は時流に超越した純然たる學者で、金石

學者としても書誌學者としても共に忘るべからざる人であると共に、家當むの故を以て藏書家としても江戸屈指の人であつた。遺著數十種、その中最も著名なものは日本靈異記考證、本朝度量權衡考、古京遺文、箋注和名類聚抄、轉注說等がある。その説文を詠じた歌に「文字の關まだ越えやらぬ旅人は道の奥をばいかで知るべき」といふのがある。實にや先生の創立せられた説文會は今尙連綿として流風遺澤の存するものがあり、その斷簡零墨といへどもなほ學界の至寶として尊重せらるる所以は、實にその學徳の然らしむるところと謂ふべきである。

先生は、天保六年閏七月四日六十一歳を以て逝去せられた。遺骨は淺草清島町の天龍寺に葬つたが、大正十一年、豊島區西巢鴨四丁目法福寺に改葬された。諡號は先生生前に自ら定め置かれた常關院實事求是居士といふのである。墓碑は、その親友であつた帷堂松崎復先生銘を撰び、又題額は親友として名高い儒醫拙齋澁江全善之を書し、筆者は成齋小島知足である。墓碑は高さ約六尺、碑背に先生の子孫狩谷三市氏の撰んだ改葬の記が刻してある。

(斯文會誌)

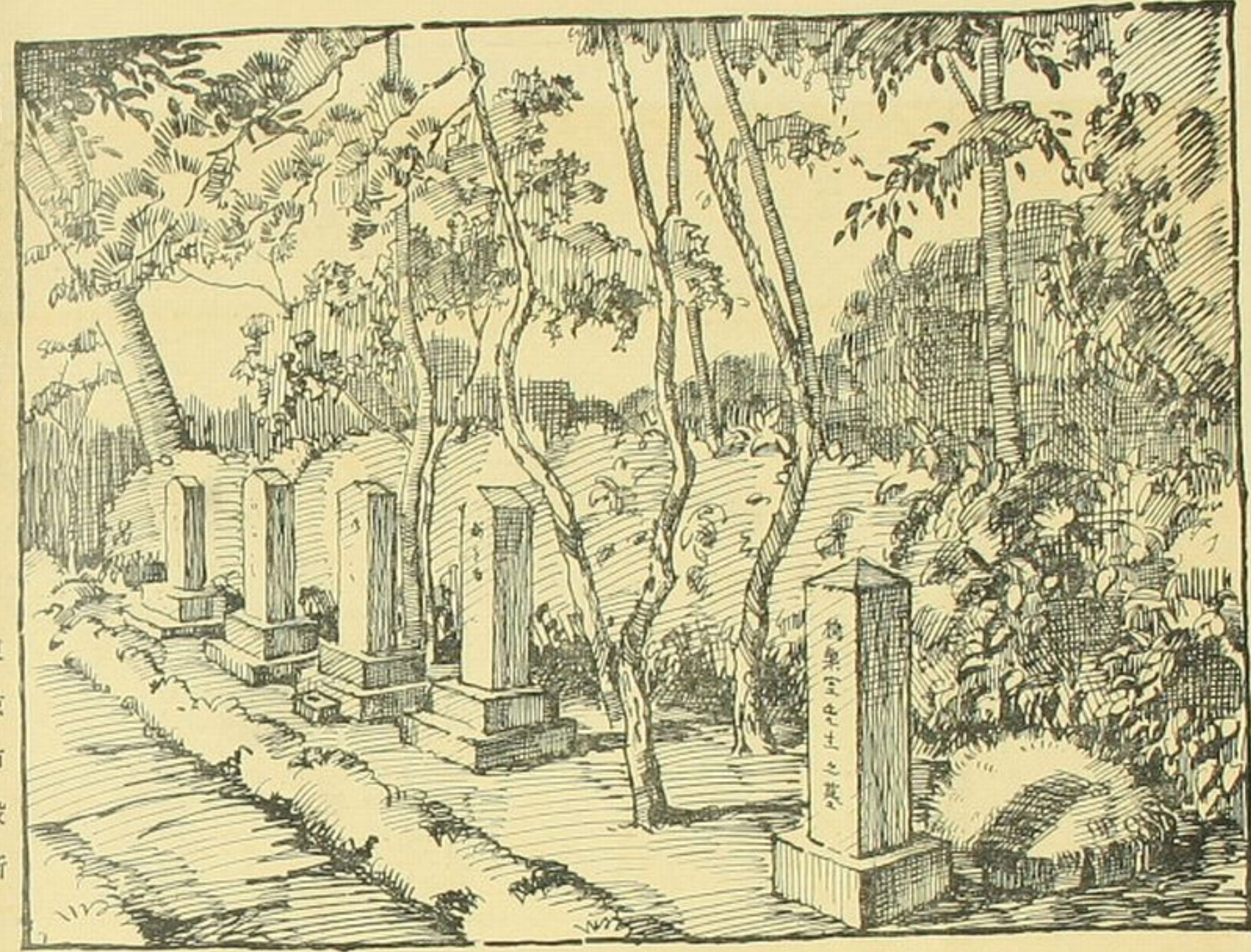
會場
早稻田
大隈講堂

發表の夕

日午後五時...

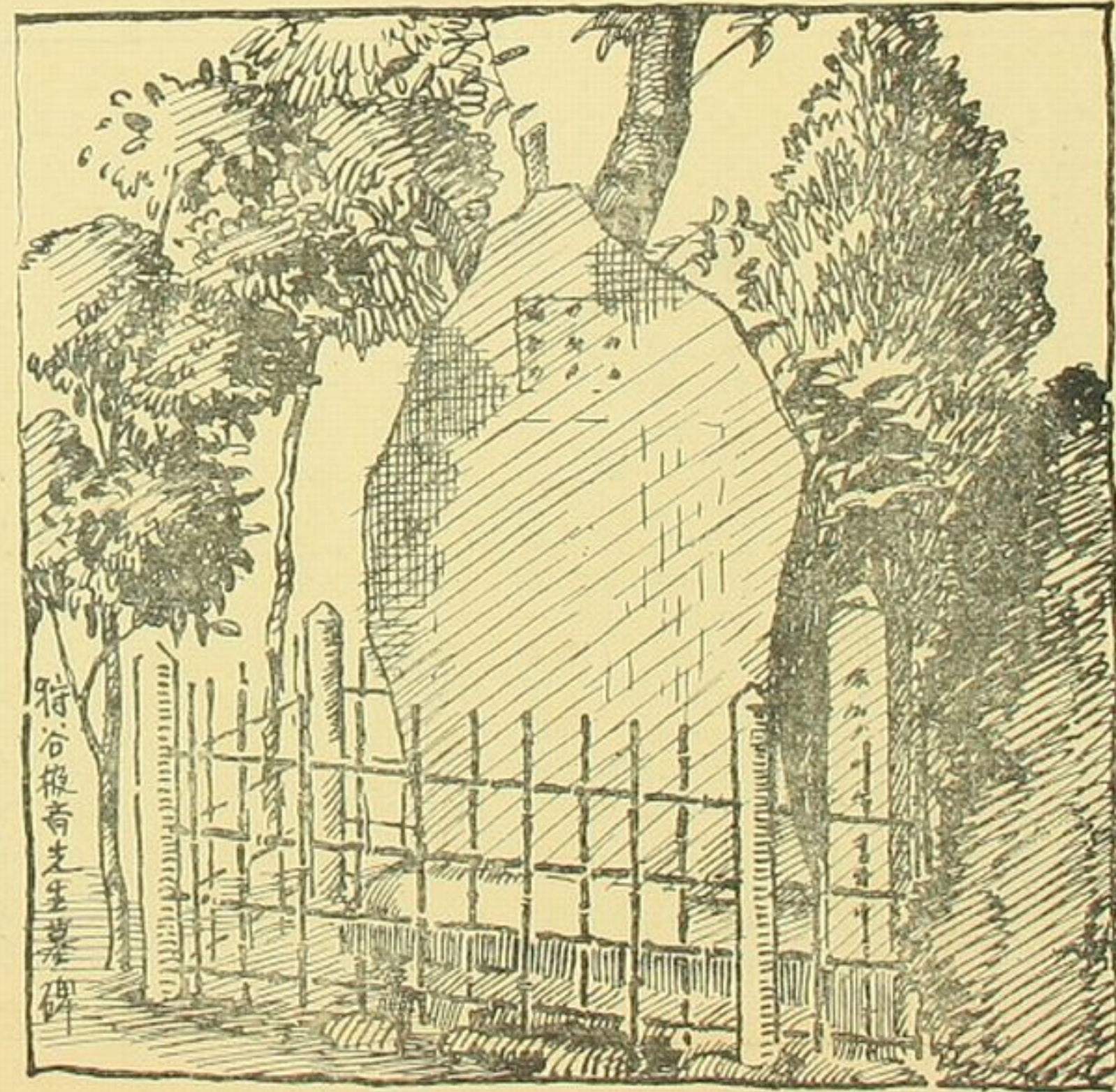
- | | |
|-----------|---------------|
| 五、新應援歌の實演 | ビクター管絃樂團 |
| 六、獨唱 | 徳山 璉 |
| 七、同 | 渡邊はま子 |
| 八、同 | 久富 吉晴 |
| 第 二 部 | |
| 九、挨拶 | 新應援歌作詞者 長田 幹彦 |
| | 同 作曲者 杉山長谷雄 |
| | 同 細田 義勝 |
| 一〇、童謡と舞踊 | 早大童謡研究會 |
| | 附屬園兒諸嬢 |
| | 崔 承喜 |
| 一一、舞踊 | 小唄 勝太郎 |
| 一二、唄 | 小唄 勝太郎 |

主催 早稻田大學新聞社



昭和十年十月二十七日

東京市役所
(京橋・小塚印行)



昭和十年十月二十七日

東京市役所
財團斯文會
狩谷振吉先生遺像

■早稻田大學新應援歌■

仰げよ莊嚴

一、ワセダ ワセダ

ワセダ ワセダ ワセダ
仰げよ 莊嚴 我等の 學府

眞理の 殿堂 塔影 高し
榮冠 はえあり

勝てよ 力カ

青雲 亂れて 天馬は 翔る

ア、ラツタ ラツタ ラツ ヘイ

ラツタ ラツタ ラツ

ワセダ ワセダ ワセダ

二、ワセダ ワセダ

ワセダ ワセダ ワセダ
日輪 高照り 雄圖は 躍る

燃えたる 血潮は 溢る、 生命

堅壘 無敵ぞ

勝てよ 力カ

鐵棍 一撃 敵陣 崩る

ア、ラツタ ラツタ ラツ ヘイ

ラツタ ラツタ ラツ

ワセダ ワセダ ワセダ
(二番繰返し)

勝てよ早稻田

長田幹彦 作詞

細田義勝 作曲

一、勝てよ 早稻田

ガンばれ 早稻田
勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

打てよ 鐵腕 大空 高く

勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

飛球 かゞやく 本壘打

ソラまた出た 本壘打 ソラ本壘打

長田幹彦 作詞
杉山長谷雄 作曲

二、勝てよ

早稻田 ガンばれ 早稻田
勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

衝けよ 敵壘 疾風の ごごく

勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

奪へ 堅陣 勝ちいくさ

ソラまたまた 盜壘だ 盜壘だ

三、勝てよ

早稻田 ガンばれ 早稻田
勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

投げろ 剛球 生命を こめて

勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

胸にや 血がわく 血がたぎる

ソラ三振 見遁した 見遁した

四、勝てよ

早稻田 ガンばれ 早稻田
勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

奮へ 早稻田よ 制覇の 響れ

勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

勝つて 讚へよ このちから

ソラ兜の 緒をしめる 緒をしめる

(一番と四番は最後に繰返し)

勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

勝てよ 早稻田 ガンばれ 早稻田

新應援

二月十...

入場料
金 五 十 錢
學 生 券 四 十 錢

音樂と舞踊

第一部

一、挨拶

喜多壯一郎
寺澤信計

二、早稻田大學校歌
應援歌『紺碧の空』外二つ

早大管絃樂團

三、松竹スターの挨拶

近衛敏明

日下部章

高杉早苗

桑野通子

水島光代

四、ジャズ演奏

指揮

近衛敏明

鳥屋野節原附近を青海庄と稱したものであれば附近に文献が残つて居らぬければならぬ筈なのに寧ろ私は知らず、之に反し彌彦庄又は金津庄と稱した文献は澤山ある一節を左に掲げる。

△和漢三才圖繪六十八越後紫竹村在蒲原郡彌彦庄鳥屋野村

△越後名寄五蒲原郡西方寺彌彦庄鳥屋野

△大谷遺蹟録一鳥屋野御舊跡、越後國蒲原郡金津庄鳥屋野

△北越略風土記五蒲原郡、西方寺一向宗東派金津庄鳥屋野村

△北越雜記十七承久の頃親鸞聖人越後國府へ遠流の時に教訓の爲と所々遊行なし、蒲原金津の庄蒲原にて十字名等云々。

以上要するに私は青海庄は加茂附近で、青海神社も該地域に在つたが中古加茂神社境内へ移遷し、社名をも改稱したものと解釋する。つゞく



昔の學校の回顧

山本與一郎

(一) 小學校の開始

明治維新前には教育機關は全國何處でも漢學塾と寺子屋ばかり、その頃新潟では塾は一ヶ所もなく寺子屋ばかりであつたといふ。

新潟で始めて學校が開かれたのは明治六年三月でこれは明治政府の新學制が定められたのが明治五年八月であるから、それによつて新潟では先づ小學校が開設された譯だ。町内を五學區に分け一區に二校を設けた。開設の後可なりの期間校舎建築といふ運びに到らないで假りに寺院を以てこれに宛てた。

第一區小學校は超願寺で(今の西堀二)校長は稻庭一作といふ人、この人はすあひ手代で(税關の係)校名を時習舎といひ。第三區小學校は光林寺(紐谷小路)にあり校長は昔の寺子屋の御師匠様の安藤平次郎といふ人で校名は啓衆館、第三區小學校は長崎眞宗寺、醫師で御師匠様であつた後藤宗謙と

ちんちん 十月

いふ人が校長で校名を發廣塾と稱し、第四區小學校は長音寺で順天舎と稱した、田中鼎といふ人が校長でその後新潟縣下小學校の教科書の多くは同氏の編輯である。

明治二十年師範學校が尋常師範學校と成つた時、同校の漢文教師となり縣下教育界に名のあつた人であつた。第五區小學校は毘沙門神社の附近の蓮田の中に鹽松といふ大きな料理店があつた。その跡を校舎に宛てた、見方尙作といふ人が校長であつた勇進館と稱した。

小學校の校名が時習舎とか啓蒙館とか順天舎とかいふは如何にも當時の様子を示すものである。開始の頃は私立であつたのが明治七年に公立になつた時、校名が時代にふさはないので改めんと考へた結果場所因縁ある名稱にした方がよからうといふので次の様に改めた。

- 第一區小學校 鏡淵小學校
- 第二區小學校 西堀小學校
- 第三區小學校 四番堀小學校
- 第四區小學校 須崎小學校
- 第五區小學校 豐照小學校

西堀通、須崎町、豐照町にあつたものは町名をそのままに校名としたのである。第三區小學校は廣小路の眞宗寺にあり廣

小路を四番堀といふので、四番堀小學校と稱したのである。超願寺にあつた第一區小學校を鏡淵小學校と改稱したのはむかし、むかし、超願寺の附近に鏡が淵といふ池があつたといふに基て當時の校長藤井久三氏により命名されたのである。一番さきに校舎を新築したのは豐照校である。新築當初から今の場所である。鏡淵小學校は學校開始から今日まで續いてあるが、場所は三度(り)位變つた。須崎校は後に長音寺からその附近の堀に沿ふた民家に移つたがこれが今日の湊小學校の前身ではあるまいか。

(二) 不如學舎

明治以前には寺子屋と十呂盤屋とはかりであつた。新潟にも明治になつてから時代の促す所であつた。漢學塾が設けられた。今の郷土博物館の、さし向ひ東堀通西側の堀角に、すあひ番所があつた(その建物は現存する)その番所の跡を校舎とした。長岡藩士の藤野友三郎といふ人が教師頭であり前記の第四區小學校長の田中鼎氏も教師であつた。塾名は何んといふたか筆者は聞いて居なかつた、創立は明治六年頃と思はれる。

明治七年(り)新潟出生の藤井久三(前記の通鏡淵小學校長)といふ人によつて不如學舎といふ漢學塾が開かれた。この學舎が一年と盛んになり數名の塾生を育てた。如夢齋藤井先生は一生を郷黨の子弟教養に盡され中央學界に身を立てられなかつたが島田重禮重野安釋などいふ鴻儒が學友であり博覽強記堂々たる天下の學匠であつた。

新潟に昔から古川屋といふ建具屋があり子孫も現存してゐる。藤井先生はその家の二男に生れたが家業を教へても覺へず朝夕讀書に耽つて居た。建具屋の小供が家業を怠つて書物など見て居ては大變だと父兄に叱責せられる。しかし好きな書見は廢められない。屋根へ上つて竊に勉強して居たといふ様に天性好學の人であつた。遂に江戸に出て大橋訥庵に就き或は聖堂に學んで學業を大成された。かくて人間に箔が附いた爲めに幕府麾下の土に養はれ藤井氏を冒したのであるが戊辰の役に榎本武揚に従ひ松前に赴く時乗つた軍艦が太平洋に沈没して氏は官軍に捕えられた。併し放されてから新潟の生母が病氣で郷里に歸りそれから新潟に學塾を開いた、後年榎本氏來越相ひ會し兩者感慨無量乃ち榎本氏は「往事如夢」と書して藤井氏に贈られた。それより先生は如夢齋と稱せられ

た。

昔、學問を修業させるに六七歳頃から漢文を教へた。今日の如き授業法などには無頓着であつた様でも全くそうとも限らない。幼童に大學中庸を始めから教へても判らぬとて加減をした。そんな譯で支那では「三字經」といふが編まれたのは周知の事である。三字で一句とする最短句であるので小供にも覚え易かつた大橋訥庵はそれに擬して「本朝三字經」といふものを作つた蓋しこれも國民的覺醒であらう。

我日本 一稱和 地膏腴 生嘉禾
人勇敢 長干戈 衣食足 貨財多

といふ風のものである。藤井先生は訥庵門下であるので不如學舎では新入塾の幼年にはこの本朝三字經が教科書であつた。町内で少し書物を習ふといふ青年及び五小學校の教師の大半が皆な藤井先生を師と仰ぐといふが如くに不如學舎は盛んであつた。故政友會總裁の原敬氏もその頃新潟に在つたので藤井先生の門に學ばれた。

(三) 第六大學區本部の新潟

始めて文部省が設けられ全國を通じて學制を實施するに於

ては決して海軍、陸軍又は外交等の計畫に比して何等の遜色なき大規模のものであつた。新學制が定められたのは明治五年であつた。その時全國を分つて八大學區としたが翌六年に七大學區に改め毎區に本部を設け各本部に一大學を建てる事となつたその七大學區の本部は次の如くである。

- 第一大學區本部……東京
- 第二大學區本部……愛知
- 第三大學區本部……大阪
- 第四大學區本部……廣島
- 第五大學區本部……長崎
- 第六大學區本部……新潟
- 第七大學區本部……宮城

大學建設の第一歩として先づ明治六年より七年に互つて、各大學區本部に英語學校（始めは外國語學校と稱した）を設けた外にまた師範學校（今日の高等師範學校）を設けた。第六大學區本部である我新潟に於て明治七年三月十九日官立師範學校が設けられ明治七年三月二十九日官立外國語學校が設けられた同年十二月二十七日英語學校と改稱された。

英語學校の校長が三穂健道氏であり大石監二氏が師範學校長であつたことを筆者は記憶して居る。そして、英語學校に

ランバート氏、ハコーフ氏といふ外國人教師が居られたことを知つて居る。英語學校の生徒が英語が上手で、その頃新潟に居た宣教師のフアイソンの居宅が英語學校の近所で同氏を訪ふと、英語で談話してあるのを傍にあつて不思議に見て居たなどいふ實驗もあつた。

國家の財政に異變がなかつたら間もなくこゝにも綜合大學設立を見ることが出来たのだらうが偶々西南戰爭の影響で折角の計畫も全部廢滅に歸し運動の結果僅に醫科大學と高等學校のみの設立を見ることは地方としての恨事である。

(つゞく)

お 盆

中山 秀 雄

この一篇は「例年當校生徒に課して居る夏季休暇宿題答案の一である。これが最優篇だからと云ふのではなく一例として一學年の短いものを選んだ筈である。ピントの合はない點もあるが、殆んど加筆をしないことにした。此の他雜誌の埋草的のものが多量にある。編者の御好意が得られたら順次掲載したい」と金塚芝中致諭から熱心な紹介の言葉を添えて寄せられたものであるが、かういふ見たままの探訪談はなまじい研究家の成心を以て蒐録したものよりは或

- ◎詠詞
- ◎位記
- ◎勳章
- ◎勳記
- ◎爵記
- ◎辭令
- ◎李鴻章筆滄浪閣額



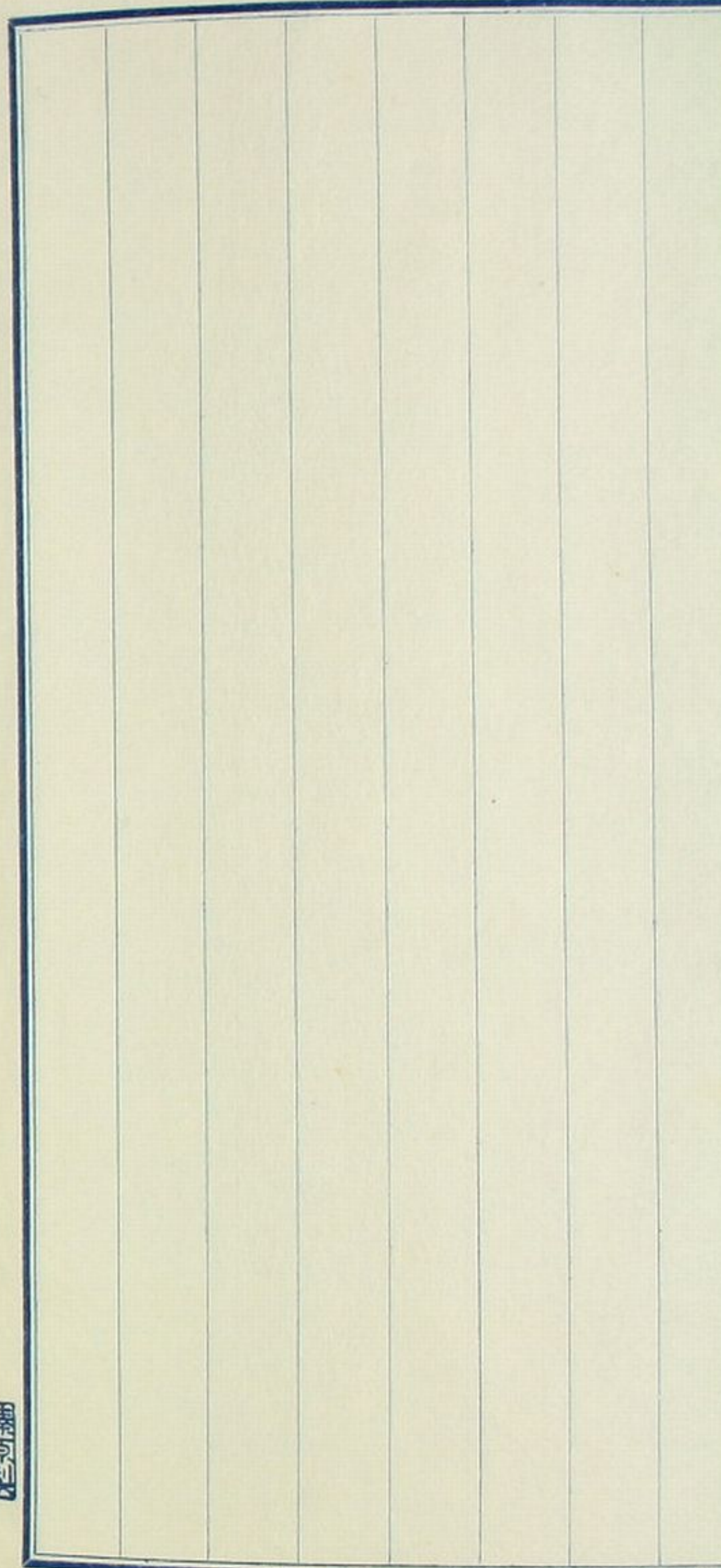
(以上伊藤博文公藏)
(李王家御寶下)
(大體滄浪閣に於ける伊藤公と山縣公)

- 名刺
- 名刺原型銅版
- 紙入
- 墨壺
- 筆
- 憲法起草當時使用の机衆議院藏
- 禮裝用劍

(以上古谷美代氏藏)
(以上時間茂弘氏藏)
(馬越恭一氏藏)

議會關係

- 憲法發布式油畫
- 憲法發布明殿御宴油畫
- 第一議會開院式油畫
- 第一議會貴衆兩院全景寫真
- 同貴族院議場寫真
- 第一議會當時の議員寫真
- 第一議會速記録
- 歷代貴族院議長肖像寫真
- 「帝國議會」額
- 歷代議長寫真
- 第一議會議案原本
- 第一議會議速記録
- 歷代議長書翰
- 大山元帥宛立憲政友會組議會開催に對する準備行

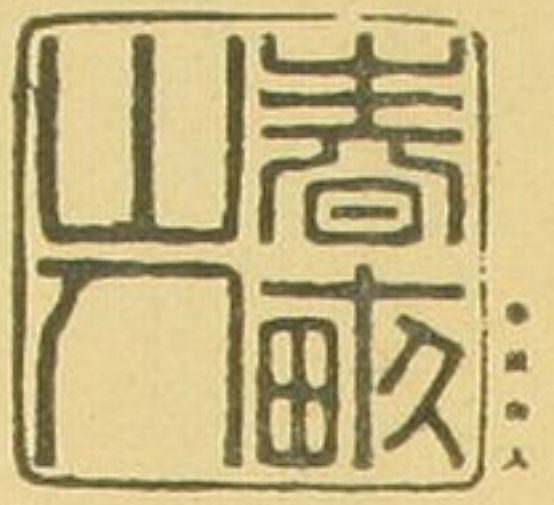
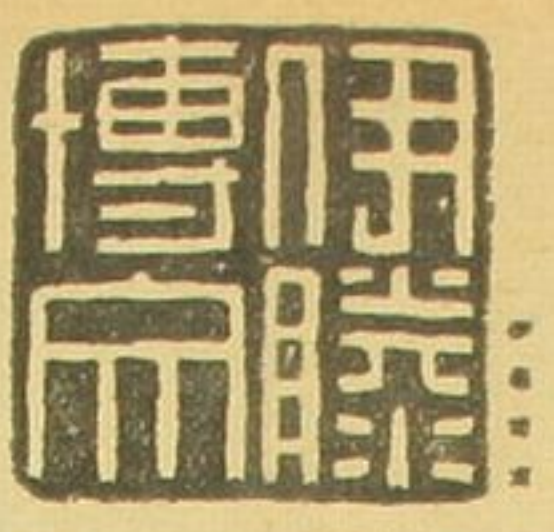


會期 昭和十年十月一日—十七日
 會場 上野廣小路 松坂屋

帝國議會開設四十五周年記念

伊藤博文公展覽會

主催 東京朝日新聞社
 後援 内務省・貴族院・衆議院



(伊藤公印)

伊藤博文公肖像油畫

パノラマ及びジオラマ
 伊藤公の一生を語る

(貴族院蔵)

- 少年時代の機智
- 雪の日の母堂の訓育
- 御殿山英國公使館焼打
- ロンドンへ密航
- 馬關砲撃の際英國との折衝に當る
- 各國公使の初参内にその通譯をなす
- 兵庫縣知事時代の公
- 岩倉遣外使節に副使として隨行す
- 日本最初の鐵道開通式
- 憲法をグナイストに學ぶ
- 明治十八年天津談判
- 日本最初の内閣閣僚
- 鹿鳴館の夜會
- 憲法起草のため夏島に渡る
- 夏島別荘に於いて憲法草案を練る
- 憲法發布式
- 初期議會貴族院本會議の光景
- 日清講和談判春帆樓會議
- 立憲政友會發會式
- 大磯滄浪閣に自適する公
- 愛刀家伊藤公

伊藤公自筆文書

(出品者名記載なきは伊藤博文公藏)

- 石田太郎宛伊藤舜輔書翰 (伊藤文吉男藏)
- 桂小五郎宛伊藤舜輔書翰卷物 (木戸幸一侯藏)
- 桂小五郎宛花山春太郎 (伊藤公藏名) 書翰 (木戸幸一侯藏)
- 最初の地方官會議上奏文 (明治八年)
- 明治十一年上奏文 (伊藤文吉男藏)
- 横村京都府知事宛書翰 (伊藤文吉男藏)
- 憲法制定に關する意見書 (明治十四年)
- 大隈伯の密奏 (明治十四年)
- 憲法調査隨員命令書 (明治十四年)
- 洋行中岩倉公宛憲法意見 (明治十四年)
- 歐洲滞在中の手簡 (明治十五年)
- 歐洲旅行中の覺書 (明治十五年)
- 憲法上國體の研究 (明治十五年)
- 我國體及び憲法論 (明治十六年)
- 議會と政府との關係 (明治十六年)
- 天津談判西巡日記 (明治十八年)
- 貴族院令制定の草案 (明治十九年)
- 帝國憲法と英國主義 (金子堅太郎伯藏)
- 内閣強固ならざる原因について
- 憲法運用につき再び外遊せんとして奉つた上奏文案 (明治二十二年)
- 貴族院議長就任に關する黒田清隆伯宛書翰 (小宮三保松氏藏)
- 第一期貴族院議長就任に關する書翰 (明治二十三年)
- 大津事件手記 (明治二十四年)
- 總選舉と政府の心得 (明治二十五年)
- 日清開戦の通告電報案 (明治二十七年)
- 東洋危機に關する上奏案
- 日清戰役中明治大帝の外國干涉御診念 (明治二十八年)
- 三國干涉現出の所以 (明治二十九年)
- 日清休戰條約締結に關する意見書草案 (明治二十八年)
- 日清講和條約批准後の措置 (明治二十八年)
- 立憲政友會組織の下相談 (明治三十一年)
- 増稅案問題に關する上奏文案 (明治三十四年)
- 正二位大勳位侯爵奉還の上奏 (明治三十四年)
- 貴族院改造の上奏 (明治三十四年)
- 再び桂内閣との妥協 (明治三十六年)
- 政友會を去るに際して捧呈せる上奏文案 (明治三十六年)
- 露國に對する元老重臣會議 (明治三十六年)
- 露國政府へ提議草案 (明治三十六年)
- 日露開戦直前の元老會議 (明治三十六年)
- 日露戰役中の苦心 (明治三十八年)
- 最初の韓國統監に就任す (明治三十九年)
- 悲壯なる萬死の覺悟 (明治四十一年)
- 道義前日滿洲列車中封筒に認めたる詩稿 (明治四十二年)
- 歌稿 (伊藤文吉男藏)
- 憲法草案
- 議院法草案



○日露戰役の我提督に視察をあぐ
 ○韓國統監として全道を視察す
 ○老友井上馨の病床を訪ふ
 ○滿洲漫遊、遺難直前ハルビン驛頭に露兵を
 閱する公

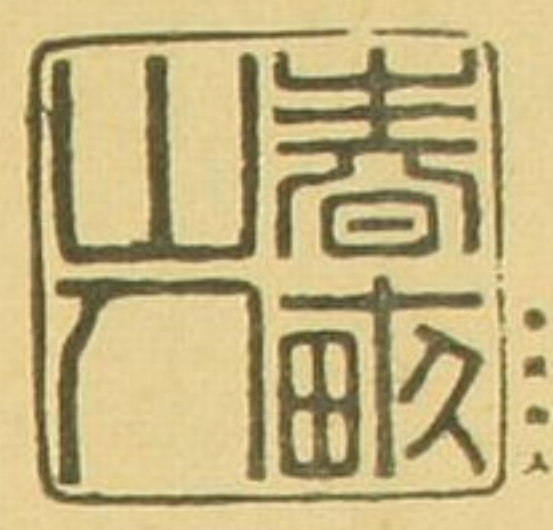
會期 昭和十年十月一日—十七日
會場 上野廣小路 松坂屋

帝國議會開設四十五周年記念

伊藤博文公展覽會

主催 東京朝日新聞社
後援 内務省・貴族院・衆議院

(伊藤公印)



伊藤博文公肖像油畫

パノラマ及びジオラマ
伊藤公の一生を語る

- 少年時代の機智
- 雪の日母堂の訓育
- 刑死せる恩師松陰を埋葬す
- 御殿山英國公使館焼打
- ロンドンへ密航
- 馬關砲撃の際英國との折衝に當る
- 各國公使の初参内にその通譯をなす
- 兵庫縣知事時代の公
- 岩倉遣外使節に副使として隨行す
- 日本最初の鐵道開通式
- 憲法をグナイストに學ぶ
- 明治十八年天津談判
- 日本最初の内閣閣僚
- 鹿鳴館の夜會
- 憲法起草のため夏島に渡る
- 夏島別荘に於いて憲法草案を練る
- 憲法發布式
- 初期議會貴族院本會議の光景
- 日清講和談判春帆樓會議
- 立憲政友會發會式
- 大磯滄浪閣に自適する公
- 愛刀家伊藤公
- 日露戰役の我捷報に祝杯をあぐ
- 韓國統監として全道を視察す
- 老友井上馨の病床を訪ふ
- 滿洲漫遊、遭難直前ハルビン驛頭に露兵を
閱する公
- 京城南大門前の朝鮮施政風景
- 京城博文寺碑文石刷 (春政會藏)
- 夏島憲法記念碑石刷 (庄崎俊夫氏藏)
- 伊藤公等脱藩洋行當時の乗船額 (春政會藏)
- 伊藤公年譜
- 寫 眞 (生實地・墓地等)
- 伊藤公肖像油繪 (小室三保氏藏)

伊藤公自筆文書

(出品名目記載なきは伊藤博文公藏)

- 石田太郎宛伊藤舜輔書翰 (伊藤文吉男藏)
- 桂小五郎宛伊藤舜輔書翰卷物 (木戸幸一侯藏)
- 桂小五郎宛花山春太郎(伊藤公愛名)書翰 (木戸幸一侯藏)
- 最初の地方官會議上奏文 (明治八年)
- 明治十一年上奏文案 (伊藤文吉男藏)
- 横村京都府知事宛書翰 (伊藤文吉男藏)
- 憲法制定に關する意見書 (明治十四年)
- 大隈伯の密奏 (明治十四年)
- 憲法調査隨員命令書 (明治十四年)
- 洋行中岩倉公宛憲法意見 (明治十四年)
- 歐洲滞在中の手簡 (明治十五年)
- 歐洲旅行中の覺書 (明治十五年)
- 憲法上國體の研究 (明治十五年)
- 我國體及び憲法論 (明治十六年)
- 議會と政府との關係 (明治十六年)
- 天津談判西巡日記 (明治十八年)
- 貴族院令制定の草案 (明治十九年)
- 帝國憲法と英國主義 (金子堅太郎伯藏)
- 内閣強固ならざる原因について (明治二十二年)
- 憲法運用につき再び外遊せんとして奉つた
上奏文案
- 第一期貴族院議長就任に關する書翰 (小宮三保氏藏)
- 大津事件手記 (明治二十三年)
- 總選舉と政府の心得 (明治二十四年)
- 日清開戦の通告電報案 (明治二十五年)
- 東洋危機に關する上奏案 (明治二十七年)
- 日清戰役中明治大帝の外國干涉御軫念 (明治二十八年)
- 三國干涉現出の所以 (明治二十九年)
- 日清休戰條約締結に關する意見書草案 (明治二十八年)
- 日清講和條約批准後の措置 (明治二十八年)
- 立憲政友會組織の下相談 (明治三十一年)
- 増稅案問題に關する上奏文案 (明治三十四年)
- 正二位大勳位侯爵奉還の上奏 (明治三十四年)
- 貴族院改造の上奏 (明治三十四年)
- 再び桂内閣との妥協 (明治三十六年)
- 政友會を去るに際して捧呈せる上奏文案 (明治三十六年)
- 露國に對する元老重臣會議 (明治三十六年)
- 露國政府へ提議草案 (明治三十六年)
- 日露開戦直前の元老會議 (明治三十八年)
- 日露戰役中の苦心 (明治三十九年)
- 最初の韓國統監に就任す (明治四十一年)
- 悲壯なる萬死の覺悟 (明治四十一年)
- 遭難前日滿洲列車中封筒に認めたる詩稿 (明治四十二年)
- 歌 稿 (伊藤文吉男藏)
- 憲法草案
- 議院法案



(統監時代の伊藤公)

○伊藤公自筆梅子夫人宛書翰 (西朝子氏藏)

○夫人に歸京を促せるもの

○日清戦役中廣島大本營より狀況を報じたもの

○三國干渉を報じたるもの

○外遊中米國よりのもの

○明治三十一年支那よりのもの二通

○遺韓大使として京城にて認めしもの

○明治三十一年渡支に當り認めし遺言狀 (西朝子氏藏)

○寫眞 (青年時代より晩年に至る肖像及び記念撮影等) (伊藤博精公藏)

伊藤博精公、伊藤文吉男、西朝子氏、古谷美代氏、時岡茂弘氏、室田義文氏、藏

伊藤公拜受の勅語

(伊藤博精公藏)

- 最初の首相辭任の際御下賜の勅語
- 樞密院に列せられたる際賜りたる勅語
- 樞密院議長拜任の際賜りたる勅語
- 樞密院開院式の際賜りたる勅語
- 憲法發布賜宴の際賜りたる勅語
- 日清講和條約調印後賜りたる勅語
- 勳爵拜辭を御聽許あらせられず賜りし勅語
- 韓國統監赴任の際賜りたる勅語
- 統監在任中に賜りたる勅語
- 統監辭任の際賜りたる勅語

- 諫詞
- 位記
- 勳章
- 勳記
- 辭令
- 李鴻章筆滄浪閣額

(以上伊藤博精公藏)

(李王家御賞下)

(大體滄浪閣に於ける伊藤公と山縣公)



恩賜品

- 金杯一組伊藤公直筆箱書付 (西朝子氏藏)
- 茶器同上 (伊藤文吉男藏)
- 花盛器 (伊藤博精公藏)
- 花瓶一對 (同右)

伊藤公遺品

- 碁盤
- 硯印
- 揮毫用印各種
- トランク
- シルクハット
- 日本刀(兼定)
- 徳川家達公より贈られたる短刀(貞吉)
- 遺愛の最明寺時頼書軸 (以上伊藤博精公藏)
- 燭台一對
- 遭難當時着用のワイシャツ破片 (伊藤文吉男藏)
- 携帶用碁盤
- 紙入
- 名刺 (樞密院議長當時)
- 韓國王より賜りたるパイプ
- 洗眼器
- 守札 (以上西朝子氏藏)
- 遭難時着用の血痕付着せる肌着上下
- 國宗作日本刀
- 手提鞆
- ペン先
- 名刺
- 名刺原型銅版 (以上古谷美代氏藏)
- 紙入
- 墨壺
- 筆 (以上時岡茂弘氏藏)
- 憲法起草當時使用の机衆議院藏 (馬越恭一氏藏)
- 禮裝用劍

伊藤公遺墨

- 兵庫縣知事時代の書 (内海勝二男藏)
- 大津事變當時の書 (渡邊善十郎氏藏)
- 日清戦役當時の書 (同右)
- 憲法發布記念の書 (金子堅太郎伯藏)
- 政友會結黨の端緒となりし演說草稿 (政友會本部藏)
- 日露開戦の際大山元帥の出征を送る書 (大山柏公藏)
- 韓國統監時代の書 (古谷美代氏藏)
- 同 扇面 (古谷美代氏藏)
- 同 額面 (小宮三保松氏藏)
- 韓國統監辭任の際李大王送別宴席上の書 (七三總句の第一句)
- 同第二句以下森槐南、曾禰荒助、李完用の書
- 右に關する李大王の書 (以上小宮三保松氏藏)
- 遭難前夜の絶筆 (井上三郎侯藏)

議會關係出品

- 憲法發布式油畫
- 憲法發布豐明殿御宴油畫
- 第一議會開院式油畫
- 第一議會貴衆兩院全景寫眞
- 同貴族院議場寫眞
- 第一議會當時の議員寫眞帖
- 第一議會速記録
- 歴代貴族院議長肖像寫眞 (以上貴族院藏)
- 「帝國議會」額 (以上議院藏)
- 歴代議長寫眞
- 第一議會議案原本 (以上衆議院藏)
- 第一議會速記録 (岡田昌孝氏藏)
- 歴代議長書翰 (岡田昌孝氏藏)

○大山元帥宛立憲政友會組織趣意書

(三問答本部長よりの報告書)

○議會開催に對する準備行動報告

(以上大山柏公藏)

○第一議會豫算委員會開催通知書

(大隈省藏)

○新議事堂寫眞及び模型

○朝日新聞及び號外

○憲法發布

○議會開設

○朝鮮施政

○伊藤公遭難

(日比谷圖書館藏)



(文久三年ロンドンに於ける井上馨、遠藤謙助、山尾銜三、井上馨、伊藤博文)

二つの新學說

我が學界權威者の集まりであり帝國學士院では暑休明けの十二日午後三時十五分より久し振りに上野の同院に於て、定例總會を開催し、議長以下五十會員出席、その席上東京文理大助教授今村學士より「白馬山の上の雪蝕現象」といふ氷河遺説を根本的「覆へず革命的實踐」及び會員中村清二博士の「鳴龍」就いてと題する鳴龍の科學的研究等世界的研究が發表され、我學界に大きな波紋をまき起し「科學日本」の精華を中外にとりかした

氷河ではなく

積雪の擦痕

白馬山で實驗した

今村學士の新研究

石工を伴つて白馬大雪

從來日本各地の山嶽地から發見され我が地質學界で太古の氷河の痕跡とされてきたものが實は單なる積雪の擦痕であるといふ氷河遺説を根柢から覆す新學說が若き一學徒により發表され地質、動植物考古學上に一大センセーションをまき起さうとしてゐる、此の若き學徒は帝國學界の權威者今村力三氏氏の令息今村學士で、同學士が十二日學士院總會で「白馬山の上の雪蝕現象」と題して發表した研究によつて端なくも問題となるに至つたものである、今村學士は今まで氷河の痕跡とされた際のついでに岩石に對して大きな疑問を抱き「これらの擦痕は氷河の流れた場合には無論出来るだらうが現在の積雪でも山肌を一年に何尺か滑る場合は積雪の底にくつついた小石のため矢張り氷河と同じ擦痕が出来ると違ひない」との觀點から昨秋十月長野縣大町小學校の平林謙三と

り山肌を幅一メートルばかり滑かに磨かせて下山しその結果を觀望して待つたが本年七月七日大雪突の雪解けを待つて平林謙三が登山して見ると昨秋繪圖に磨いた岩面には鮮かに二十本の「氷河の跡」と同様の擦痕、付いてゐた今村

説が目のあたり驚きされてゐるのを發見今村助教授に報告したが此の新研究によつて從來の氷河遺説は根柢から覆へされ、同時に十萬年前頃と想像されてゐる氷河時代に至大な關係をもつ動植物、考古學上にも重大な

影響を與へることになつた、この實驗で得られた擦痕は「氷河の跡」とされてゐたものと略同程度の大きさで幅深さ一ミリ乃至四ミリであるが十年間繰返す時にはこの大きさの條が二百二十本、百年には二千二百本といふ計算になり十萬年の間に實に厚さ六七尺の岩石が積雪の爲に削りとられることになる、從

權威 今村力三氏氏の令息

東京文理大助教授

今村學士が十二日學士院總會で「白馬山の上の雪蝕現象」と題して發表した研究によつて端なくも問題となるに至つたものである、今村學士は今まで氷河の痕跡とされた際のついでに岩石に對して大きな疑問を抱き「これらの擦痕は氷河の流れた場合には無論出来るだらうが現在の積雪でも山肌を一年に何尺か滑る場合は積雪の底にくつついた小石のため矢張り氷河と同じ擦痕が出来ると違ひない」との觀點から昨秋十月長野縣大町小學校の平林謙三と

日光の「鳴龍」室の空氣振動

中村博士の研究

日光の本館や村山山日製音響室の「鳴龍」は名匠の超人的傑作として稱讃され、神秘的な音響さへ持たれてゐたが、今回中村清二博士が「鳴龍」の「神妙」を科學的に實驗説明し、久しく不可解なものとなつてゐた「鳴龍」が室内の

構造と空氣の振動との關係によるものであることが明かにされ、即ち中村博士は鳴龍について下されてゐた干渉説と唸り説とに疑問を抱いて昨年科學博物館を通じて鳴龍と同現象を起して鳴き聲を生じる場所を懸賞で募集、飛鳥山の音無齋が一等賞で募集、飛鳥山の音無齋が一等賞で募集したが爾來同博士は同場所について帝大航空研究所小幡重一博士、東京高等商船の栗原豊教授と共に實地研究を行った結果、前記二説と全然異つた新しい結果が確められたそれによれば音無齋は三つのアーチから成るコンクリート橋であるが、中一つは薄、一つは川、もう一つのアーチの

下をコンクリートの道路が通じてをり、博士はこの道路のノコギリにマイクとオツシログラフ（録音機）を裝置し、音で拍子木を打つと唸りのやう

な音が二分の一秒置きこゝえ、オツシログラフには約九百九十回の振動が間をおいて記録されたそこで音路を平面として、音波から出る一つの音波の方向を精密に調べたところ音波のマイクを時を異にして何回も通過することが明らかになつたもので「鳴龍」現象もこれと同理論によるものと判明即ち一つの音源から出發した音波、床や天井によつて

反射して色々の進路を通つて、臨時に耳に聞えて來てこれが恰も天井の龍、鳴いてゐるやうな現象を示してゐたことが實驗されたのである



時曇 日誌

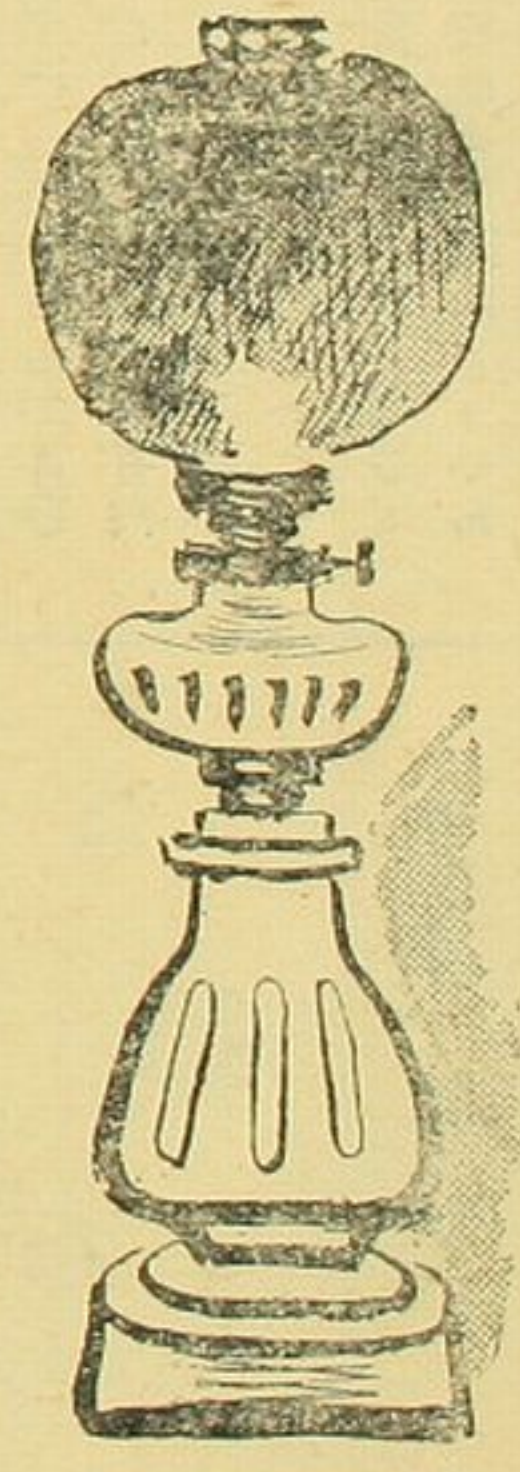
猫の手までも借りたいとあせみどろになつて働いてゐる農民、行樂の秋を紅葉の山に滿喫せんとする都主人、小春日和の田園に汗と香水のにはびが交錯

小黒川悲劇の主人公、教育家の

十月鴉公の楽

幻太夫の饗宴

永見 文太郎



吉原品川樓の盛紫が、馴染客谷豊榮と心中したのは、明治十三年十月一日の拂曉であつた。當時の吉原といへば、歌麿描く情趣は亡びつくしたまでも、未だ芳年の、圓周の、浮世繪の世界であつた。心中の評判は秋風と共にひろがって、やがて「北花盛紫」「色吉原盛系補福」などの草雙紙が巷間にもはやさされた。このことは畏友加藤藤吉氏が本誌七月號に詳しく書いてあるから、ここでは云はない。ところが間もなく奇抜な女が現はれて、自ら二代目盛紫の名乗りを擧げ人の厭がる心中のあつた部屋に納まり、床には佛龕を掛け襖には蓮華荷葉を描き、更に福福の背一面に阿彌陀像とその後光を金糸で縫ひつふし、裾に

は天人散華の圖、中流は野晒しの圓籠と卒塔婆、下着は流れに蓮華の染抜きさいふ出立ちで、大いに世間を驚かした。

その頃のことである。二代目盛紫が先代盛紫と谷の追善のために華々しい法要を営んだのは……

初代盛紫と谷豊榮の死骸は吉原の慣例に依つて箕輪の淨閑寺に葬られたのであるが、後に品川樓主人がその菩提所深川浄心寺に「新比翼塚」を建て、供養した（これは二代目盛紫の建てるところとも云はれ、後に谷の遺族から故障が出て淨閑寺に移された）。法要はこの深川淨閑寺で執行はれた。盛紫は例の阿彌陀如來の福福に、下着は賽の河原を染出し、蓮華模様の緋縮緬の長襦袢に乗つた俣も蓮華の高蔭繪で、車夫の半天へま

藝者太鼓持は勿論揃ひの仕着せで、惣勢八十四人が浄心寺へ繰出して盛大な追善法要を営んだのである。歸りに平清で御馳走があつた。

自分の客には残らず招待状を出し色氣抜きの大一座、先づお茶が出て菓子が出る——この菓子が矢張り蓮華の打物、やがて、盃が一巡する頃、平清のおもてへかゝつた旅僧が法要を見て佛のために回向したいと申入れた。風色の法衣を着けた旅僧が案内されて來たのを見ると、太鼓持が「これは師匠！」と驚く人品いやしからぬも道理、三遊亭圓朝だつたのである。圓朝は法衣を脱いで追善にふさはしい話を一席やつた。

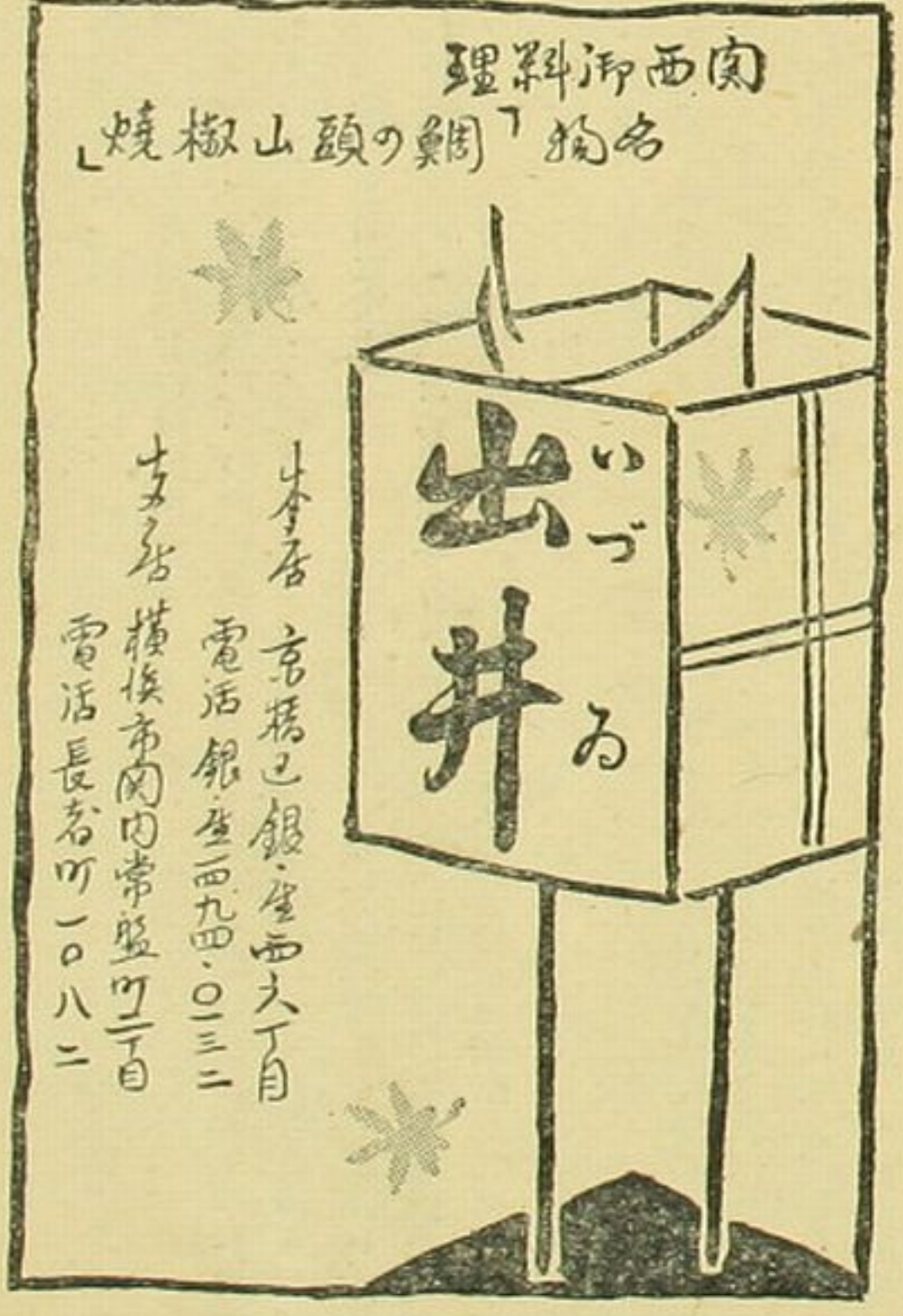
相當凝つたもので、その日招かれた客は己も追善のために五十兩崇つた、三十圓をとられたと苦笑ものであつたといふことである。

その頃の二代目盛紫の全盛を傳へる一挿話盛紫が品川樓の主人に對つて、専用浴室を新築して貰ひたいと要求したのである。主人も盛紫の増上慢を憎まずにはおられないが、素氣なく突げねるには餘りに全盛を極めてゐる盛紫だつた。彼は澁々ながら新

築にとりかゝらうとした。ところが、これを聞いたお職脇の金龍（後角海老へ住換へた）が納まらない、金龍は

常日頃盛紫と全盛を争つて仇敵の間柄であつたから、これが亦直ちに樓主に對つて専用浴室の新築を申込んだのである。主人も盛紫に許して金龍に許さぬといふ譯には行かず、不承々に承諾した。さあ、かうなると意氣張上他の娼妓も黙つてはゐられなくなり、全樓の娼妓が吾も吾も

と専用浴室の新築を申込む、若しこれを一々許すとすれば品川樓は全樓を擧げて浴室にし、ても未だ足りないといふ騒ぎになつてしまつた。それで盛紫を百方説いて、専用浴室新築のことは漸々取止めになつたといふことである。しかし、加藤君も書いたやうに、この全盛も長い壽命はなかつた。明治十四年、市村座の五月狂言にこの情死が——「盛系好比翼新形」（三幕八場）——



小倉 吉原三銀、金西大丁目
電話 銀五二四九、〇三二
横橋市内常盤町二丁目
番店長名町一〇八二

幻太夫の饗宴

永見 文太郎



古原品川樓の盛業が、馴染客谷豊榮と心中は天人散華の圖、中着は野晒しの鯛鱈と辛塔したのは、明治十三年十月一日の拂曉であつた、下着は流れに蓮華の染抜きといふ出立ちで、大いに世間を驚かした。

當時の吉原といへば、歌麿描く情趣は亡び

そればかりか、彼女は夜半五時になると

のほは：

初代盛業と谷豊榮の死骸は吉原の慣例に依

つくとしたまでも、未だ芳年の、國周の、浮世客があらうがあるまいが、まるで物に憑かれ繪の世界であつた。心中の評判は秋風と共にたやうに床を抜出して、長襦袢のまゝ、姿見のひろがつて、やがて「北郎花盛業」「色吉原前へびたりと座り」お姉さま。いろ／＼お引盛系福福」などの草雙紙が巷間にもはやさ廻しありがたうござんす。二代目盛業このとられた。このことは畏友加藤藤吉氏が本誌七月ころから厚く御禮申上げます」と生ける人に對して詳しく書いてあるから、では云はない

盛業がかう云ふ途端、先代盛業の血まみれ

盛業は例の阿彌陀如来の補福に、下着は賽

この大々的宣傳は再び彼女の人氣を煽つて

彼女のたゞへ通つた客の中には、浮世繪の

「御座校」を書いたといふ説があり、二十五

六年頃相馬事件の法廷に石工石川田鶴と同姓

同名の故に間違はれて立つたこと、三十三年

頃谷中平坂邊で有福に暮らしてゐたといふこ

と、四十年頃上野廣小路大時計の向ふに玩具

昭和一〇・九・八

その頃のことである。二代目盛業が先代盛

紫と谷の追善のために華々しい法要を營んだ

のほは：

初代盛業と谷豊榮の死骸は吉原の慣例に依

つて其輪の淨閑寺に葬られたのであるが、後

に品川樓主人がその菩提所深川淨心寺に「新

比翼塚」を建て、供養した（これは二代目盛

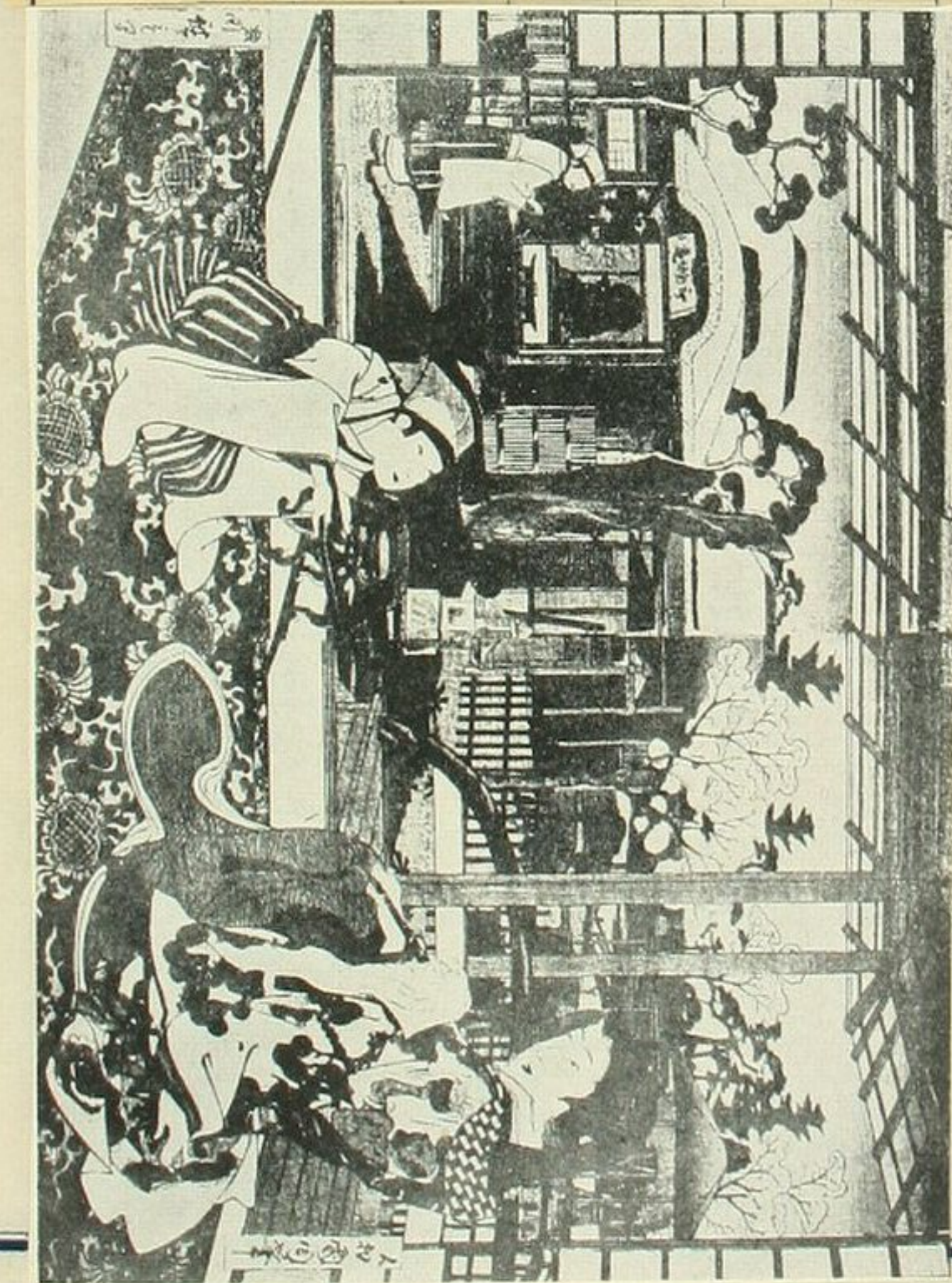
業の建てるところとも云はれ、後に谷の道族

から故障が出て淨閑寺に移された。

法要はこの深川淨閑寺で執行された。

盛業は例の阿彌陀如来の補福に、下着は賽

の河原を染出し、蓮華模様の緋縮緬の長襦袢



は天散華の圖、中着は野晒しの鯛鱈と辛塔

したのは、明治十三年十月一日の拂曉であつ

た。大いに世間を驚かした。

そればかりか、彼女は夜半五時になると

のほは：

初代盛業と谷豊榮の死骸は吉原の慣例に依

つて其輪の淨閑寺に葬られたのであるが、後

に品川樓主人がその菩提所深川淨心寺に「新

比翼塚」を建て、供養した（これは二代目盛

業の建てるところとも云はれ、後に谷の道族

この大々的宣傳は再び彼女の人氣を煽つて

彼女のたゞへ通つた客の中には、浮世繪の

「御座校」を書いたといふ説があり、二十五

六年頃相馬事件の法廷に石工石川田鶴と同姓

同名の故に間違はれて立つたこと、三十三年

頃谷中平坂邊で有福に暮らしてゐたといふこ

と、四十年頃上野廣小路大時計の向ふに玩具

昭和一〇・九・八

その頃のことである。二代目盛業が先代盛

紫と谷の追善のために華々しい法要を營んだ

のほは：

初代盛業と谷豊榮の死骸は吉原の慣例に依

つて其輪の淨閑寺に葬られたのであるが、後

に品川樓主人がその菩提所深川淨心寺に「新

比翼塚」を建て、供養した（これは二代目盛

業の建てるところとも云はれ、後に谷の道族

から故障が出て淨閑寺に移された。

法要はこの深川淨閑寺で執行された。

盛業は例の阿彌陀如来の補福に、下着は賽

の河原を染出し、蓮華模様の緋縮緬の長襦袢

は天散華の圖、中着は野晒しの鯛鱈と辛塔

したのは、明治十三年十月一日の拂曉であつ

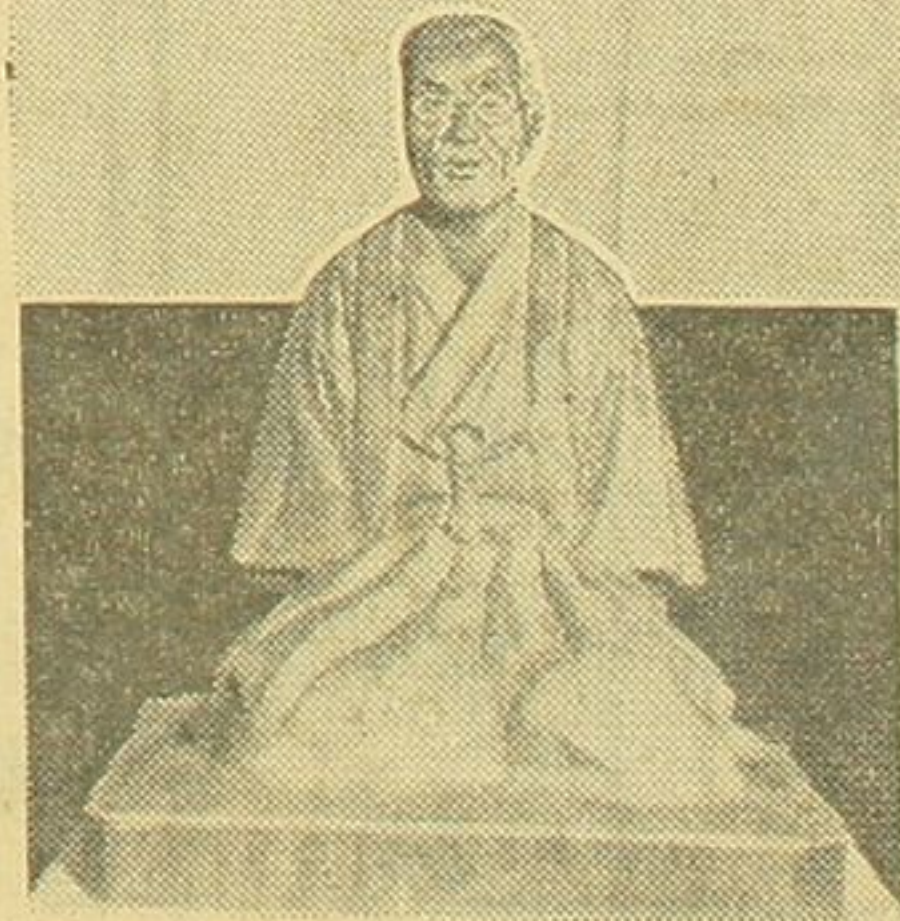
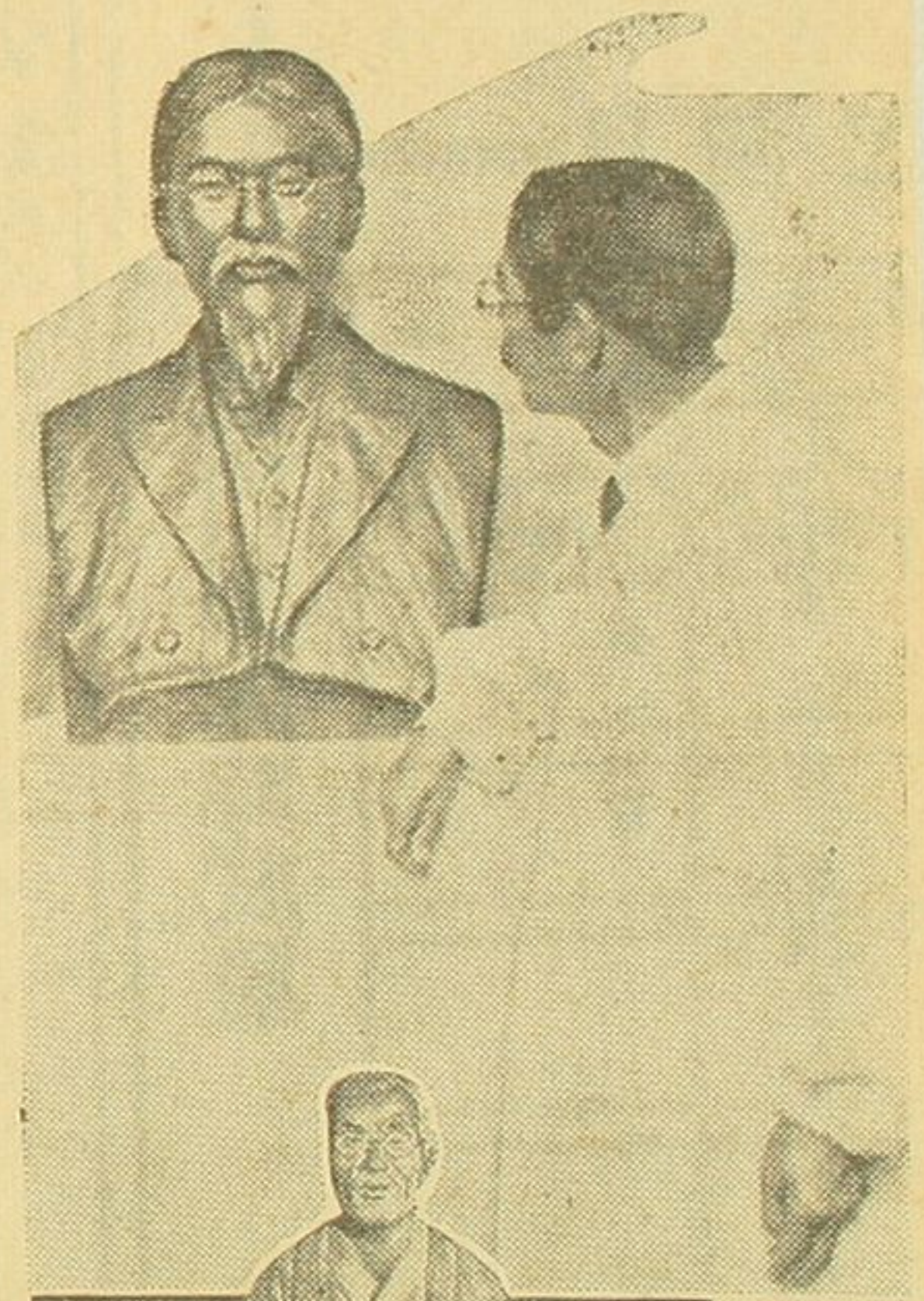
た。大いに世間を驚かした。

そればかりか、彼女は夜半五時になると

のほは：

三 重 奏

偉徳を仰ぐ 小野梓先生の胸像 大隈 庭園に建設 來月盛大な除幕式



寫眞(上)小野梓先生の胸像と作者本小白雲翁(下)の沼の像(本報記者撮影)

まで手にかけた銅像は数知れずといふ、本山氏を世田ヶ谷のアトリエに訪れると、新講事堂に隣る伊藤博文公の十七、八尺の立像製作の手を休めて

私は同郷の先輩坂本さんから郷土の生んだ明治の先覚者小野梓先生の胸像を個人で建てられるといふ話を聞き、喜んで製作する決心を致しました、然し小野先生を一度も見たことなかつ

風貌 性格を知る由もなかつたので、残された写真と、高田先生、前田先生方の話を聞き、更に先生の書かれたものを頼んでゆく中に、長い間の仕事に従事してゐる關係から心腹ともいふべきものがあつた、ただん先生の面影が心の中に浮んできました、氣性のすくれた猛き心の反面には、いひ知れぬ温情が認められ、眉宇が引き締つてをられたのは先覺者としての

聰明さを物語るものでせう、先生に關して知り得るだけの知識をつめ込んで製作に着手したのは六月でしたが、それ以來絶へず坂本さんに見て戴き細かい注意を聞いて

修正 ました、その間坂本さんから「先生はもつと長面だつた」といはれて始めから直したところへありました、長い間の苦心もやつと實を結び、これが大隈會館の庭園に建つのかと思ふと嬉しい感じがします

高橋にも拘らず元氣に稱頌を續け、龍馬とか院殿とかを相手にせず百年後の聖蹟大衆を相手にするのである、故先生が

野人 につくされた生涯にも似たものがある、芝公園の板垣、後藤兩伯、九段の品川、東京府の井上子、海軍省の西郷元帥、川村大將、東郷元帥、海軍第一、陸軍大將、淺野第一、野澤等々を今日

△△の行く手を見送つてくれるといふ嬉しいニュース、美談の北は吾が國出版界の重鎮、山房の社長坂本新治馬氏である、氏は十七歳の時友を賣つて上京、小野先生の書生となつて勉強し、先生亡き後は遺業の一つ東洋館書店の經營を引受け、博多の親戚と闘ひながら今日の富山房を築き上げた立志傳中の一人である、氏は本年が小野先生の五十年忌に當るので、年若くして逝かれた偉人「小野梓」を永遠に敬慕すべく胸像を建設するものとして自分が今まで努力して來たものである、この先生を想ひ出してお世話になつたお禮の一端にも胸像設立を思ひつき學園當局にも諸つたところ喜んで應ぜられ、敷地も大隈會館に定められ私としても喜んでゐる次第です

先生 毎日休かき大隈會館を訪問され天下國家を論じられたが忙しい一生で、一度も庭園をみられたことはなかつた、今庭園に立てば毎日美しい庭園がみられてこそ御満足せう

苦心の製作 本小白雲老語る 製作者本小白雲氏は小野先生とは同郷の土佐宿毛の人で六十五歳の

お世話になつた お禮の万分の一に 坂本氏 設立への心境

坂本氏を富山房に訪ねると、驚くべきに次の如く語つた、小野先生は明治の生んだ大學者であり大政治家であつた、卅五年の短い一生だつたがあれだけの大きい事業を擧げられたことは驚嘆に値する、條約改正論を説き、財政を論じ

政黨 破された等先見の明ありしことはその一部を語るものである、大隈侯と共に創立された東京專門學校は今日の早稲田大學となつて大成し、立憲政黨も民政黨となつて隆盛に向つてゐる、教育は良書の出版が任はねばならぬとして東洋館を設立され、また西洋の良書を普及せしめるべく輸入にも手を出された、その東洋館も今日の富山房となつてゐる、富山房は先生の理想の一部

△△の腐敗すべきも喝破されしことはその一部を語るものである、大隈侯と共に創立された東京專門學校は今日の早稲田大學となつて大成し、立憲政黨も民政黨となつて隆盛に向つてゐる、教育は良書の出版が任はねばならぬとして東洋館を設立され、また西洋の良書を普及せしめるべく輸入にも手を出された、その東洋館も今日の富山房となつてゐる、富山房は先生の理想の一部

△△の腐敗すべきも喝破されしことはその一部を語るものである、大隈侯と共に創立された東京專門學校は今日の早稲田大學となつて大成し、立憲政黨も民政黨となつて隆盛に向つてゐる、教育は良書の出版が任はねばならぬとして東洋館を設立され、また西洋の良書を普及せしめるべく輸入にも手を出された、その東洋館も今日の富山房となつてゐる、富山房は先生の理想の一部

同慶興の事念後成進し皇親へんし薄云の吉根と前々六十翁
母し建音り由縁音る各條の音之類もす身以罪人翁關系各一
封齊の晴和類々音響の光榮の音る大御封し還回來流せり
宗廟祖の關基の給り開前平間つり異く大五天皇東宮の
母々當末日翁土晴門天皇の晴宇（今もり藤四百十平前）心
事爽り野里の給り了晴暮冬の衣々口授了了る附附の不聖刻
然るに當末の本堂口去る即麻十平十一日獄夫の翁翁の雨霧
旅歴全園の美勝さ呈し各々母の取らるる一各祖と味類類
さつり翁翁さる奉替さ給るる南のり音響さる附附類類類
以眼遊翁兼書の紙り宗知し開營の朝風到園し理り契工了翁
早際田大學並に相國慈人國陳向土會の晴謝氏さ翁了晴暮祖
庶幕の篤意さ表開する事と味類り幸心の平内家と晴同意と
さ以了當祖内景の景觀紙点の武主の晴暮祖さ味了味也庶翁
本平二日二十八日武主の晴遊去り類し殊將四會以登障明夫
身し由縁開進類

謹啓 愈々御清穆奉賀候

陳者當寺境内西丘の堂域に永眠せらるゝ故坪内逍遙先生と熱海町との因縁は六十年の長きに亘り先生は夙に温泉の優良と氣候の溫和と風光の秀麗を愛賞せられ文章に歌詞にペーシエントに或は直接間接の指導に依り怡樂郷熱海の繁榮に多大の寄與を賜りしこゝ小學兒童に至るまで熟知する所に御座候

時に先生の晩年當寺の隣接地に雙柿舎の清居を設けられしより此處にて名著大譯の執筆に没頭せられし傍當寺内外の本草を始め遠近の海山を我家の庭園とも眺めて疲勞を醫されし由確聞致候

本年二月二十八日先生の御逝去に際し熱海町會は翌朝即決を以て當地境内の景勝地点に先生の御墓地を相し聊か遺徳追慕の誠意を表明する事と相成り幸ひに坪内家の御同意と早稻田大學並に財團法人國劇向上會の御協力を得て御墓所は別紙繪葉書の通り完成し町營の附屬庭園も既に竣工し後ろには透邇たる翠巒を繞らし前には蒼茫たる相模灘を擁し宛然公園の美觀を呈し洽く世に知らるゝ一名所と相成候然るに當寺の本堂は去る昭和七年十一月焼失の後僅に雨露を凌ぐ假屋の儘にて御墓參の方々に對しても慚愧に不堪候抑々當寺は後土御門天皇の御宇(今より約四百七十年前)心宗禪師の開基に係り明治年間には 畏くも大正天皇東宮に被在し御時屢々行啓の光榮に浴し故大隈侯も數回來詣せられし事有り由緒有る名刹に有之候とすれば罹災後關係者一同復興に専念努力致し居候へども窮乏の寺財と僅々六十餘戸の檀家の協力だけにては再建の見込み相立申さず一同困却罷在候

若し此儘打過候はんには廢寺同様の状態と相成り先生の御墓所の面目にも係はり延いて熱海町の名譽にも關すべきかと憂慮仕候乃ち關係者一同協議の結果本堂再建促進の途は篤志家諸彦の淨財を募る外に無しと存じ茲に御寄附を乞ふ事に相定申候公私御多端の際甚だ御迷惑なる儀と存候得共名蹟保護の趣旨御諒承の上御喜捨あらん事を切に懇願仕候尙御寄附の金額は一口貳圓として幾口にても結構に御座候間何卒本寺再興資金として若干御喜捨相仰ぎ度伏而御懇請申上候

敬 具

昭和十年

月

日

伊豆熱海町水口

臨濟宗

海

藏

寺

を以て當地境内の景勝地点に先生の御墓地を相し聊か遺徳追慕の誠意を表明する事と相成り幸ひに坪内家の御同意と早稻田大學並に財團法人國劇向上會の御協力を得て御墓所は別紙繪葉書の通り完成し町營の附屬庭園も既に竣工し後ろには透邇たる翠巒を繞らし前には蒼茫たる相模灘を擁し宛然公園の美觀を呈し治く世に知らるゝ一名所と相成候然るに當寺の本堂は去る昭和七年十一月焼失の後僅に雨露を凌ぐ假屋の儘にて御墓參の方々に對しても慚愧に不堪候抑々當寺は後土御門天皇の御宇(今より約四百七十年前)心宗禪師の開基に係り明治年間には 畏くも大正天皇東宮に被在し御時屢々行啓の光榮に浴し 故大隈侯も數回來詣せられし事有り由緒有る名刹に有之候さすれば罹災後關係者一同復興に専念努力致し居候へども窮乏の寺財と僅々六十餘戸の檀家の協力だけにては再建の見込み相立申さず一同困却罷在候

若し此儘打過候はんには廢寺同様の状態と相成り先生の御墓所の面目にも係はり延いて熱海町の名譽にも關すべきかと憂慮仕候乃ち關係者一同協議の結果本堂再建促進の途は篤志家諸彦の淨財を募る外に無しと存じ茲に御寄附を乞ふ事に相定申候公私御多端の際甚だ御迷惑なる儀と存候得共名蹟保護の趣旨御諒承の上御喜捨あらん事を切に懇願仕候尙御寄附の金額は一口貳圓として幾口にても結構に御座候間何卒本寺再興資金として若干御喜捨相仰ぎ度伏而御懇請申上候

敬具

昭和十年 月 日

伊豆熱海町水口

臨濟宗 海藏寺

- | | |
|-------------|-----------|
| 住職 | 馬場直道 |
| 檀徒總代 | 水谷良雄 |
| 全 | 高橋政吉 |
| 全 | 水谷徳太郎 |
| 全 | 石井仙次 |
| 全 | 濱田房吉 |
| 全 | 山田友吉 |
| 後援者 | 熱海町長 坂本藤八 |
| 財團法人 國劇向上會長 | 市嶋謙吉 |

殿



海底の美魚模様 命がけの龍宮行 深海の神祕を見る

魚群大行進 海底アルプス

「魚群大行進」は、潜水艇「マンホール」が、水深千メートルのところで、魚群の大行進を見た。魚群は、水深千メートルのところで、魚群の大行進を見た。魚群は、水深千メートルのところで、魚群の大行進を見た。



いよ／＼海魚へ

「魚群大行進」は、潜水艇「マンホール」が、水深千メートルのところで、魚群の大行進を見た。魚群は、水深千メートルのところで、魚群の大行進を見た。魚群は、水深千メートルのところで、魚群の大行進を見た。

海底物理学 赤と紫が消ゆ

「赤と紫が消ゆ」は、潜水艇「マンホール」が、水深千メートルのところで、赤と紫の色が見えなくなった。これは、深海の物理学の現象である。

知らぬが佛 潜水王の言葉

「知らぬが佛」は、潜水艇「マンホール」の乗組員が、潜水王の言葉を聞いた。潜水王は、深海の神祕について多くのことを知っている。



潜水王マンホールへ

もう駄目だ 逃げ行く空

「もう駄目だ」は、潜水艇「マンホール」が、水深千メートルのところで、逃げ行く空を見た。これは、深海の神祕の現象である。

九死に一生 海面にうかが

「九死に一生」は、潜水艇「マンホール」が、水深千メートルのところで、海面にうかがを見た。これは、深海の神祕の現象である。





發行所

通覽圖



